京都府遺跡調査概報

第103冊

- 1. 南丹区域農用地総合整備事業関係遺跡
 - (1)池上遺跡第8次
 - (2)池上古里遺跡第2次
- 2. 府営ほ場整備事業(三俣地区)関係遺跡
 - (1) 杉北遺跡第7次
 - (2) 里遺跡第2次
- 3. 内里八丁遺跡第16 · 17次
- 4. 三山木遺跡第4次
- 5. 国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡

2 0 0 2

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版 保津車塚古墳(案察使1号墳)第2次



(1)全景1(右が北)



(2)全景 2 (右が北)

序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を 行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜 り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要がありますが、当センターでは、それに対応するために3種の刊行物を刊行しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成12・13年度に実施した発掘調査のうち、緑資源公団西部支社、京都府南丹土地改良事務所、京都府土木建築部、京田辺市教育委員会、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて行った南丹区域農用地総合整備事業関係遺跡、府営ほ場整備事業(三俣地区)関係遺跡、内里八丁遺跡第16・17次、三山木遺跡第4次、国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、八木町教育委員会、亀岡市教育委員会、八 幡市教育委員会、京田辺市教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただき ました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成14年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 理 事 長 樋 口 隆 康

凡例

- 1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

 - 1. 南丹区域農用地総合整備事業関係遺跡 2. 府営ほ場整備事業(三俣地区)関係遺跡
 - 3. 内里八丁遺跡第16·17次
- 4. 三山木遺跡第4次
- 5. 国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡
- 2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	南丹区域農用地総合整 備事業関係遺跡	船井郡八木町池上	平12.11.1~ 平13.2.27	緑資源公団西部支社	岡﨑研一 田代 弘 野島 永
2.	府営ほ場整備事業(三 俣地区)関係遺跡	亀岡市旭町杉・樋 ノ口	平13.7.4~8.20	京都府南丹土地改良事務所	水谷壽克 戸原和人 小池 寛
3.	内里八丁遺跡第16·17 次	八幡市内里小字日 向堂ほか	平12.12.20~平13. 2.27 平13.4.18~9.27	京都府土木建築部	石尾政信 石崎善久
4.	三山木遺跡第4次	京田辺市三山木	平13.5.21~10.26	京田辺市	引原茂治
5.	国営農地再編整備事業 「亀岡地区」関係遺跡	亀岡市保津町社ノ 下	平13.9.4~12.13	農林水産省近畿農政局	戸原和人

- 3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。
- 4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。

本 文 目 次

1. 南丹区域農用地総合整備事業関係遺跡-----1

2. 府営	ほ場整備事業(三俣地区)関係遺跡	41
3. 内里	八丁遺跡第16・17次	55
4. 三山	木遺跡第4次	75
5. 国営	農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡	95
	付 表 目 次	
1.南:	丹区域農用地総合整備事業関係遺跡	
(1)池上	上遺跡第8次	
付表1	池上遺跡・池上古里遺跡調査一覧表	1
付表2	池上遺跡検出遺構一覧表	16
付表3	池上遺跡出土土器観察表	30
付表4	池上遺跡出土石器観察表	33
(2)池上	上古里遺跡第 2 次	
付表5	池上古里遺跡出土土器観察表	39
3.内	里八丁遺跡第16・17次	
付表6	内里八丁遺跡調査次数一覧表	74
4. ≡	山木遺跡第 4 次	
付表7	三山木遺跡調査一覧表	75
	挿 図 目 次	
1. 南:	丹区域農用地総合整備事業関係遺跡	
(1)池上	上遺跡第8次	
第1図	調査地および周辺主要遺跡分布図	
第2図	調査地配置図	4

第3図	遺構配置図・土層図	- 6
第4図	S H140実測図	-7
第5図	S D132·101、S K139実測図	- 8
第6図	S K 105、S H 122実測図	- 9
第7図	S H01 · 02実測図	-11
第8図	S H108~110実測図	-12
第9図	SH115·116、SK104、SH108内焼土実測図	-13
第10図	SH102·137、SK152実測図	-14
第11図	S B 163実測図	-15
第12図	出土遺物実測図(1)	19
第13図	出土遺物実測図(2)	20
第14図	出土遺物実測図(3)	21
第15図	出土遺物実測図(4)	22
第16図	出土遺物実測図(5)	23
第17図	出土遺物実測図(6)	-24
第18図	出土遺物実測図(7)	25
第19図	出土遺物実測図(8)	27
第20図	出土遺物実測図(9)	-28
第21図	出土遺物実測図(10)	29
第22図	出土遺物実測図(11)	30
(2)池上	古里遺跡第2次	
第23図	遺構配置図	-36
第24図	S H12·23·24実測図	-37
第25図	出土遺物実測図(1)	38
2. 府営	曾ほ場整備事業(三俣地区)関係遺跡	
(1)杉北	遺跡第7次	
第26図	杉北·里遺跡調査地位置図	-41
第27図	調査トレンチ配置図	-42
第28図	検出遺構平面図	-43
第29図	掘立柱建物跡SB04実測図	-44
第30図	掘立柱建物跡SB05実測図	-45
第31図	掘立柱建物跡SB06実測図	-46
第32図	掘立柱建物跡 S B 07実測図	-47
第33図	出土遺物実測図	-48
(2)里遺	跡第2次	

第34図	遺構平面図	50
第35図	掘立柱建物跡 1~5 実測図	51
第36図	土坑48実測図	52
第37図	出土遺物実測図	53
3.内	里八丁遺跡第16・17次	
第38図	調査地周辺遺跡分布図	56
第39図	調査区配置図	58
第40図	17A地区土層模式図	58
第41図	17A地区上層遺構平面図	59
第42図	17A地区下層遺構平面図	60
第43図	17A地区出土遺物実測図	61
第44図	17B地区第1遺構面遺構平面図	63
第45図	17日地区第2遺構面遺構平面図	64
第46図	17日地区第2遺構面出土遺物実測図	65
第47図	17日地区第3遺構面遺構平面図	67
第48図	S D 205出土遺物実測図	69
第49図	S D247出土遺物実測図	71
第50図	17日地区第4遺構面遺構平面図	72
第51図	S H340出土遺物実測図	73
4. ≡	山木遺跡第4次	
第52図	調査地および周辺遺跡分布図	76
第53図	区画整理区域内の遺跡分布図	77
第54図	調査地位置図	78
第55図	調査地柱状断面図	79
第56図	1トレンチ平面図	80
第57図	S K130勾玉出土状况実測図	81
第58図	S G 107実測図	81
第59図	S D105埋設土管	82
第60図	2トレンチ平面図	83
第61図	3トレンチ平面図	84
第62図	1トレンチ出土遺物実測図	85
第63図	2トレンチ出土遺物実測図	87
第64図	3トレンチ出土遺物実測図	88
第65図	石製品実測図	90

5. 国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡

保津車塚古墳(案察使1号墳)第2次

第66図	調査地位置図	93
第67図	調査トレンチ配置図	94
第68図	調査区平面図	95
第69図	土層断面図(1)	96
第70図	土層断面図(2)	97
第71図	出土遺物実測図(1)	99
第72図	出土遺物実測図(2)	100

図 版 目 次

1. 南丹区域農用地総合整備事業関係遺跡

(1)池上遺] 跡第8次	
図版第1	(1)調査地全景(上が北)	(2) S H 140・108全景(上が北)
図版第2	(1) S H140近景(西から)	(2) S H 140入口部近景(北から)
	(3) S H140中央土坑堆積状況(南から)	
図版第3	(1)SD132近景(南東から)	(2)SD101、SK139近景(東から)
	(3) S K139近景(東から)	
図版第4	(1) S K105近景(東から)	(2) S K 105堆積状況(北から)
	(3) S H122近景(北から)	
図版第5	(1) S H01・02近景(南東から)	(2) S H01近景(南から)
	(3) S H01竈近景(南から)	
図版第6	(1) S H02近景(北から)	(2)SH02竈近景(南から)
	(3) S H02竈半掘状況(東から)	
図版第7	(1) S H108近景(西から)	(2)SH108内焼土断ち割り状況(東から)
	(3) S H110近景(北から)	
図版第8	(1) S H115全景(南から)	(2)SK152近景(南から)
	(3) S K104近景(南西から)	
図版第9	出土遺物(1)	
図版第10	出土遺物(2)	
図版第11	出土遺物(3)	
図版第12	出土遺物(4)	
図版第13	出土遺物(5)	

(2)池上古里遺跡第2次

図版第14 (1)調査地全景(東から)

(2)調査地東部近景(東から)

(3) S H24近景(南から)

図版第15 (1) S H12近景(北から)

(2) S H23近景(北から)

(3) S H20近景(南から)

図版第16 (1) S H 12 近景(北から)

(2) S H23北側土坑近景(北から)

(3)出土遺物

2. 府営ほ場整備事業(三俣地区)関係遺跡

(1)杉北遺跡第7次

図版第17 (1)調査地全景(北東から)

(2) 竪穴式住居跡 S H 01(北西から)

図版第18 (2)掘立柱建物跡SB04(南西から)

(2) 掘立柱建物跡 S B 05(南西から)

図版第19 (1)掘立柱建物跡SB06(北東から)

(2)掘立柱建物跡SB07(北西から)

図版第20 (1)出土遺物(1)

(2)出土遺物(2)

(2) 里遺跡第2次

図版第21 (1)調査地遠景(北東から)

(2)調査地遠景(北から)

図版第22 (1)調査地全景(上が北)

(2) 掘立柱建物跡1全景(上が北)

図版第23 (1)掘立柱建物跡2全景(上が北)

(2)掘立柱建物跡全景(南西から)

図版第24 (1)土坑48検出状況(西から)

(2)出土遺物

3. 内里八丁遺跡第16·17次

図版第25 (1)調査地全景(西上空から)

(2) B地区第3遺構面全景(北上空から)

図版第26 (1) A 地区調査前(東から)

(2) A 地区南トレンチ全景(西から)

(3) A地区南トレンチ島畠(南から)

図版第27 (1) B地区調査前(西から)

(2) B地区第2遺構面(南から)

(3) B地区第2遺構面(北から)

図版第28 (1) B地区第2遺構面西側素掘り溝群・建物群(南から)

(2) B地区第1遺構面素掘り溝群(南から)

(3) B地区第3遺構面全景(南から)

図版第29

(1) B地区第3遺構面全景(南上空から) (2) B地区第3遺構面全景(右上が北)

図版第30

(1) B地区SD205・247・258(北から) (2) B地区SD247(南から)

(3) B地区SD247中央部断面(南から)

図版第31

(1) B地区第4遺構面全景(右上が北)

(2) B地区西側第4遺構面竪穴式住居跡群(右が北)

図版第32

(1) B地区SH303(東から)

(2) B地区 S H335(東から)

(3) B 地区 S H 350遺物出土状況(北から)

出土遺物(1) 図版第33

図版第34 出土遺物(2)

4. 三山木遺跡第4次

図版第35	(1)調査地遠景(南上空から)	(2)調査地全景(北上空から)
図版第36	(1) 1トレンチ調査前全景(北東から)	(2) 2 トレンチ調査前全景(北から)
	(3) 3トレンチ調査前全景(南東から)	
図版第37	(1) 1 トレンチ全景(南東から)	(2) 1 トレンチ全景(北東から)
	(3)SD113・118(南東から)	(4) S K130勾玉出土状況(北から)
図版第38	(1) S B 10(南から)	(2)SG107(東から)
	(3) S D 202・203(西から)	(4)SD105(北西から)
図版第39	(1) 2 トレンチ上層全景(南から)	(2)SD204(西から)
	(3) S G107(西から)	(4) S K 20(西から)
図版第40	(1) S E 206(北から)	(2) S E 206斎串出土状況(南から)
	(3) S K21(西から)	(4) 2 トレンチ下層全景(南から)
図版第41	(1) 3 トレンチ全景(北から)	(2) 3 トレンチ全景(南から)
	(3)NR310遺物出土状況(東から)	(4) N R 310遺物出土状況(南から)
図版第42	出土遺物(1)	
図版第43	出土遺物(2)	
図版第44	(1) 石製品	(2) 剝片

5. 国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡

保津車塚古墳(案察使1号墳)第2次

図版第45	(1)調査地遠景(西から)	(2)遺構検出状況(東から)
図版第46	(1)くびれ部葺石およびテラス検出状況(東から)
	(2)前方部周濠および葺石検出状況(北西	から)
図版第47	(1)内濠SD01北断面(G-G'地点)(南太	から)
	(2)外濠SD02北断面(B-B'地点)(南太	から)
図版第48	(1)前方部確認調査区(南から)	(2)前方部基底部検出状況(左が北)
図版第49	(1) 楯形木製品25出土状況(東から)	(2) 楯形木製品24出土状況(東から)
図版第50	(1)笠形木製品27・29出土状況(東から)	(2)須恵器10・13出土状況(東から)
図版第51	出土遺物(1)	
図版第52	出土遺物(2)	

1. 南丹区域農用地総合整備事業関係遺跡発掘調査概要

はじめに

池上遺跡は、船井郡八木町池上に所在する。遺跡は、筏森山の東山麓に東西約550m、南北約600mの範囲に広がる弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。過去7次にわたる試掘・本調査が実施され、弥生時代から古墳時代の遺構が良好に遺存する集落遺跡として、その詳細が徐々に解明されつつある。平成13年度は、4か所で発掘調査が行われた。池上古里遺跡は、同町古里に所在し、池上遺跡の東側に隣接する。平成11年度の試掘調査で新たに確認された遺跡である。今回、報告する概要は、池上遺跡第8次調査と池上古里遺跡第2次調査である。

両遺跡の範囲内に南丹区域農用地総合整備事業が計画され、緑資源公団西部支社の依頼を受けて調査を実施した。発掘調査は、当調査研究センター調査第2課主幹調査第2係長事務取扱久保哲正、主任調査員田代弘、主査調査員岡﨑研一、調査員野島永が担当した。調査は平成12年11月1日から翌年2月27日まで行った。調査面積は、池上遺跡が約720㎡、池上古里遺跡が1,250㎡である。2月15日には約110名の見学者の中、現地説明会を開催した。調査時の空中写真撮影は(株)イビソクと(株)ジェクトに、図化業務は(株)ジェクトに委託した。整理作業は平成13年度に行った。これら調査に係る経費は、全額、緑資源公団が負担した。

本概報作成は、池上遺跡については岡崎・田代が、池上古里遺跡については野島が担当し、編集作業は伊野・岡崎が行った。文責は文末に記した。遺物写真については、調査第1課資料係主

遺跡名	次数	調査	調査年度	調査主体	主要遺構	時期
池上遺跡	第1次	試掘	平成7年度	八木町教委		
	第2次	試掘	平成9年度	八木町教委		
	第3次	試掘	平成10年度	八木町教委		
	第4次	本掘	平成10年度	八木町教委	竪穴式住居跡・溝・土坑 方形周溝墓・掘立柱建物跡	弥生~中世
	第5次	本掘	平成10年度	当センター	竪穴式住居跡・溝・土坑 方形周溝墓・掘立柱建物跡	弥生~中世
	第6次	試掘	平成11年度	京都府教委		
	第7次	本掘	平成12年度	当センター	掘立柱建物跡·土坑	平安~中世
	第8次	本掘	平成12年度	当センター	竪穴式住居跡・土坑・溝	弥生~古墳
	第9次	本掘	平成13年度	八木町教委	竪穴式住居跡・柱穴・土坑	古墳
	第10次	本掘	平成13年度	京都府教委	竪穴式住居跡・柱穴 溝・掘立柱建物跡	弥生~古墳
	第11次	本掘	平成13年度	当センター	方形周溝墓・竪穴式住居跡 溝・土坑・柱穴	弥生~中世
	第12次	本掘	平成13年度	当センター	方形周溝墓・竪穴式住居跡 掘立柱建物跡・溝・土坑・柱穴	弥生~中世
池上古里遺跡	第1次	試掘	平成12年度	京都府教委		
The second secon	第2次	本掘	平成12年度	当センター	竪穴式住居跡・溝・土坑	古墳

付表 1 池上遺跡 · 池上古里遺跡調査一覧表

任調査員田中彰が撮影した。

調査期間中は、八木町教育委員会、京都府立丹後郷土資料館、地元各自治会、全農直販株式会社、株式会社錦味など、各関係諸機関の協力をいただいた。また、地元の方々をはじめ学生諸氏には、作業員、調査補助員、整理員として従事していただいた。整理期間中は、遺構図などの図面作成ならびに遺物整理の作業を調査参加者がそれぞれ分担した。石製品の実測は山岡が、トレースは船築が行った。ここに記して感謝の意を表わしたい。

1. 遺跡の位置と環境(第1・2図)

京北町を源とする大堰川は、日吉町を経由して園部町・八木町・亀岡市を南流する。八木町では筏森山の西側を流れ、亀岡市の中央を南流する。今回の調査地である池上遺跡は、この筏森山の東側に位置し、亀岡盆地の北部にあたる。周辺の主要遺跡としては、筏森山から派生する丘陵の頂部から斜面にかけて古墳群が存在するが、時期については不明である。この丘陵東前面に広がる平地には、今回の調査地である池上遺跡と池上古里遺跡が、その北側には野条遺跡が広がる。3 遺跡とも弥生時代から中世にかけての遺跡と考えられ、最近の調査成果から、その内容が徐々に解明されつつある。

丹波地域における弥生時代の主要遺跡としては、亀岡市薭田野町太田に所在する太田遺跡があり、弥生時代前期の土坑群や前・中期の環濠などを検出している。環濠は直径が160mを越えると推定されている。弥生時代中期には、亀岡市余部町新堂に所在する余部遺跡があり、中期後半の方形周溝墓が確認されている。なかでも中期前半の玉作り工房跡では、碧玉製の管玉生産が確認されている。今回の調査地である池上遺跡の北側からも、第4次調査で弥生時代中期の玉作り工房跡を検出し、管玉未製品や石針などの管玉製作を示す遺物を多数確認している。また、弥生時代中期後半の竪穴式住居跡や方形周溝墓なども検出している。

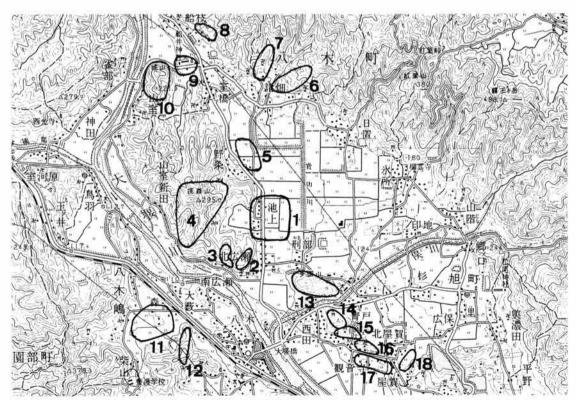
古墳時代の主要な集落遺跡としては、古墳時代中期~後期にかけての竪穴式住居跡を検出した 鹿谷遺跡が亀岡市薭田野町鹿谷に所在する。この調査成果では、5世紀末~6世紀初頭には住居 域の拡大とともに竈の定着という画期が見られるとする。竈についてはその導入時期を知ること ができ、土器支脚から石製支脚へと時期的変化が認められるなど竈の構造についても注目されて いる。大堰川上流にあたる日吉町天若には、古墳時代後期の竪穴式住居跡を検出した天若遺跡が ある。竪穴式住居跡は、間断なく数棟づつの単位で存在したとする。竪穴式住居跡の大半には、 石製支脚を有した竈が存在する。八木町八木嶋では、古墳時代の豪族居館とされた八木嶋遺跡が 所在し、庇をもつ掘立柱建物跡が確認されている。古墳時代後期には、園部町小山東・西地区で 須恵器窯が築かれるようになる。8世紀まで操業された地方窯のひとつである。

奈良・平安時代では、八木嶋遺跡で平安時代の掘立柱建物跡群が確認されており、硯や墨書土器の出土から、官衙的な施設と想定されている。亀岡市千代川町に広がる千代川遺跡は、丹波国府推定地でもある。十数回にわたる調査の結果、官衙的性格の遺構群や奈良・平安時代の集落が認められている。亀岡市篠の丘陵部には須恵器を焼成した篠窯跡群が奈良時代から平安時代前半

にかけて全盛期を迎える。

中世には、八木嶋付近に相国寺普広院領志万荘が所在し、室町時代には八木志万と称した。園部西方の黒田・横田付近には、北野社領船井荘が存在する。大堰川左岸には吉富新荘、世木荘がある。吉富新荘は、今回の調査地付近に広がる荘園で、承安4(1174)年に丹波知行国主藤原成親の私領寄進により、後白河院法華堂領として立荘された。世木荘は、殿田付近に所在する。調査地西方には、池上院がある。別名大日寺池上院は、天台密教の祖皇慶(977~1049)が住した池上房に始まる。池上院は、かつて伽藍を備え、6院を有したと伝承がある。「吉富庄絵図」によると池上寺も吉富新荘領域内に組み込まれていた。応永年間(15世紀初頭)には延暦寺末寺池上寺が神護寺領吉富新荘内にあるため、その支配をめぐって神護寺と延暦寺の間で相論が起こる。

当時の周辺の主要な山城としては、西田城、北広瀬城、刑部城がある。西田城は、西田集落東方の金比羅山(152m)の頂上に所在する。現在、金刀比羅神社が祀られている所が本丸跡にあたる。山麓には2間4面の愛染堂があり、大日寺の所領とされていた。西山麓の金刀比羅神社参道口に、家臣の屋敷跡が存在するとされる。北広瀬城は、北広瀬の阿弥陀寺北西の宮山頂上(195m)の山城で、城主、年代については不明である。元弘3(1333)年、建武2(1335)年に足利尊氏が八木の広瀬左門に感状を与えていることから、14世紀前半に存在していたとされる。刑部城は、刑部と西田の中間にある多国山(191m)の最高所に所在する。頂上に本丸と郭跡があり、その下には帯郭がある。刑部には家臣の屋敷跡が存在するとされる。

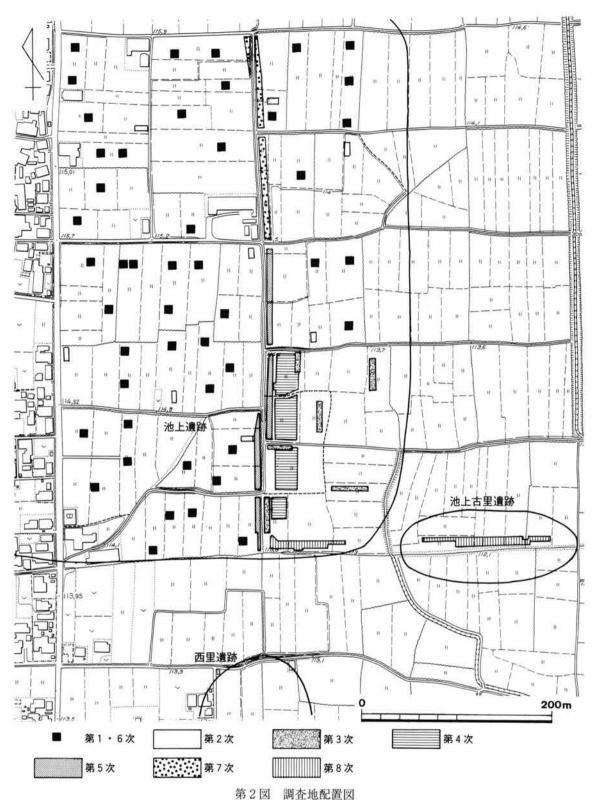


第1図 調査地および周辺主要遺跡分布図(1/25,000)

 1.池上遺跡
 2.北広瀬城跡
 3.南尾西古墳群
 4.筏森山古墳群
 5.室橋遺跡
 6.松本古墳群

 7.大谷口古墳群
 8.清谷古墳群
 9.新庄遺跡
 10.新庄城跡
 11.八木嶋遺跡
 12.鶴首山城跡

 13.刑部城跡
 14.西田城跡
 15.住吉神社裏山古墳群
 16.池内古墳群
 17.観音寺遺跡
 18.北屋賀遺跡



2. 基準層位と調査方法

池上遺跡の今回の調査地は、第5次調査地の南端に隣接したところである。第5次調査と同様に、30cm前後の包含層下に遺構面が2面遺存すると予測された。この包含層を人力で掘削することは期間的に困難と考え、遺構面直上まで重機による掘削を行った。調査地西端では、暗茶褐色土の弥生土器を包含する層を掘り込む形で、古墳時代の遺構が認められた。また、包含層下に落

ち込みが確認できた。

池上古里遺跡では、耕土および床土層下に包含層(黒褐色粘質土層)が薄く堆積していた。

遺構名は、遺跡ごとに通し番号を付した。今回報告する遺構名は、調査時に使用した遺構番号をそのまま使用した。

(1) 池上遺跡第8次

1. 検出遺構(第3図)

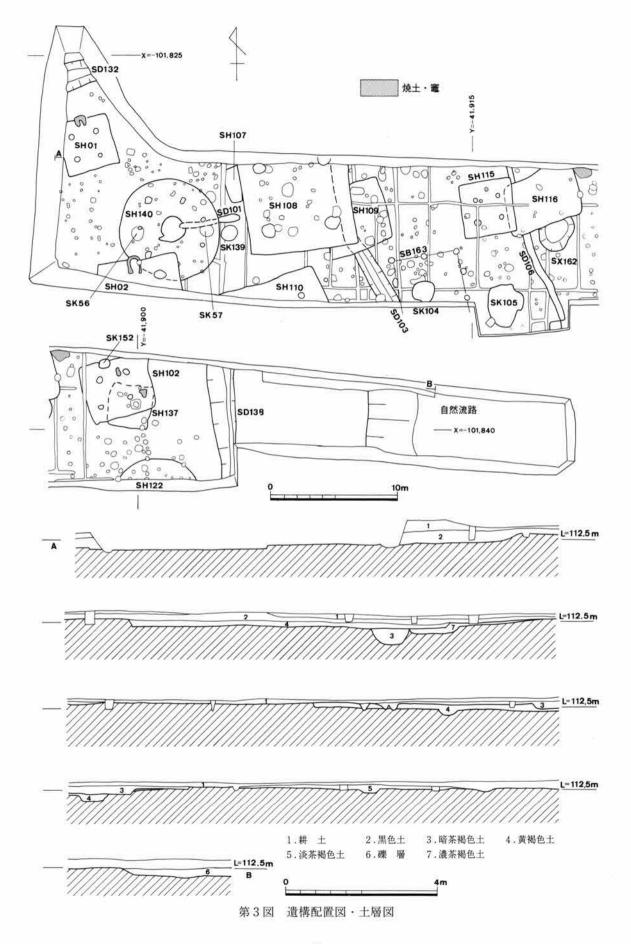
(1) 弥生時代

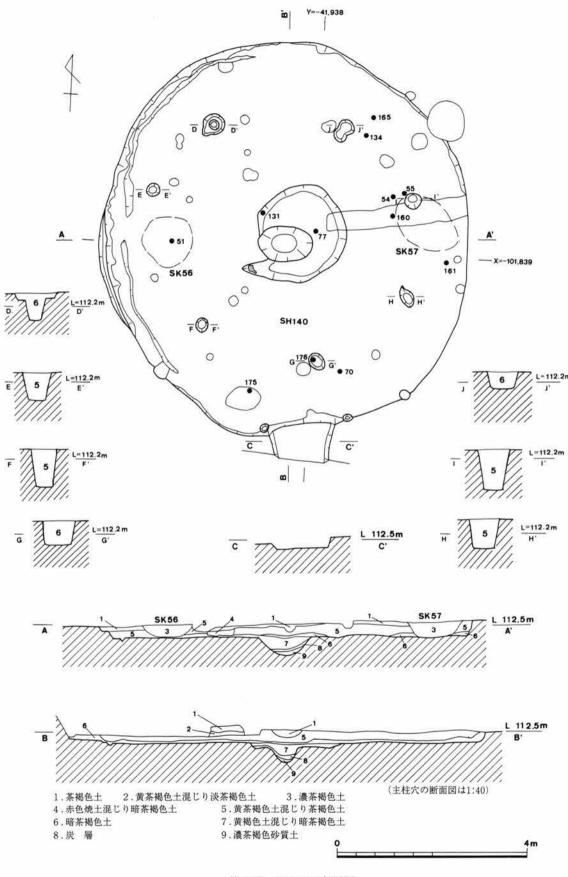
SH140(第4図、図版第2) 調査地西端で確認した円形の竪穴式住居跡である。南北方向にわずかに長い楕円形を呈する。SD101・SK139を切る形で検出し、住居埋没後にSK56・57が掘り込まれ、その後、SH02によって南側の一角が破壊されていた。主柱穴は、周壁から約1.2 m程内側に7か所配されていた。柱穴の規模は、径約0.3~0.4m、深さ約0.2~0.4mを測る。主柱穴間の距離は1.9~3.0mであった。住居中央には、径約2.0mの土坑があり、深さ約0.56mであった。下層には、炭が薄く堆積していた。土坑南肩部に狭い範囲で赤色の焼土が認められ、炭はこの焼土に伴うものと思われた。出土遺物の大半は、埋土上層に集中する傾向が見られた。時期は弥生時代中期に該当するものである。その他に石針、砥石、玉の未製品など玉作り関係遺物や石庖丁、石鑿、磨製石鏃などの石製品も少量出土した。この住居は、暗茶褐色土の堆積土を掘り込む形で認められ、床面付近は黄褐色土の地山を掘り込んでいる。また埋土が黒色土であったため、貼り床をしていたか識別するには困難な状況であり、貼り床の有無については不明である。玉作り関係の遺物の出土により、床面直上の埋土を一部洗浄したが、関連遺物は確認できなかった。また、住居南側は周壁の高さが1段低く、約2.2mの幅でスロープ状であった。このスロープの両脇の周壁際には径約0.15mの小さな柱穴が各1か所確認できた。この部分は、住居の入口部に相当し、柱穴はこれに伴う付属施設の痕跡と考えることができる。

SH122(第6図、図版第4) 円形の竪穴式住居跡の一角を確認した。主柱穴については不明である。わずかであるが弥生土器片が出土しており、中期に相当すると考える。周壁に沿ってわずかな落ち込みを検出したが、明確な周壁溝とは断定できなかった。拳大の礫が混入する黄褐色土を掘り込む遺構であった。

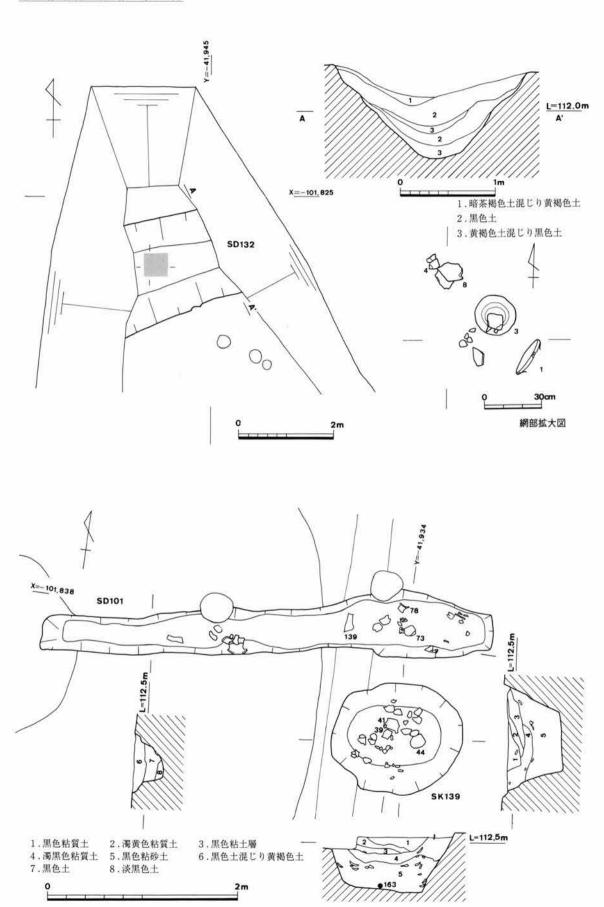
SD132(第5図、図版第3) 調査地北西端で確認した溝である。第5次調査時に確認されており、その続きが今回の調査地にかかると想定されていた。暗茶褐色土の堆積土を掘り込む形で設けられたこの溝は、断面形が逆台形を呈し、数回にわたって埋まったようである。上層ならびに最下層から弥生時代中期の土器が出土した。出土遺物にあまり時期差がなく、比較的短期間でもって埋まってしまった遺構と考える。

S D 101 (第5図、図版第3) S H 140より先行する遺構である。S K 139の北側に隣接する。

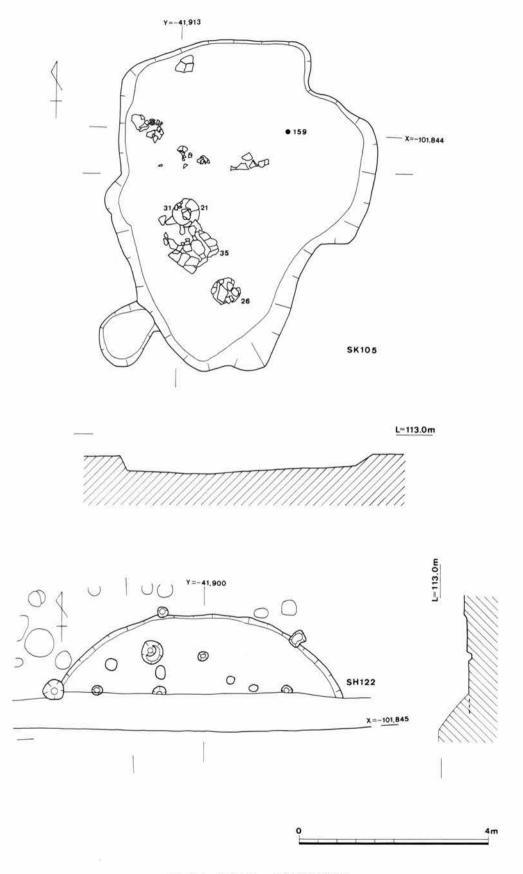




第4図 SH140実測図



第5図 SD132·101、SK139実測図



第6図 SK105、SH122実測図

京都府遺跡調査概報 第103冊

溝の両端部は中央部より浅くなる。埋土中から弥生時代中期後半の土器とともに、玉作りに使用された筋砥石が出土している。この溝の性格については不明である。

SD103(第3・8図) 断面「U」字形を呈したこの溝は、SH108・109によって上部が一部 削平されていた。規模は、幅約1.3m、深さ約0.4mを測る。弥生時代中期・後期の土器片が出土 した。

SD106(第3図) SH115・116の南側で検出した溝である。礫混じりの遺構面を掘り込んだこの溝は、断面が浅い「U」字形をなし、埋土中より弥生時代後期の土器片がわずかに出土した。SH115・116付近で若干屈曲し、住居床面では2本の溝に分岐していた。SH115・116完掘後に検出した。規模は、SD106が幅約0.6m、深さ約0.35mを測る。

SK105(第6図、図版第4) 調査地中央で確認した土坑である。平面形態は不定形で、肩もなだらかに掘り込まれていた。土坑の数か所から投棄されたような状況で弥生土器が出土しており、中期後半の土器資料を良好な形で得ることができた。また、磨製石鏃も出土している。

SK139(第5図、図版第3) SH140の東側の土坑で、一部後世の排水溝によって削平を受けていた。平面形態は、東西方向に長い楕円形で、土坑内から弥生時代中期後半の土器片がまとまって出土した。

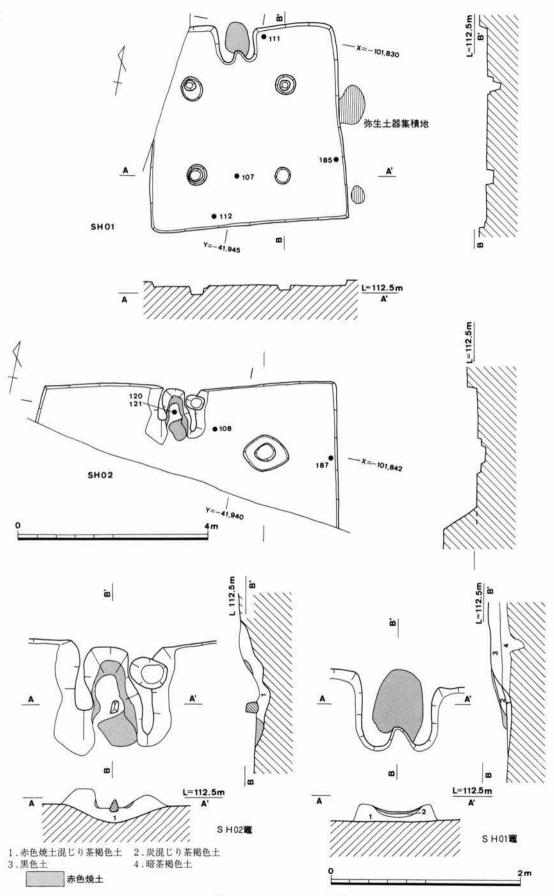
SK56(第4図) 当初は、SH140内で検出したため、この住居に伴う土器群と思われた。しかし、住居掘り下げの際に設定した畦に「U」字状の落ち込みが認められたことから、SH140の埋土を掘り込んだ土坑であることが確認できた。このような状況で検出したことから、その規模については推定長で、平面形態については不明である。SH140の埋土と土坑の土色が類似するため、この付近の遺物を一括で取り上げ、土坑出土とした。多量の弥生時代中期後半の土器片が出土した。

SK57(第4図) SK56東側で検出した土坑である。SK56と同じ状態で確認したため、平面 形態については不明である。出土遺物についてもSK56とほぼ同時期の土器片が出土した。SH 140の埋土と土坑の土色が類似するため、この付近の遺物を一括で取り上げ、土坑出土とした。 また、磨製石鏃も出土している。

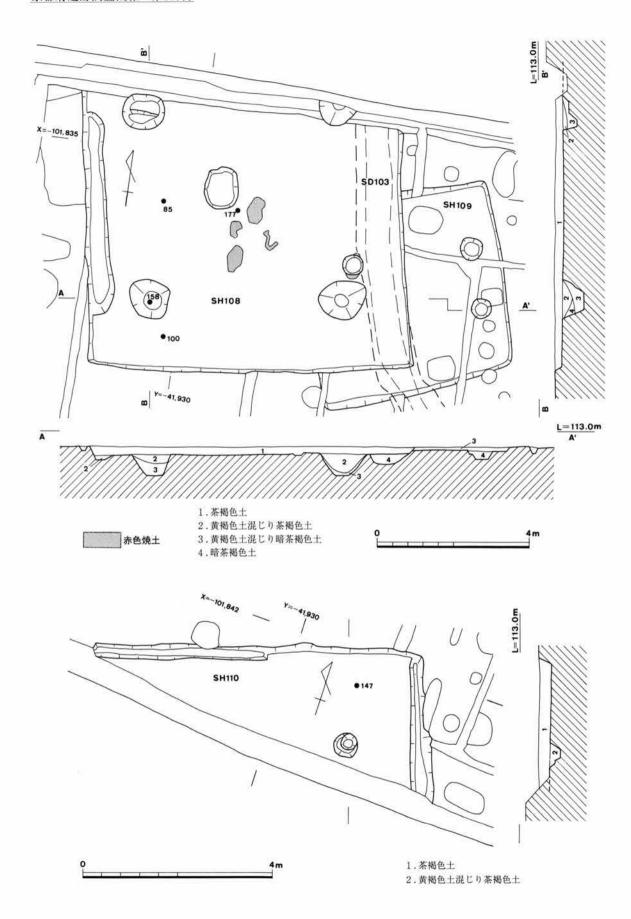
(2) 古墳時代

SH01(第7図、図版第5) 調査地北西部で検出した竪穴式住居跡である。北辺中央に粘土貼り付けによる竈を設けている。スサや土器片の混入は見られなかった。また、鹿谷遺跡SH9226の竈のように燃焼部に皿状の土坑を設けるといった痕跡は見られなかった。竈の規模は、東西約0.74m、南北約0.88m、遺存高約0.08mであった。両袖の幅は約0.5mである。主柱穴は4か所で確認でき、その規模は径約0.24m、深さ約0.14mを測る。床面から須恵器蓋杯、埋土から勾玉と石鏃が出土している。

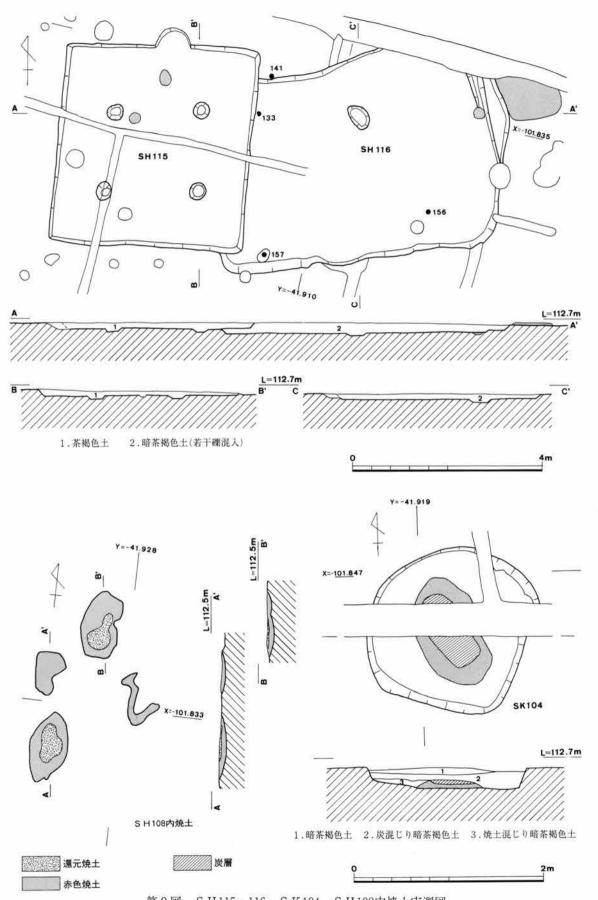
SH02(第7図、図版第5・6) 調査地南西部で検出した竪穴式住居跡である。住居の北側のみを確認したため、全容については不明である。そのため、主柱穴も1か所のみの確認となった。主柱穴は径約0.48m、深さ約0.1mを測る。住居北辺中央に竈が設けられていた。非常に残りの



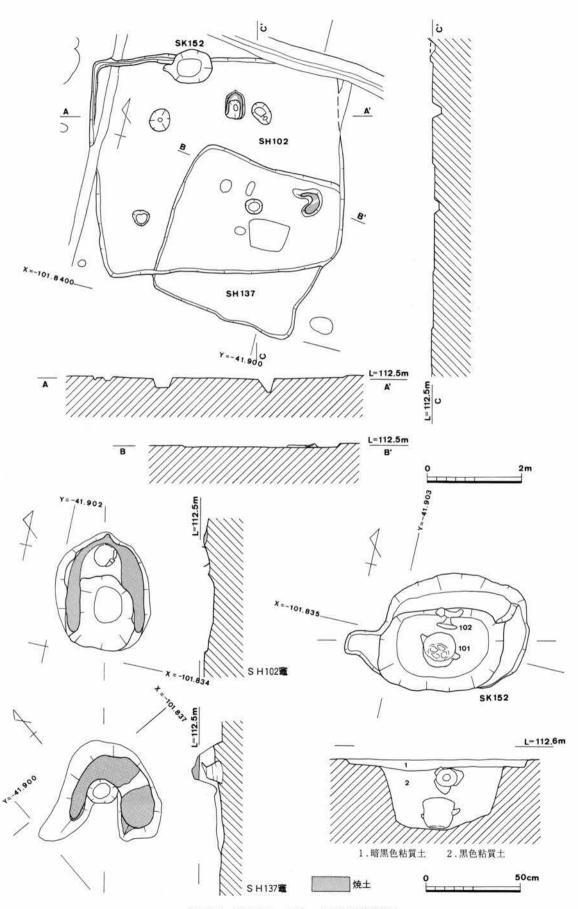
第7図 SH01·02実測図



第8図 SH108~110実測図



第9図 SH115·116、SK104、SH108内焼土実測図



第10図 SH102·137、SK152実測図

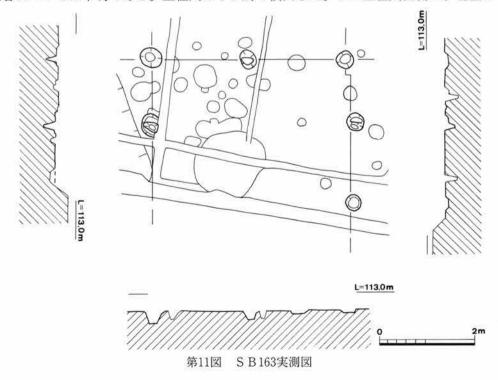
良い竈で、東西約1.36m、南北約1.18m、遺存高約0.32mであった。両袖の幅は約0.42mである。 燃焼部中央には石が立てられており、支脚として使用されたと思われる。一部熱による変色が見られた。断ち割りを行ったところ、方形の住居を築いた後に竈の中央部を若干掘り込み、粘土を 貼り付けて築いていた。スサや土器片の混入は見られなかったが、竈中央部から土師器甕が2点 出土した。住居内埋土から管玉と臼玉、石製紡錘車が出土している。

SH107(第3図) SH108に切られた形で検出した非常に小規模な竪穴式住居跡である。規模は、西辺約2.7m、深さ約0.1mを測る。主柱穴は検出できなかった。

SH108(第8図、図版第7) 調査地ほぼ中央で検出した大型の竪穴式住居跡である。住居に伴う竈は確認していないが、住居中央付近に5か所程、火を受けた痕跡が認められた(第9図)。内1か所については、焼土中央部が高温で焼けしまっており、灰白色に硬化していた。この状況から鍛冶炉の可能性を想定し、住居内を1mメッシュで区画割りし、床面直上の土を採取した。さらに、埋土の一部の洗浄を試みたが、鍛造剝片、粒状剝片などの検出はできなかった。主柱穴は、4か所で確認している。柱穴は、いずれも径約1.2m、深さ約0.6mを測る。このような規模の住居跡は、第4・5次調査でも確認されているが、最大の床面積を保有する住居に属す。また、住居西壁に沿ってわずかな窪みが確認できた。幅約0.6m、深さ約0.1mと、幅広いものであるが周壁溝と思われる。住居内埋土中から、勾玉、臼玉、弥生時代の磨製石鏃などの石製品が出土している。

SH109(第8図) SH108東側で検出した竪穴式住居跡で、SH108より先行する。主柱穴については不明である。

SH110(第8図) SH108南側で検出した竪穴式住居跡である。北側の一角を検出したにすぎず、全容については不明である。主柱穴は1か所で検出した。この主柱穴西側の、北壁より離れ



京都府遺跡調査概報 第103冊

た床面の一部が赤色に焼けていた。柱穴の規模は、径約0.52m、深さ約0.24mである。北・東壁に沿って周溝がめぐっていた。溝は、壁に沿って全周せず、部分的に途切れていた。その規模は、幅約0.28m、深さ約0.1mであった。住居内埋土から須恵器杯身や弥生時代の磨製石斧が出土した。

SH115(第9図、図版第8) 礫混じりの黄褐色土を掘り込んで築いた竪穴式住居跡である。 非常に残りは悪いが、隣接する住居内の埋土とわずかに土色変化が認められたことにより、S H116の後に営まれた住居であることが判明した。北辺中央やや内側で赤色の焼土を確認した。 主柱穴は4か所で認められ、おおむね径約0.36m、深さ0.08mである。須恵器杯身・高杯が出 土した。

SH116(第9図) SH115の東側で検出した竪穴式住居跡である。礫混じりの黄褐色土を掘り 付表2 池上遺跡検出遺構一覧表

①竪穴式住居跡(規模の()は残存長)

遺構番号	図面番号	耳ぐ台b	ŧ	見模(m)	主軸方位	構造上の特徴
退佣备写	凶叫借万	形態	東西長	南北長	深さ	土地万区	神坦工(7) 付取
S H01	第7図	方形	4.0	4.0	0.12	N7°W	北辺中央に竈
S H 02	第7図	方形	6.5	(3.2)	0.20	N 0 °	北辺中央に竈
S H 107	第3図	方形	(1.3)	2.7	0.10	N6°W	
S H 108	第8図	方形	8.4	(7.7)	0.20	N4°W	住居中央に焼土
S H 109	第8図	方形	5.0	5.0	0.10	N6°W	
S H110	第8図	方形	6.6	(3.2)	0.24	N6°W	住居中央に焼土
S H 115	第9図	方形	4.0	4.0	0.12	N5°W	
S H 116	第9図	方形	5.5	4.4	0.20	N7°W	住居北東部に焼土
S H 102	第10図	方形	5.0	4.4	0.04	N5°W	住居北側に竈
S H 137	第10図	方形	3.2	3.4	0.04	N8°E	住居北東隅に竈
S H 122	第6図	円形	7.7	8.1	0.10		不明
S H 140	第4図	円形	推定直	至27.4	0.36	_	住居中央部に焼土

②土坑(規模の()は残存長)

遺構番号	図面番号		備考		
	凶岨番万	東西長	南北長	深さ	備考
S K56	第4図	1.08	1.00	0.24	平面規模は推定
S K57	第4図	1.12	1.08	0.32	平面規模は推定
S K 139	第5図	1.40	1.14	0.60	
S K 104	第9図	1.68	1.40	0.22	
S K 105	第6図	5.32	6.72	0.38	
S K 152	第10図	0.96	0.60	0.37	
S X 162	第3図	0.92	0.72	0.35	

③流路(規模の()は残存長)

遺構番号			規 模 (m)	/# ±/	
	図面番号	中畐	長さ	深さ	備考
S D 132	第5図	2.0	2.7	0.9	第5次調査時に延長部を確認
S D 101	第5図	0.6	4.6	0.3	
S D 103	第8図	1.4	11.9	0.4	
S D 106	第3図	0.6	13.0	0.4	北側ではSD106・107に分岐
S D 138	第3図	0.8	9.0	0.4	時期不明
自然流路	第3図	不明	不明	0.5	第4次調査時、C地区で確認 している流路に続くか?

込んで築かれ、非常に残りは悪い。主柱穴は確認できなかった。住居東壁に沿って周壁溝を検出 した。周壁溝は焼土を縦断しており、住居に伴うものと考えがたい。焼土の性格については不明 である。埋土中から弥生時代の石鏃や古墳時代の砥石が出土している。

SH102(第10図) 調査地東部で検出した竪穴式住居跡である。切り合い関係から、SH137の後に築かれたことがわかる。主柱穴は4か所で認められ、径約0.44m、深さ0.2mを測る。北辺中央やや内側には、残りの悪い竈を検出することができた(第10図)。焼土の範囲は、南北約0.62m、東西約0.5mを測る。また、北辺中央にはSK152を検出したが、この住居に伴うものでなく、住居埋没後の遺構である。

SH137(第10図) SH102に切られる竪穴式住居跡である。主柱穴については、検出できなかった。住居北東隅から竈を検出した。非常に残りの悪いものであるが、馬蹄形に赤色の焼土がめぐることから竈とした。竈内から土師器壺の口縁部が出土している。また、埋土中から臼玉も出土している。周壁溝などの施設は確認していない。

SK104(第9図、図版第8) 土坑床面中央から赤色の焼土と炭層を検出した。出土遺物がなく、時期については不明である。埋土が暗茶褐色土であることから、古墳時代以降のものと考える。

SK152(第10図、図版第8) SH102北辺中央部で検出した土坑である。SH102埋没後のもので、断面「U」字形を呈す。土坑下層から完形に近い形で高杯、甑が出土している。

SB163(第11図) SK105の西側で検出した2間×2間以上からなる掘立柱建物跡である。主軸方位は、ほぼ北を向く。柱穴の規模は、径0.48m、深さ約0.36mであった。全容については不明である。

(3) その他の遺構

SD138(第3図) SH102東側で検出した南北方向の溝である。幅約0.8m、深さ約0.4mを測る。顕著な遺物が出土せず、時期については不明である。

自然流路(第3図) 調査地東端で確認した。およそ0.5mの落ち込みが認められ、拳大の礫が 堆積していた。落ち込みは、ゆるやかに傾斜しており、人為的なものと考えにくいと判断した。 落ち込み下層の所々から、弥生土器片が出土した。古墳時代の遺物が出土しないことから、弥生 時代には池上・池上古里遺跡間を隔てる自然流路であったが、古墳時代には埋まっていたと思われる。

SX162(第3図) SH116南側で検出した不定形な土坑である。明確な土色変化が無く、黒色土が落ち込みに沿って下がっていた。底面から旧石器時代に遡ると考えられる縦長剝片(第20図151)が出土した。弥生時代以前の土坑状遺構の可能性がある。規模は、東西約0.92m、南北約0.72m、深さ約0.35mである。

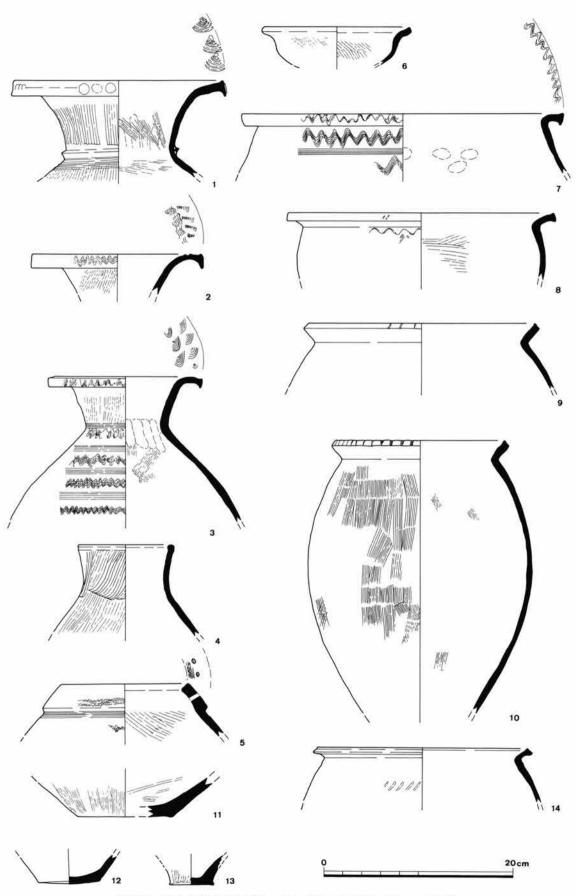
2. 出土遺物

(1) 土器類(第12~18図、図版第9~11)

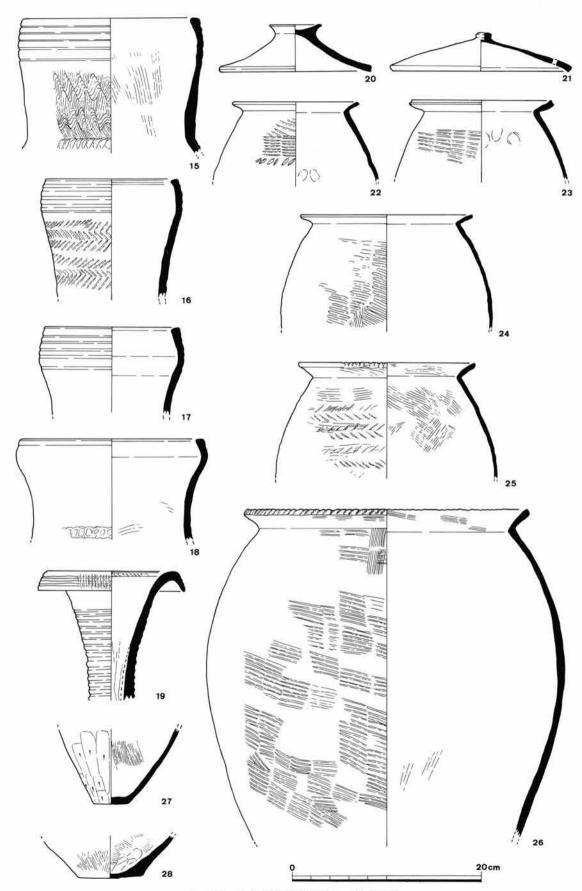
京都府遺跡調査概報 第103冊

出土遺物のうち、弥生時代の土器は第12~16図に、古墳時代の土器は第17・18図に図示した。 いずれも、個々の遺物についての詳細は、付表3に記し、本文に全体の概要を記した。また、遺 構図に主要な遺物の出土地点を明記した。数字は遺物実測図の番号である。

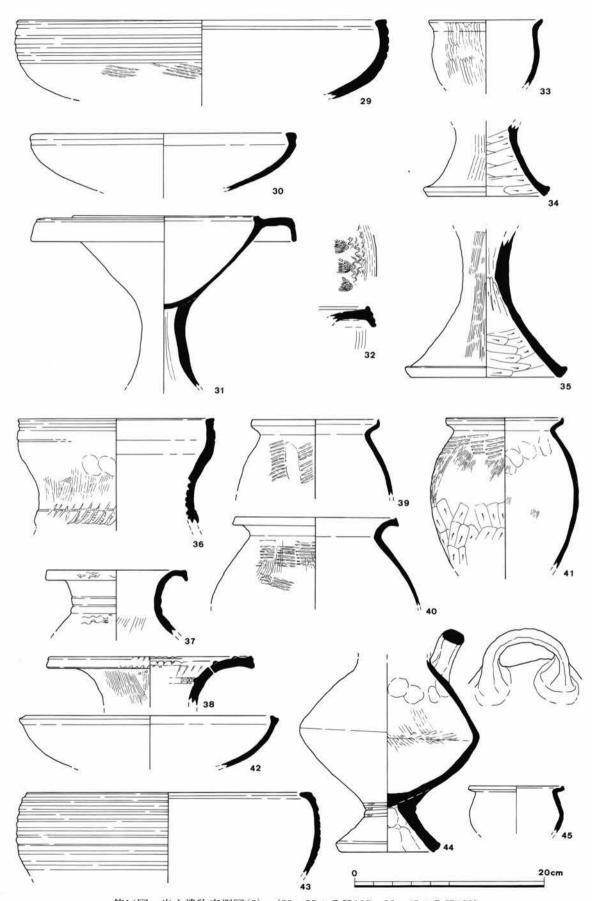
弥生時代 S D132出土の弥生土器は、壺、甕、鉢である。壺の口縁端部には波状文(2・3)や 円形浮文(1)を施す。体部上半には直線文と波状文を施すもの(3)や、ハケ調整するもの $(1\cdot 2)$ が あり、弥生時代中期のものである。甕は、口縁部が大きく屈曲するもの(7)と、「く」字状に屈曲 するもの $(8\sim10)$ がある。口縁部に波状文を施すもの(7)と、刻み目を施すもの $(8\sim10)$ がある。 後者については体部にハケ調整が行われる。壺 $(1\cdot 3\cdot 4)$ と甕(8)は、SD132最下層出土であり、 その他は埋土出土のものである。SD103出土の弥生土器は壺、甕などであるが、図示できたも のは(14)1点のみである。口縁部が「く」字状に屈曲する。体部上半部にヘラ状工具による刺突 文がめぐる。SK105出土の弥生土器は、壺、甕、蓋、高杯である。壺は、口縁部が逆「く」字 状に屈曲する広口壺(15~18)や細い頸部と下方を向く口縁端部からなる長頸壺(19)がある。広口 壺には端部に5条の凹線がめぐり、頸部には波状文や凹線文などを施す。貼付突帯も見られる。 長頸壺は頸部に多条の凹線文が、口縁部には数条の凹線文と刻み目が施される。甕は、体部をタ タキ後ハケ調整、口縁端部に刻み目を施す(22~26)。高杯(29)の口縁部には、凹線文が5条施さ れ、下半にはハケメが残る。SK139出土の弥生土器は、壺、甕、台付鉢、水差し、鉢である。 壺は、口縁部が逆「く」字状に屈曲するもの(36)と、大きく外反するもの(37・38)がある。前者 は口縁端部に凹線文をめぐらし、頸部にハケと列点文を施した突帯がめぐる。後者は、口縁端部 に波状文や刻み目が施され、頸部には凹線文かハケ調整が行われる。甕(39~41)は、体部上半に タタキとハケが、下半にヘラケズリが施される。台付鉢には、口縁部に多条の凹線文がめぐる (43)。水差し(44)は、算盤玉状の体部に脚と把手が付く。非常に残りの良い状態で出土した。鉢 (45)は、小型のものである。調整については不明である。S K56・57出土の弥生土器は、壺、甕、 高杯、器台である。壺は、口縁部が逆「く」字状に屈曲するもの(51~53)と、大きく外反するも の(49・50)がある。前者は口縁端部に凹線文をめぐらし、頸部に列点文を施した突帯がめぐる。 後者は、口縁端部に凹線文と刻み目が施されるものもあり、頸部はハケ調整が施される。甕(54 ~58)は、体部にタタキを施すものが主体である。口縁端部には刻み目があり、内面はハケ調整 である。高杯(59~60)は、杯部をヘラミガキし、脚部外面をハケ調整、内面をヘラケズリする。 器台(61)は外面に多条の凹線文を施し、下部に円形の透かしがある。SH140出土の弥生土器は、 壺、甕、高杯、台付鉢である。壺(62・66)は、口縁部が大きく外反する。口縁端部に列点文か波 状文があり、頸部をハケ調整し、体部上半に波状文を施す。内面はハケ調整する。甕(72)は、体 部にハケメがわずかに残る。台付鉢(83)は小型品である。ハケとナデで調整されている。口縁端 部が大きく外方向に開く。中期の様相を示す土器である。SD101出土の弥生土器は、壺、甕な どである。壺は、口縁部が逆「く」字状に屈曲するもの(67)と、大きく外反するもの(63~65)が ある。前者は口縁端部に凹線文をめぐらし、頸部に列点文のある突帯がめぐる。後者は、口縁端 部に列点文か刻み目が施されるものもあり、頸部はハケ調整が施される。口縁端部内面に円形浮



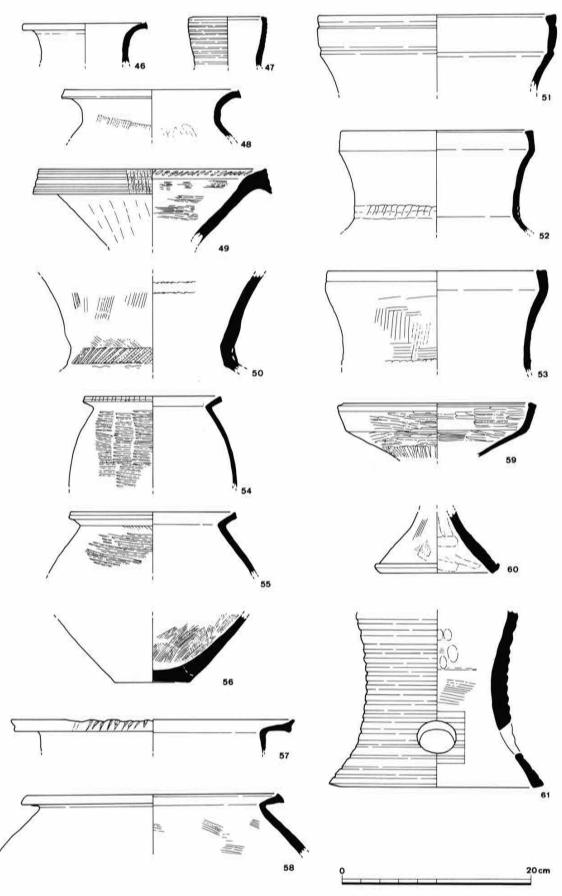
第12図 出土遺物実測図(1) (1~13:SD132、14:SD103)



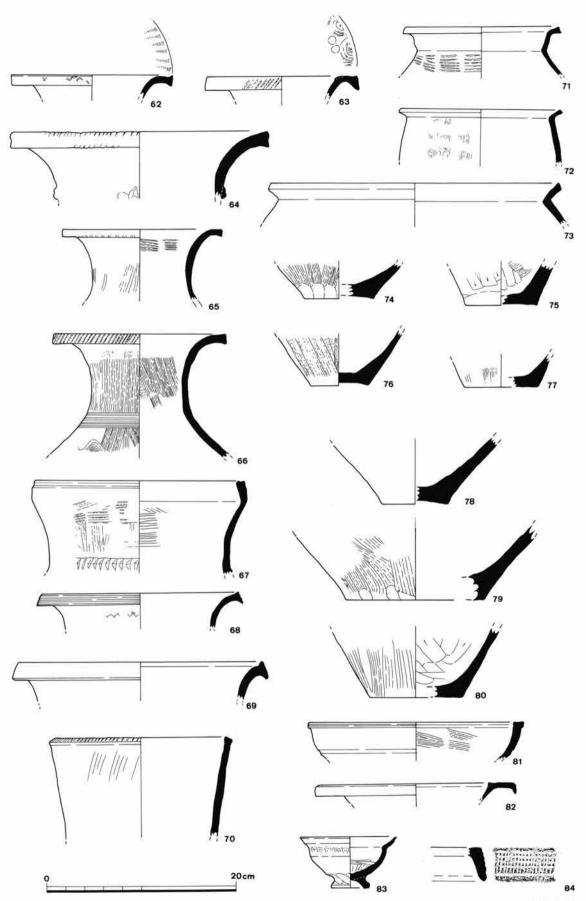
第13図 出土遺物実測図(2) (SK105)



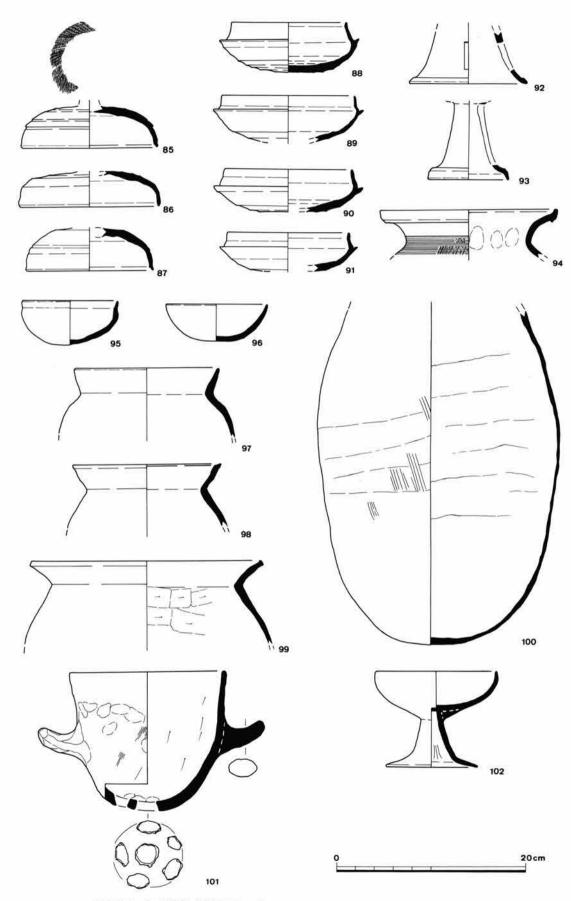
第14図 出土遺物実測図(3) (29~35: SK105、36~45: SK139)



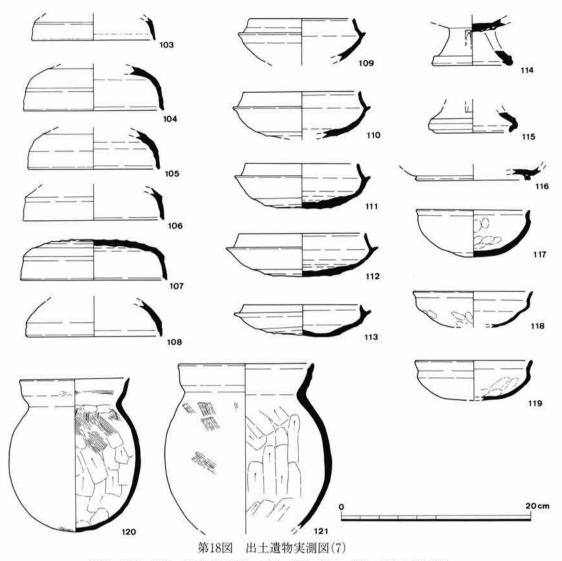
第15図 出土遺物実測図(4) (46・49・51~53・56・58・60・61: S K 56、他は S K 57)



第16図 出土遺物実測図(5) (62・66~72・74~77・80~84: SH140、63~65・73・78・79: SD101)



第17図 出土遺物実測図(6) (85~100: SH108、101·102: SK152)



106 · 107 · 111 · 112: S H01、103 · 108 · 114 · 120 · 121: S H02、
110: S H110、109 · 115: S H115、104:柱穴、105 · 113 · 116~119:包含層

文を施すものもある。1点であるが上方にまっすぐ立ち上がる壺(70)もある。甕(71・73)は、口縁部が「く」字状に屈曲する。体部にはタタキが残る。中期のもので、SH140出土の弥生土器と時期差は認められない。

古墳時代 SH108出土の土器は、須恵器杯蓋、杯身、高杯、甕と土師器杯、甕、甑である。杯蓋は肩部の稜が明瞭なもの(85)と形骸化したもの(86・87)がある。全体的に扁平である。杯蓋(85)は、天井部外面に列点文が施され、他の須恵器と比べて胎土が緻密であることから他地域からの搬入品である可能性が高い。杯身は、平坦な底部から外上方に立ち上がり、口縁端部は内上方を向く。高杯は長脚と短脚がある。いずれも一段透かしである。TK10併行期のものと考える。土師器杯(95・96)は、丸い底部から外上方に立ち上がる。口縁端部が、わずかに屈曲するものもある。土師器甕は、口縁部が「く」字状に屈曲する。SK152出土の土器は、土師器の甑(101)と高杯(102)である。「U」字状の体部半ばに扁平な把手が付く。底部中央に1孔、5方に円形の穿孔を有す。体部は、ハケとナデ調整する。高杯は浅い杯部と脚部からなる。脚部は、端部で大き

京都府遺跡調査概報 第103冊

く開く。S H01出土の土器は、須恵器杯蓋・杯身である。杯蓋(106・107)は肩部の稜が明瞭なもので、杯身(111・112)は扁平な底部と内上方に立ち上がる口縁部をもつ。T K10併行期のものと考える。S H02出土の遺物は須恵器杯蓋・高杯、土師器甕である。土師器甕(120・121)は、住居内の竈から出土したもので、内外面にハケとヘラケズリがみられる。口縁端部はわずかに屈曲する。杯蓋は、S H01のものと比べて肩部の稜は退化する。高杯(114)は短脚で、一段透かしである。杯蓋の形態からT K43からT K209併行期のものと考える。S H110出土の杯身(110)やS H115出土の杯身(109)は、わずかに丸みを帯びた底部から外上方に立ち上がり、口縁部は内上方に立ち上がる。形態からT K10併行期のものと考える。S H115出土の高杯(115)は一段透かしである。柱穴出土の杯蓋(104)ならびに包含層出土の杯蓋(105)、杯身(113)、杯(116)、土師器杯(117~119)も図示した。包含層からはT K10からT K209併行期のものと8~9世紀代のものが出土した。柱穴についても両時期のものが、重複する形で認められた。土師器杯(117~119)は杯(116)と同時期の土師器と考える。

(岡崎研一)

(2)石製品類(第19~22図、図版第12·13)

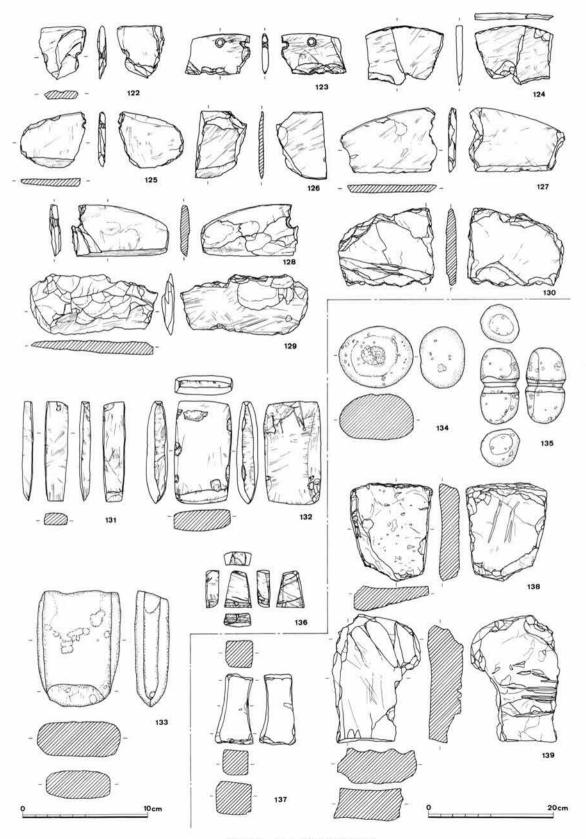
今回の調査では、旧石器時代、弥生時代、古墳時代に製作・使用された石製品を多数検出した。 これらの中から、各時代を特徴づける代表的な石器を図示し、概説する。出土地点、法量など 個々の詳細については、付表4に示したので、参照されたい。

旧石器時代(150・151) ナイフ型石器と剝片がある。150は、石刃状の縦長剝片の側縁を調整剝離したチャート製のナイフ形石器である。後期旧石器時代に属するものであろう。151は、150の素材とみなしうるチャート製の縦長剝片である。旧石器時代の遺物である可能性を指摘しておく。

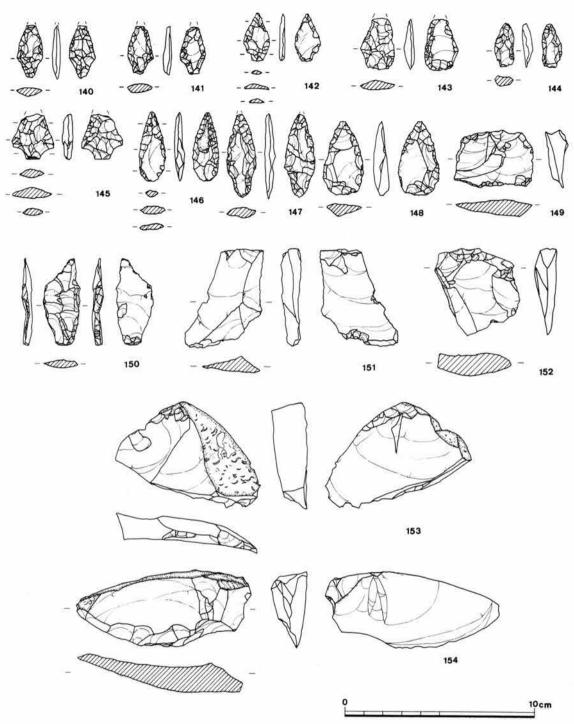
弥生時代(122~136・138~149・152~154・155~172、173~178) 石庖丁や石斧、磨石、削器などの生活用具、打製石鏃、磨製石鏃、磨製石剣などの武器類、石製玉類の生産に関わる遺物などがある。

122~129は、粘板岩製の石庖丁である。刃部が直線をなすもの(127~129)と外湾するもの(125・126)とがある。122~124は背部の一部が遺存したものであり、全形は明らかでない。122は背部が直線的であり、123・124は湾曲する。これら背部の形状からみて、122は外湾刃、123・124は直線刃をもつタイプと考えられる。129は大型石庖丁の刃部の一部が遺存したものである。130は板状に加工した粘板岩で、周縁に剝離調整の痕跡が認められる。石庖丁を製作する途中で折損し、廃棄されたものであろう。131~133は磨製石斧である。131は柱状片刃石斧、132は扁平片刃石斧である。133は大型の扁平な両刃石斧である。134は器面に研磨痕のある球石で、敲打によるアバタ状痕跡が認められる。135は円柱状の礫を加工して溝をつけたものである。錘であろう。136~139は砥石である。139には溝状の使用痕跡がある。139は片面には数センチの浅く幅広い溝状の使用痕跡あり、もう一面には数ミリの狭く深い溝状の使用痕が認められる。石製勾玉や管玉の生産に用いた玉作り用の筋砥石と考えられる。

140~148は、サヌカイト製の打製石鏃である。茎を作り出すもの(140~142・145・147)と茎を



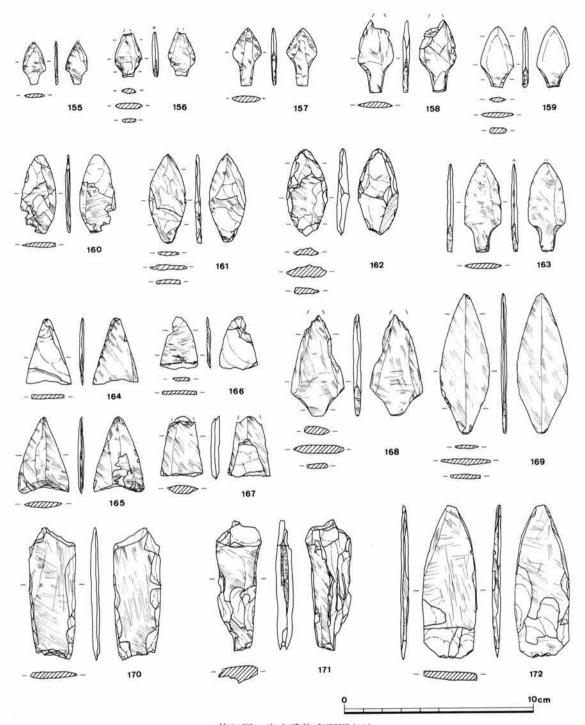
第19図 出土遺物実測図(8)



第20図 出土遺物実測図(9)

もたず基部を丸く作り出すもの $(143\cdot 144\cdot 146\cdot 148)$ とがある。149は削器、 $152\sim 154$ は素材とみられるサヌカイトの横長剣片である。いずれも自然礫面がみられる。 $155\sim 169$ は磨製石鏃である。茎をもつもの $(155\sim 159\cdot 163\cdot 168)$ 、基部がくぼむもの $(164\cdot 165)$ 、木葉形のもの $(160\sim 162\cdot 169)$ などがある。 $166\cdot 167\cdot 170\sim 172$ は磨製石剣である。 $166\cdot 167$ は切先の一部、171は柄の部分である。 $170\cdot 172$ は側縁などに研磨後の調整剝離痕跡が認められるので、未製品あるいは再生品と考えられる。

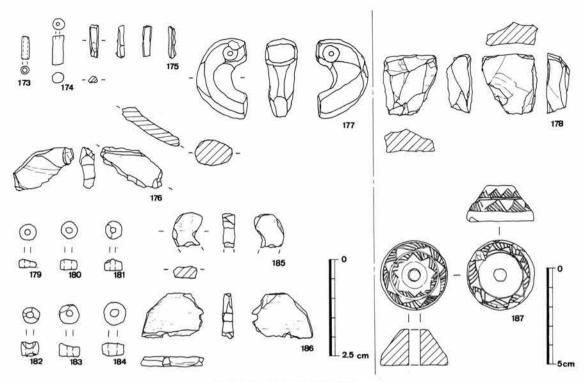
173・174は、緑色凝灰岩製の管玉である。174は穿孔途中の未製品である。175は、擦切施溝分



第21図 出土遺物実測図(10)

割痕のある緑色凝灰岩製の四角柱体である。管玉製作の途上で生じる四角柱体である。176は、擦切施溝分割痕がある玉髄製の板状剝片である。石針の製作過程で石核として用いられる板状剝片であろう。177は、ヒスイ製の勾玉である。器表面に研磨による面が残る。完成間際の未製品である。178は、擦切施溝分割によって作られた緑色凝灰岩製の板状剝片であり、管玉の原材料にあたる遺物である。174~176・178は、139の筋砥石とともに、この遺跡で緑色凝灰岩製管玉の製作が行われたことを証明する遺物である。

古墳時代(137・138・179~187) 滑石製玉類、紡錘車、砥石などがある。137・138は砂岩製の



第22図 出土遺物実測図(11)

砥石である。 $179\sim184$ は臼玉、185は勾玉、186は有孔円盤の一部である。187は紡錘車である。 いずれも滑石製である。

(田代 弘)

付表 3 池上遺跡出土土器観察表(口:口縁部、頸:頸部、体:体部、底:底部、脚:脚部 単位cm)

番号	番号 器種		外面の調整	内面の調整	口径	器高	底径
1	弥生土器	壺	口:円形浮文 頸:ハケ調整 突帯 体:ハケ調整	頸:ハケ調整後ナデ調整 体:ハケ調整	22.2	\ 	-
2	弥生土器	壺	口:波状文 頸:ハケ調整後ナデ調整	口:扇形文+波状文	17.8	-	-
3	弥生土器	壺	口:波状文 頸:ハケ調整 体:直線文+波状文	口:扇形文 体:ハケ調整後ナデ調整	16.2		:==
4	弥生土器	短頸壺	口~頸:ハケ調整	口~頸:ナデ調整	10.0	_	-
5	弥生土器	無頸壺	口:波状文 径5mmの穴が 2か所 体:直線文+波状文	体:ハケ調整	13.3	-	·—
6	弥生土器	鉢	体:ハケ調整	体:ハケ調整後ナデ調整	15.3	100000	1
7	弥生土器	甕	口:波状文 体:波状文+直線文	体:指頭圧痕	33.8	-	-
8	弥生土器	甕	口:刻み目 体:波状文	体:ハケ調整	28.0	-	-
9	弥生土器	甕	口:刻み目	体:ナデ調整	23.8		=
10	弥生土器	甕	口:刻み目 体:ハケ調整		17.8		_
11	弥生土器	薨	体:ハケ調整	体:ハケ調整	_	1 	10.0
12	弥生土器	甕	磨滅のため調整不明	底:指頭圧痕		-	6.5
13	弥生土器	壺	体:ハケ調整	体:ナデ調整	1,000	1,000	4.6
14	弥生土器	甕	体:列点文	磨滅のため調整不明	22.2	200	
15	弥生土器	広口壺	口:5条の凹線文 頸:ハケ調整後波状文 突 帯	頸:ハケ調整	18.6	_	-
16	弥生土器	広口壺	口:5条の凹線文 頸:綾杉文	磨滅のため調整不明	13.8	-	

17	弥生土器	広口壺	口:6条の凹線文	頸:ナデ調整	14.0	-	_
18	弥生土器	広口壺	磨滅のため調整不明	磨滅のため調整不明	19.0	_	
DOM: N	3017_12.01.04.07		<u>頸:突帯</u> 口:2条の凹線文+刻み目				
19	弥生土器	長頸壺	頸:14条の凹線文	頸:ナデ調整	14.0	ş .	, s
20	弥生土器	蓋	体:ハケ調整	体:ハケ調整	16.0	4.9	_
21	弥生土器	蓋	体:径4mmの穴が2か所 ヘラケズリ?	磨滅のため調整不明	18.4	4.2	=
22	弥生土器	甕	体:タタキ+列点文	体:指頭圧痕	13.0	-	_
23	弥生土器	甕	体:タタキ	体:ナデ調整	14.6		
24	弥生土器	甕	体:タタキ	磨滅のため調整不明	18.0	-	-
25	弥生土器	甕	口:刻み目+ハケ調整 体:タタキ後綾文	口~体:ハケ調整	18.6	_	3443
26	弥生土器	甕	口:刻み目	口・体:部分的にハケ調整	29.6	=	=
27	弥生土器	薨	体:ヘラケズリ	体:ハケ調整	-	-	3.7
28	弥生土器	甕	体:ハケ調整	体:ハケ調整	-		6.7
29	弥生土器	高杯	口:5条の凹線文 体:タタキ	ロ〜体:磨滅のため調整不 明	38.7	_	_
30	弥生土器	高杯	磨滅のため調整不明	磨滅のため調整不明	27.7	_	
31	弥生土器				500000000000000000000000000000000000000		
32		高杯	磨滅のため調整不明 口:3条の凹線文+ハケ調	磨滅のため調整不明	19.5		_
305/80	弥生土器	高杯	整	口:波状文+扇状文		_	_
33	弥生土器	鉢	口~体:ハケ調整	体:ナデ調整	11.9	=	-
34	弥生土器	高杯?	脚:ハケ調整	脚:ヘラケズリ	_	_	12.2
35	弥生土器	高杯	脚:ハケ調整	脚:ヘラケズリ		-	15.6
36	弥生土器	壺	ロ:3条の凹線文 頸:ハケ調整後ナデ調整、 列点文突帯	頸:ナデ調整	20.6	-	-
37	弥生土器	壺	口:波状文 頸:凹線文 体:波状文	体:ハケ調整	14.6		-
38	弥生土器	藍	口:刻み目 頸:ハケ調整	口~頸:貼付突帯+刻み目	11.4	_	-
39	弥生土器	甕	体:ハケ調整後タタキ?	体:ハケ調整	13.2	==:	-
40	弥生土器	甕	体:タタキ後ハケ調整	剝離のため調整不明	16.9	_	===
41	弥生土器	甕	体:上半部タタキ後ハケ調整 下半部ヘラケズリ	体:ハケ調整後ナデ調整	12.2	-	-
42	弥生土器	高杯	磨滅のため調整不明	磨滅のため調整不明	26.0		-
43	弥生土器	台付鉢	口~体:11条の凹線文	口~体:ナデ調整	30.1		
44	弥生土器	台 付	脚:ナデ調整+凹線文	体:ハケ調整後ナデ調整	-	_	10.0
		水差し	磨滅のため調整不明	脚:ナデ調整	10.0		
45	弥生土器	小型鉢	磨滅のため調整不明	磨滅のため調整不明	10.0	===	_
46	弥生土器	壺	磨滅のため調整不明	磨滅のため調整不明	12.8	-	-
47	弥生土器	短頸壺	口:10条の凹線文	口:ナデ調整	8.0	-	=
48	弥生土器	甕	口:ナデ調整 頭:ハケ調整	口:ナデ調整 頭:ヘラケズリ	18.3	-	-
49	弥生土器	壺	口: 4条の凹線文+刻み目 頸:ヘラミガキ?	口:刻み目 頸:ハケ調整?	23.9	_	=
50	弥生土器	壺	頸:ハケ調整後下半に列点 文突帯 突帯下部に波状文	頸:ナデ調整	<u></u>		-
51	弥生土器	広口壺	磨滅のため調整不明	磨滅のため調整不明	25.0		-
52	弥生土器	広口壺	磨滅のため調整不明 頭:1条の指頭圧痕文突帯	磨滅のため調整不明	20.1	=	
53	弥生土器	広口壺	ロ:ナデ調整 頸:ハケ調整	ロ〜頸:磨滅のため調整不 明	23.1	_	
54	弥生土器	甕	口:ナデ調整+刻み目 体:タタキ	磨滅のため調整不明	14.3	_	-
55	弥生土器	甕	ロ:ナデ調整 体:タタキ+ハケ調整	口:ナデ調整 体:ハケ調整後ナデ調整	17.4	_	-
56	弥生土器	甕	体:ヘラケズリ?磨滅のた め調整不明			_	7.9

57	弥生土器	甕	口:刻み目 体:ナデ調整	口~休・ナデ調軟	30.0	· -	11-0
58	弥生土器	変	磨滅のため調整不明	体:ハケ調整	25.4	=	
59	弥生土器	高杯	日~体:ヘラミガキ	口~体:ヘラ磨き	19.4		
60	弥生土器	高杯	脚:ハケ調整	脚:ヘラケズリ	11.8		
			脚:17条の凹線文、円形の	WW.V45 0			00.0
61	弥生土器	器台	透かし	脚:ハケ調整後指頭圧痕	(-)	i=i	22.8
62	弥生土器	壺	口:波状文 頸:ナデ調整	口:櫛描文	16.9	7	·
63	弥生土器	壺	口:刻み目	口:円形浮文+扇状文	15.8	9-1	()
64	弥生土器	壺	口:刻み目	口~頸:ナデ調整	27.0	:-:	-
65	弥生土器	壺	頭:ナデ調整 口:刻み目 頭:ハケ調整	ロ・タタキ	16.8	2,	
-00	A.Y. Ta Hill	-16-	口:刻み目	口:ナデ調整	10.0		
66	弥生土器	壺	頸:ハケ調整後直線文 体:ハケ調整後波状文	頸:ハケ調整 体:ナデ調整	18.1	-	7
67	弥生土器	広口壺	ロ〜頸:タタキ後ナデ調整 1条の指頭圧痕文突帯	ロ〜頸:磨滅のため調整不明 頸:ハケ調整	22.1		=
68	弥生土器	広口壺	口:3条の凹線文 頸:波状文	磨滅のため調整不明	20.7	· <u> </u>	7-
69	弥生土器	広口壺	磨滅のため調整不明	磨滅のため調整不明	25.6		(
70	弥生土器	直口壺	口:刻み目 ハケ調整後ナ	磨滅のため調整不明	17.8	::	-
	77 -13-13-14	-	デ調整 磨滅のため調整不明	7,070			
71	弥生土器	甕	体:タタキ	磨滅のため調整不明	16.2	1-2	-
72	弥生土器	甕	口:磨滅のため調整不明 体:ハケ調整	磨滅のため調整不明	16.8	N=-	Æ
73	弥生土器	甕	磨滅のため調整不明	磨滅のため調整不明	30.2	(—	_
74	弥生土器	甕	体:ハケ調整後指押さえ	体:ナデ調整	(-	7.4
75	弥生土器	甕	体:ハケ調整後ナデ調整	体:ハケ調整後ナデ調整	<	(—	7.6
76	弥生土器	甕	体:ハケ調整後ナデ調整	体:ヘラケズリ	0-2	-	6.0
77	弥生土器	甕	体:ハケ調整後ナデ調整	磨滅のため調整不明	1-1	1-2	7.5
78	弥生土器	甕	磨滅のため調整不明	磨滅のため調整不明	1-3	U-8	7.0
79	弥生土器	甕	体:ハケ調整+指頭圧痕	磨滅のため調整不明	_		14.7
80	弥生土器	甕	体:ハケ調整後ナデ調整	体:ヘラケズリ			10.0
	弥生土器	高杯	体:凹線文	体:ハケ調整	22.4		10.0
81				磨滅のため調整不明			=
82	弥生土器	高杯	磨滅のため調整不明	岩版のため調査不明	15.0		
83	弥生土器	台付鉢	体:ハケ調整後ナデ調整 脚:指押さえ	体:ヘラケズリ	10.2	5.4	4.0
84	弥生土器	高杯	口:5条の凹線文+刻み目	(0-0	_	_
85	須恵器	杯蓋	天: 櫛描文	天~口:ロクロナデ	14.2	_	_
08/11/24	CONTRACTOR OF THE PROPERTY OF	050000	天:ヘラケズリ				
86	須恵器	杯蓋	口:ロクロナデ	天一口:ロクロナデ	14.7	_	
87	須恵器	杯蓋	天:ヘラケズリ 口:ロクロナデ	天~口:ロクロナデ	13.3	-	
88	須恵器	杯身	底:ヘラケズリ 口:ロクロナデ	底~口:ロクロナデ	12.0	5.2	==
89	須恵器	杯身	底:ヘラケズリ 口:ロクロナデ	底~口:ロクロナデ	13.8	-	
90	須恵器	杯身	底:ヘラケズリ 口:ロクロナデ	底~口:ロクロナデ	13.4	_	
91	須恵器	杯身	底:ヘラケズリ 口:ロクロナデ	底~口:ロクロナデ	12.8	-	_
92	須恵器	高杯	脚:ロクロナデ+方形透か し4か所	脚:ロクロナデ	-	-	12.3
93	須恵器	高杯	脚:ロクロナデ+透かしの 数不明	脚:ロクロナデ	V==	-	8.4
94	須恵器	甕	ロ:ロクロナデ 頸:タタキ+カキ目	口:ロクロナデ 頸:ロクロナデ+ナデ	18.4	1-2	
95	土師器	杯	日~底:ナデ調整 日~底:カー	口~底:ナデ調整	10.0	4.5	_
96	土師器	杯	口~底:ナデ調整	口~底:ナデ調整	10.6	3.8	_
20000	1 One to centralize	13804	NAME OF THE PROPERTY OF THE PR	口:ナデ調整	224	0.0	
97	土師器	甕	口~体:ナデ調整	体:ヘラケズリ	15.0		=

98	土師器	甕	口~体:ナデ調整	口~体:ナデ調整	15.6	=	-
99	土師器	甕	口~体:ナデ調整	口:ナデ調整 体:ヘラケズリ	24.0	-	-
100	土師器	觝	体~底:ハケ調整+ナデ調整	体~底:ナデ調整	-	-	-
101	土師器	魱	口・底:ナデ調整 体:ハケ調整+ナデ調整	ロ〜底:ハケ調整+ナデ調整	16.3	14.6	=
102	土師器	高杯	磨滅のため調整不明	磨滅のため調整不明	12.6	10.1	9.6
103	須恵器	杯蓋	口:ロクロナデ	口:ロクロナデ	13.0	-	
104	須恵器	杯蓋	口:ロクロナデ 天:ヘラケズリ	口~天:ロクロナデ	14.6	-	-
105	須恵器	杯蓋	口:ロクロナデ 天:ヘラケズリ	口~天:ロクロナデ	14.1	-	-
106	須恵器	杯蓋	ロ:ロクロナデ 天:ヘラケズリ	口~天:ロクロナデ		-	-
107	須恵器	杯蓋	口:ロクロナデ 天:ヘラケズリ	ロ〜天:ロクロナデ		4.1	===
108	須恵器	杯蓋	口:ロクロナデ	口:ロクロナデ			
109	須恵器	杯身	口:ロクロナデ 底:ヘラケズリ	口~底:ロクロナデ		-	 :
110	須恵器	杯身	口:ロクロナデ 底:ヘラケズリ	口~底:ロクロナデ	12.2		-
111	須恵器	杯身	口:ロクロナデ 底:ヘラケズリ	口~底:ロクロナデ	11.8	4.8	-
112	須恵器	杯身	口:ロクロナデ 底:ヘラケズリ	口~底:ロクロナデ	13.5	4.5	=
113	須恵器	杯身	口:ロクロナデ 底:ヘラケズリ	口~底:ロクロナデ	12.4	3.4	
114	須恵器	高杯	脚:ロクロナデ 方形透かし4か所	脚:ロクロナデ		_	8.2
115	須恵器	高杯	脚:ロクロナデ 方形透か し4か所	脚:ロクロナデ	1==	_	8.0
116	須恵器	杯	底:ロクロナデ 貼付高台	底:ロクロナデ	1-2		11.8
117	土師器	杯	磨滅のため調整不明	体:指圧痕	12.0	5.0	V —
118	土師器	杯	体:指圧痕	口~体:ナデ調整	12.7	3.8	-
119	土師器	杯	磨滅のため調整不明	体:指圧痕	12.3	4.2	_
120	土師器	验	磨滅のため調整不明	体:ハケ調整+ヘラケズリ	11.5	16.1	_
121	土師器	甕	体:ハケ調整	体:ヘラケズリ	14.0		

付表 4 池上遺跡出土石器観察表

W D	R9 1=	山土地上 屋丛		法量 (cm)		7-11
番号	器種	出土地点・層位	左右	上下	厚み	石材
122	石庖丁	S H 140埋土	4.1	3.7	0.6	粘板岩
123	石庖丁	S H 140埋土	3.2	5.2	0.5	粘板岩
124	石庖丁	包含層	4.5	5.2	0.6	粘板岩
125	石庖丁	SH108埋土	4.6	6.4	0.5	粘板岩
126	石庖丁	SH140埋土	4.0	5.2	3.5	粘板岩
127	石庖丁	包含層	5.2	7.7	0.6	粘板岩
128	石庖丁	包含層	7.3	4.0	0.7	粘板岩
129	石庖丁	S H 140埋土	4.9	10.2	1.0	粘板岩
130	石庖丁未製品	包含層	7.7	6.3	0.9	粘板岩
131	柱状片刃石斧	S H 140埋土	1.8	7.9	0.9	粘板岩
132	扁平片刃石斧	S H01埋土	4.5	8.2	1.7	粘板岩
133	磨製石斧	S D 157	6.7	9.2	2.2	砂岩
134	すり石	SH140埋土	9.5	12.0	6.8	砂岩
135	石錘	南1区包含層	6.1	12.0	6.4	砂岩
136	砥石	S H 140埋土	2.2	3.0	1.1	砂岩
137	砥石	SH116埋土	4.3	11.2	4.2	砂岩

低石 打製石鏃 打製石鏃 打製製石鏃 打製製石鏃 打製製石鉱 折打製製石 が表現石 が表現石 が表現石 が表現石 が表現石 が表現石 が表現る が表現る が表現る が表現る が表現る が表現る が表現る がままる がまる が	S H 140埋土 S H 108埋土 北 5 区北東区包含層 南 4 区包含層 北 2 区包含層 S H 108埋土 南 3 区包含層 S H 02埋土 南 3 区包含層 表採 表採 表 H 115埋土 S X 162 南 1 区包含層 S H 140埋土 S H 140埋土 S H 140埋土 S H 116埋土 S H 116埋土 S H 116埋土 S H 116埋土 S H 116埋土	12.7 0.8 1.3 1.4 1.8 1.0 2.1 1.4 1.5 2.1 4.1 2.0 4.1 4.2 7.6 4.0 1.2 0.8 1.5 1.8	20. 1 2. 7 2. 4 2. 5 2. 7 2. 2 2. 4 3. 7 4. 3 3. 9 2. 8 4. 6 5. 2 4. 6 5. 2 9. 3 2. 2 1. 5 3. 1	5.8 0.4 0.3 0.5 0.6 0.6 0.4 0.5 0.8 1.2 0.6 0.7 1.2 1.9 0.2 0.7 0.3	砂岩 サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サスカイト サスカイト サスカイト サスカイト サスカイト サスカイト サスカイト サスカイト サスカイト
打製石鏃 打製石鏃 打製石鏃 打製石鏃 打製器石鏃 打製器石鏃 打製器子子 類器子子 利片 別 対 片 質 関 対 片 り の の の の の の の の の の の の の の の の の の	北5区北東区包含層 南4区包含層 北2区包含層 SH108埋土 南3区包含層 SH02埋土 南3区包含層 表採 表採 SH115埋土 SX162 南1区包含層 SH140埋土 SH140埋土 SH140埋土 SH116埋土 SH116埋土 SH116埋土 SH116埋土 SH108埋土	1.3 1.4 1.8 1.0 2.1 1.4 1.5 2.1 4.1 2.0 4.1 4.2 7.6 4.0 1.2 0.8 1.5	2. 4 2. 5 2. 7 2. 2 2. 4 3. 7 4. 3 3. 9 2. 8 4. 6 5. 2 4. 6 5. 2 9. 3 2. 2 1. 5	0.4 0.3 0.5 0.6 0.6 0.4 0.5 0.8 1.2 0.6 0.7 1.2 1.9 0.2 0.7	サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト
打製石鏃 打製石鏃 打製石鏃 打製石鏃 打製石鏃 打製器石鏃 打製器石 が表 が対した。 が対した。 が対した。 が対した。 が対した。 が対した。 が対した。 が対した。 が対した。 が対した。 が対した。 が対した。 が対した。 がある。 がる。 がる。 がる。 がる。 がる。 がる。 がる。 が	南 4 区包含層 北 2 区包含層 S H 108埋土 南 3 区包含層 S H 02埋土 南 3 区包含層 表採 表採 S H 115埋土 S X 162 南 1 区包含層 S H 140埋土 S H 140埋土 S H 116埋土 S H 116埋土 S H 116埋土 S H 116埋土 S H 116埋土	1.3 1.4 1.8 1.0 2.1 1.4 1.5 2.1 4.1 2.0 4.1 4.2 7.6 4.0 1.2 0.8 1.5	2. 4 2. 5 2. 7 2. 2 2. 4 3. 7 4. 3 3. 9 2. 8 4. 6 5. 2 4. 6 5. 2 9. 3 2. 2 1. 5	0.4 0.3 0.5 0.6 0.6 0.4 0.5 0.8 1.2 0.6 0.7 1.2 1.9 0.2 0.7	サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト
打製石鏃 打製石鏃 打製石鏃 打製石鏃 打製石鏃 打製器石鏃 打製器石 が表 が対した。 が対した。 が対した。 が対した。 が対した。 が対した。 が対した。 が対した。 が対した。 が対した。 が対した。 が対した。 が対した。 がある。 がる。 がる。 がる。 がる。 がる。 がる。 がる。 が	北 2 区包含層 S H 108埋土 南 3 区包含層 S H 02埋土 南 3 区包含層 表採 表採 S H 115埋土 S X 162 南 1 区包含層 S H 140埋土 S H 140埋土 S H 116埋土 S H 116埋土 S H 116埋土 S H 116埋土 S H 116埋土	1.4 1.8 1.0 2.1 1.4 1.5 2.1 4.1 2.0 4.1 4.2 7.6 4.0 1.2 0.8 1.5	2.5 2.7 2.2 2.4 3.7 4.3 3.9 2.8 4.6 5.2 4.6 5.2 9.3 2.2	0.3 0.5 0.6 0.6 0.4 0.5 0.8 1.2 0.6 0.7 1.2 1.9 0.2 0.7	サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト チャート チャート サヌカイト サヌカイト サヌカイト
打製石鏃 打製石鏃 打製石鏃 打製石鏃 打製石鏃 打製石鏃 打製石鏃 1計器 1計器 1計器 1計器 1計器 1計器 1計器 1計器 1計器 1計器	北 2 区包含層 S H 108埋土 南 3 区包含層 S H 02埋土 南 3 区包含層 表採 表採 S H 115埋土 S X 162 南 1 区包含層 S H 140埋土 S H 140埋土 S H 116埋土 S H 116埋土 S H 116埋土 S H 116埋土 S H 116埋土	1.8 1.0 2.1 1.4 1.5 2.1 4.1 2.0 4.1 4.2 7.6 4.0 1.2 0.8 1.5	2.7 2.2 2.4 3.7 4.3 3.9 2.8 4.6 5.2 4.6 5.2 9.3 2.2	0.5 0.6 0.6 0.4 0.5 0.8 1.2 0.6 0.7 1.2 1.9 1.9 0.2	サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト チャート チャート サヌカイト サヌカイト サヌカイト
打製石鏃 打製石鏃 打製石鏃 打製石鏃 打製石鏃 打製石 り間器 サイフ形石器 の の の の 対 り り り り り り り り り り り り り り り	S H 108埋土 南 3 区包含層 S H 02埋土 南 3 区包含層 表採 表採 S H 115埋土 S X 162 南 1 区包含層 S H 140埋土 S H 140埋土 S H 116埋土 S H 116埋土 S H 116埋土 S H 116埋土	1.0 2.1 1.4 1.5 2.1 4.1 2.0 4.1 4.2 7.6 4.0 1.2 0.8 1.5	2. 2 2. 4 3. 7 4. 3 3. 9 2. 8 4. 6 5. 2 4. 6 5. 2 9. 3 2. 2 1. 5	0.6 0.6 0.4 0.5 0.8 1.2 0.6 0.7 1.2 1.9 1.9 0.2	サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト チャート チャート サヌカイト サヌカイト サヌカイト
打製石鏃 打製石鏃 打製石鏃 打製石鏃 制器 ナイフ形石器 縦長剣片 剣片 剣片 剣片 観片 観片 観片 観片 観片	南 3 区包含層 S H 02埋土 南 3 区包含層 表採 表採 S H 115埋土 S X 162 南 1 区包含層 S H 140埋土 S H 140埋土 S H 140埋土 S H 116埋土 S H 116埋土 S H 116埋土	2.1 1.4 1.5 2.1 4.1 2.0 4.1 4.2 7.6 4.0 1.2 0.8 1.5	2.4 3.7 4.3 3.9 2.8 4.6 5.2 4.6 5.2 9.3 2.2	0.6 0.4 0.5 0.8 1.2 0.6 0.7 1.2 1.9 1.9 0.2	サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト チャート チャート サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト
打製石鏃 打製石鏃 打製石鏃 削器 ナイフ形石器 縦長剣片 剣片 剣片 観片 き製石鏃 き製石鏃 き製石鏃	S H02埋土 南 3 区包含層 表採 表採 S H115埋土 S X162 南 1 区包含層 S H140埋土 S H140埋土 S H140埋土 S H116埋土 S H116埋土 S H116埋土	1.4 1.5 2.1 4.1 2.0 4.1 4.2 7.6 4.0 1.2 0.8 1.5	3.7 4.3 3.9 2.8 4.6 5.2 4.6 5.2 9.3 2.2 1.5	0.4 0.5 0.8 1.2 0.6 0.7 1.2 1.9 0.2 0.7	サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト チャート チャート サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト
打製石鏃 打製石鏃 削器 ナイフ形石器 縦長剣片 剣片 剣片 剣片 軽製石鏃 春製石鏃 春製石鏃	南 3 区包含層 表採 表採 S H 115埋土 S X 162 南 1 区包含層 S H 140埋土 S H 140埋土 S H 140埋土 S H 116埋土 S H 116埋土 S H 116埋土	1.5 2.1 4.1 2.0 4.1 4.2 7.6 4.0 1.2 0.8 1.5	4.3 3.9 2.8 4.6 5.2 4.6 5.2 9.3 2.2	0.5 0.8 1.2 0.6 0.7 1.2 1.9 1.9 0.2 0.7	サヌカイト サヌカイト サヌカイト チャート チャート サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト
打製石鏃 乳器 ナイフ形石器 縦長剣片 剣片 剣片 剣片 剣大 巻製石鏃 巻製石鏃 巻製石鏃	表採 表採 S H 115埋土 S X 162 南 1 区包含層 S H 140埋土 S H 140埋土 S H 116埋土 S H 116埋土 S H 116埋土	2.1 4.1 2.0 4.1 4.2 7.6 4.0 1.2 0.8 1.5	3.9 2.8 4.6 5.2 4.6 5.2 9.3 2.2	0.8 1.2 0.6 0.7 1.2 1.9 1.9 0.2	サヌカイト サヌカイト チャート チャート サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト
制器 ナイフ形石器 縦長剝片 剣片 剣片 剣片 剣片 巻製石鏃 巻製石鏃 巻製石鏃	表採 S H115埋土 S X 162 南 1 区包含層 S H140埋土 S H140埋土 S H116埋土 S H116埋土 S H116埋土	4.1 2.0 4.1 4.2 7.6 4.0 1.2 0.8 1.5	2.8 4.6 5.2 4.6 5.2 9.3 2.2	1.2 0.6 0.7 1.2 1.9 1.9 0.2 0.7	サヌカイト チャート チャート サヌカイト サヌカイト サヌカイト 粘板岩
ナイフ形石器 縦長剣片 剣片 剣片 剣片 剣片 き製石鏃 き製石鏃 き製石鏃	S H115埋土 S X162 南 1 区包含層 S H140埋土 S H140埋土 S H140埋土 S H116埋土 S H116埋土	2.0 4.1 4.2 7.6 4.0 1.2 0.8 1.5	4.6 5.2 4.6 5.2 9.3 2.2 1.5	0.6 0.7 1.2 1.9 1.9 0.2 0.7	チャート チャート サヌカイト サヌカイト サヌカイト 粘板岩
縦長剣片 剣片 剣片 剣片 き製石鏃 き製石鏃 き製石鏃	S X 162 南 1 区包含層 S H 140埋土 S H 140埋土 S H 140埋土 S H 116埋土 S H 116埋土 S H 108埋土	4.1 4.2 7.6 4.0 1.2 0.8 1.5	5. 2 4. 6 5. 2 9. 3 2. 2 1. 5	0.7 1.2 1.9 1.9 0.2 0.7	チャート サヌカイト サヌカイト サヌカイト 粘板岩
到片 到片 到片 野製石鏃 賽製石鏃 賽製石鏃	南 1 区包含層 S H 140埋土 S H 140埋土 S H 140埋土 S H 116埋土 S H 116埋土 S H 108埋土	4.2 7.6 4.0 1.2 0.8 1.5	4.6 5.2 9.3 2.2 1.5	1.2 1.9 1.9 0.2 0.7	サヌカイト サヌカイト サヌカイト 粘板岩
到片 到片 套製石鏃 套製石鏃 套製石鏃	S H140埋土 S H140埋土 S H140埋土 S H116埋土 S H116埋土 S H108埋土	7.6 4.0 1.2 0.8 1.5	5. 2 9. 3 2. 2 1. 5	1.9 1.9 0.2 0.7	サヌカイト サヌカイト 粘板岩
割片・	S H 140埋土 S H 140埋土 S H 116埋土 S H 116埋土 S H 108埋土	4.0 1.2 0.8 1.5	9.3 2.2 1.5	1.9 0.2 0.7	サヌカイト 粘板岩
磨製石鏃 磨製石鏃 磨製石鏃 磨製石鏃	S H140埋土 S H116埋土 S H116埋土 S H108埋土	1.2 0.8 1.5	2.2 1.5	0.2	粘板岩
善製石鏃 善製石鏃 善製石鏃	S H116埋土 S H116埋土 S H108埋土	0.8	1.5	0.7	- Introduction in the control of the
奢製石鏃 奢製石鏃	S H116埋土 S H108埋土	1.5			111100.41
善製石鏃	S H 108埋土				粘板岩
			3.7	0.4	粘板岩
	南5区包含層	0.9	1.7	0.9	粘板岩
					粘板岩
					粘板岩
The Control of the Co		100000000000000000000000000000000000000			粘板岩
The state of the s					粘板岩
	The second secon				粘板岩
					粘板岩
		1			粘板岩
T. (1.5.1.7) (1.5.1.7) (1.5.1.7)	- 1000000000000000000000000000000000000	1		The second second	Transcription of the second
	The state of the s	-			粘板岩
					粘板岩 粘板岩
					粘板岩
					粘板岩
					粘板岩
					緑色凝灰岩
					緑色凝灰岩
AND THE RESERVE OF THE PARTY OF					
	The state of the s				緑色凝灰岩角柱体
					玉龍
		_		91 15	ヒスイ
			15017555		緑色凝灰岩
			751110000	28 25 10	滑石
					滑石
		-			滑石
					滑石
TOTAL PROPERTY OF THE PARTY OF	The same of the sa				滑石
	芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸芸	書製石鏃 S H 140埋土 書製石鏃 S H 140埋土 書製石鏃 S K 139埋土 書製石鏃 S H 108埋土 書製石鏃 S H 140埋土 書製石剣 S H 140埋土 書製石銭 表採 書製石剣 S H 140埋土 書製石剣 S H 108埋土 書製石剣 S H 140埋土 書製石剣 S H 140埋土 書工 S H 140埋土 音玉未製品 S H 102埋土 音玉未製品 S H 140埋土 方玉 X H 108埋土 国工 S H 108埋土 日玉 S H 137埋土 日玉 S H 137埋土 日玉 S H 102埋土 日玉 S H 104埋土 日本 S H 104埋土 日本 S H 104埋土 日本 S H 104埋土 日本 S H 104 日本	書製石鏃 S H 140埋土 2.0 書製石鏃 S H 140埋土 2.1 書製石鏃 S K 139埋土 2.0 書製石鏃 S K 139埋土 2.0 書製石鏃 S H 108埋土 2.5 書製石銭 S H 140埋土 2.7 書製石剣 S H 140埋土 2.2 書製石銭 表採 2.6 書製石銭 S H 140埋土 2.5 書製石剣 S H 140埋土 2.5 書製石剣 S H 108埋土 2.4 書製石剣 S H 108埋土 0.2 書工未製品 S H 102埋土 0.3 書工未製品 S H 140埋土 1.8 日本 B T 100 1.0 書工未製品 S H 140埋土 1.8 日本 B T 100 1.0 書工未製品 S H 108埋土 4.5 日本 S H 137埋土 4.5 日本 S H 137埋土 4.5 日本 S H 137埋土 4.5 日本 S H 102埋土 0.5 日本 S H 102埋土 0.5 日本 S H 104 2.7 日本 S H 105 2.8 <td>書製石鏃 SH140埋土 1.9 4.1 書製石鏃 SH01埋土 2.0 4.7 書製石鏃 SK101埋土 2.1 4.6 書製石鏃 SK139埋土 2.0 4.7 書製石鏃 SK108埋土 2.5 3.5 書製石鏃 SH140埋土 2.7 3.9 書製石剣 南3区包含層 1.0 2.3 書製石剣 SH140埋土 2.2 3.1 書製石針 SH140埋土 2.5 6.9 書製石剣 SH140埋土 2.5 6.9 書製石剣 SH140埋土 2.5 6.9 書製石剣 SH140埋土 2.9 8.0 書製石剣 SH108埋土 2.4 6.8 書製石剣 SH108埋土 2.9 8.0 書工 SH108埋土 0.2 0.2 富玉未製品 SH02埋土 0.3 0.8 富工未製品 SH02埋土 0.3 0.8 富工未製品 表採 2.8 3.1 国工 SH108埋土 4.5 4.5 国工 SH108埋土 4.5 4.5 国工 SH108埋土</td> <td>E製石鏃 S H 140埋土 1.9 4.1 0.3 E製石鏃 S H 140埋土 2.0 4.7 2.5 E製石鏃 S K 139埋土 2.0 4.7 0.4 E製石鏃 S K 108埋土 2.0 4.7 0.4 E製石鏃 S H 108埋土 2.5 3.5 0.2 E製石鏃 S H 140埋土 2.7 3.9 0.3 E製石鉤 南 3 区包含層 1.0 2.3 0.2 E製石鉤 S H 140埋土 2.2 3.1 0.5 E製石鏃 表採 2.7 5.3 0.4 E製石鏃 表採 2.6 1.2 0.3 E製石鏃 表採 2.6 1.2 0.3 E製石鏃 表採 2.6 1.2 0.3 E製石鏃 S H 140埋土 2.5 6.9 0.4 E製石슯 S H 108埋土 2.4 6.8 0.9 E製石슯 S H 140埋土 2.9 8.0 0.4 管里石슯 S H 140中央土坑 0.2 0.2 0.6 管工未製品 S H 140埋土 1.8 0.8 0.3</td>	書製石鏃 SH140埋土 1.9 4.1 書製石鏃 SH01埋土 2.0 4.7 書製石鏃 SK101埋土 2.1 4.6 書製石鏃 SK139埋土 2.0 4.7 書製石鏃 SK108埋土 2.5 3.5 書製石鏃 SH140埋土 2.7 3.9 書製石剣 南3区包含層 1.0 2.3 書製石剣 SH140埋土 2.2 3.1 書製石針 SH140埋土 2.5 6.9 書製石剣 SH140埋土 2.5 6.9 書製石剣 SH140埋土 2.5 6.9 書製石剣 SH140埋土 2.9 8.0 書製石剣 SH108埋土 2.4 6.8 書製石剣 SH108埋土 2.9 8.0 書工 SH108埋土 0.2 0.2 富玉未製品 SH02埋土 0.3 0.8 富工未製品 SH02埋土 0.3 0.8 富工未製品 表採 2.8 3.1 国工 SH108埋土 4.5 4.5 国工 SH108埋土 4.5 4.5 国工 SH108埋土	E製石鏃 S H 140埋土 1.9 4.1 0.3 E製石鏃 S H 140埋土 2.0 4.7 2.5 E製石鏃 S K 139埋土 2.0 4.7 0.4 E製石鏃 S K 108埋土 2.0 4.7 0.4 E製石鏃 S H 108埋土 2.5 3.5 0.2 E製石鏃 S H 140埋土 2.7 3.9 0.3 E製石鉤 南 3 区包含層 1.0 2.3 0.2 E製石鉤 S H 140埋土 2.2 3.1 0.5 E製石鏃 表採 2.7 5.3 0.4 E製石鏃 表採 2.6 1.2 0.3 E製石鏃 表採 2.6 1.2 0.3 E製石鏃 表採 2.6 1.2 0.3 E製石鏃 S H 140埋土 2.5 6.9 0.4 E製石슯 S H 108埋土 2.4 6.8 0.9 E製石슯 S H 140埋土 2.9 8.0 0.4 管里石슯 S H 140中央土坑 0.2 0.2 0.6 管工未製品 S H 140埋土 1.8 0.8 0.3

(2) 池上古里遺跡第2次

当初、今回調査した池上遺跡調査区の東方に、東西方向に細長いトレンチ(約1,045㎡)の重機掘削を行った。人力掘削による排土置場として設定したトレンチ西南隅の一角125㎡と、トレンチ東端における拡張部分80㎡を拡張し、最終的に計1,250㎡を掘削した。弥生土器や古墳時代の土師器などの細片がわずかに包含される黒褐色粘質土層を重機によって除去したのち、黄褐色粘質土層上層において人力による遺構検出を行った。遺構面は、上層の黒褐色粘質土の堆積以前に著しく削平されてはいたが、弥生時代中期後葉の土器および古墳時代前期の竪穴式住居跡や柱穴などを検出した。以下に主要遺構について概述したい。

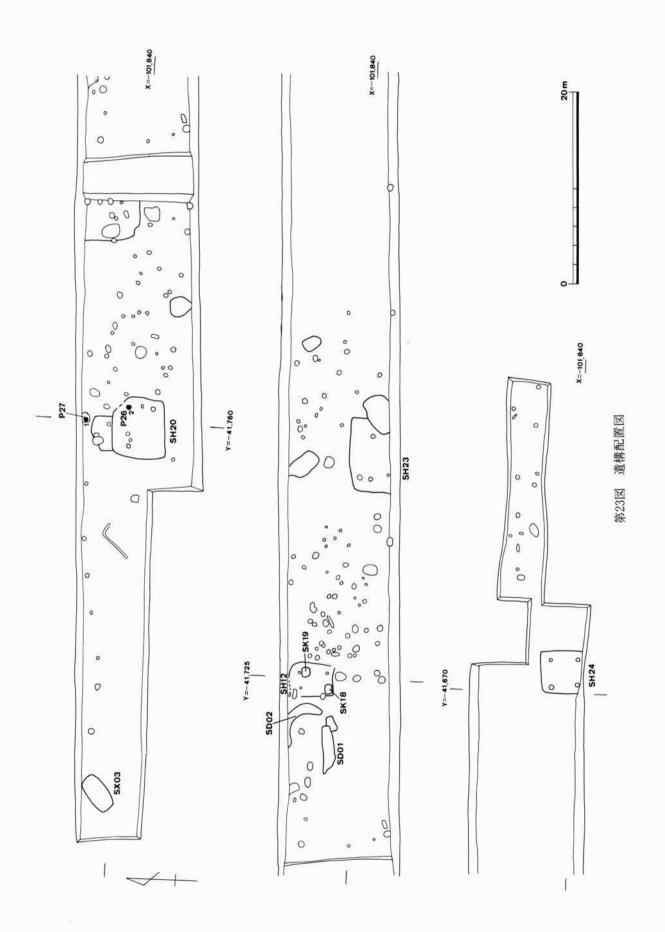
1. 検出遺構

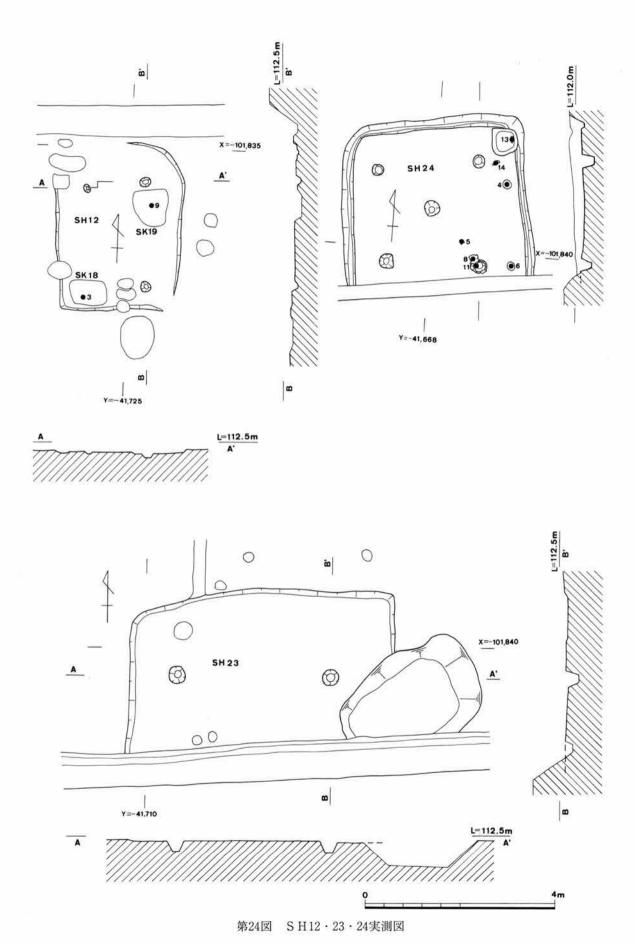
SH12(第24図、図版第15) トレンチ中央付近北側で検出した。南北3.75m、東西2.5mを測る長方形の平面プランをもつ。埋土は暗褐色砂礫土が堆積していたが、遺存高がわずかに5~10cm未満であったため、断面から明確な床面を同定することはできなかった。暗褐色砂礫土を除去すると、数個の柱穴と、北東部分に不定形の土坑SX19、南西隅に南北50cm、東西75cm、床面からの深さ43cmを測る隅丸方形の土坑SK18を検出した。SK18下層から、弥生時代中期後葉の土器片(第25図3)が出土している。また、SX19埋土からは古墳時代前半期と考えられる土師器甕が出土している(第25図9)。包含された土器細片からすれば、この方形竪穴式住居跡と考えられる遺構が、古墳時代前期に遡る可能性がある。規則性のみられない柱穴配列など、住居以外の特殊な竪穴遺構である可能性も捨てきれない。

SH20(第23図、図版第15) トレンチ西側で検出した。南北4.2m、東西4.5mを測る正方形に近い平面プランをもつ。埋土には、暗褐色砂質土が堆積していたが、SH12同様、遺構遺存高が10cmに満たないことから、床面はすでに削平されたものと考える。柱穴は4本柱になると考えられるが、明確なのは北西区の1基のみであり、ほかのものは非常に浅く、柱穴としては認定しがたい掘形であった。顕著な出土遺物はみられなかった。

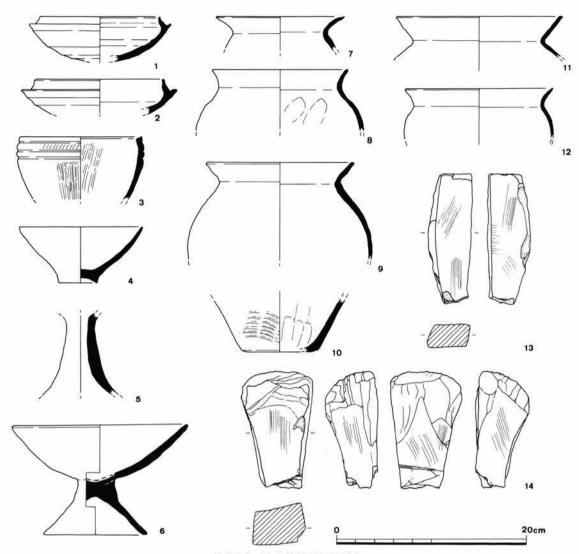
SH23(第24図、図版第15) トレンチ中央、SH12南東で検出した。北半部分のみであったが、東西5.75mを測る。北側壁に周壁溝がめぐる。埋土は暗褐色粘質土だが、遺構遺存高は5cmに満たなかったため、遺構の時期を推し量る遺物はみられなかった。南半部分検出のためのトレンチの拡幅を断念したが、北半部分に主柱穴と考えられる2基の柱穴を検出し、四本柱の上屋構造が想定される。平面形は、正方形のプランを持っていたものと考えられ、古墳時代のものであろう。

SH24(第24図、図版第14) トレンチ東端で、一部拡張して検出した。南北検出範囲3m、東西幅4m、南半部の未検出部分は、トレンチ設定時の排水溝掘削によって破壊してしまったが、ほぼ正方形に近い平面プランをもつ竪穴式住居跡である。4基の主柱穴が認められた。床面には





-37-



第25図 出土遺物実測図(1)

比較的多数の遺物 (第25図 $4\sim8\cdot11\sim14$ 、図版第16) が遺存しており、この竪穴式住居跡が古墳時代前期に遡るものであることがわかる。

2. 出土遺物(第25図1~14、図版第16)

出土土器についての詳細は、観察表(付表 5)に記した。第25図 $1\cdot 2$ はそれぞれ調査区西側 P 27・26から出土している。 3 は S H 12内の S K 18から出土したが、古墳時代の竪穴住居内の土坑に混入したものとみられる。 3 は S H 12、 $4 \sim 8\cdot 11\sim 14$ は S H 24から出土した。 9 は S H 12内、 S K 19から出土した。 古墳時代前半期の土師器が竪穴式住居跡の主要な遺物である。

(野島 永)

まとめ

今回の調査地は、池上遺跡の南東隅にあたり、遺構密度は希薄になると想定された。また、東側に隣接する池上古里遺跡は初めての面的な調査であり、両遺跡の関連を知る上でも重要であると考えられた。調査の結果、検出した遺構は、池上遺跡では弥生時代中期の竪穴式住居跡2基、

番号	器種	器形	外面調整	内面調整	口径(cm) (復原径)	器高(cm) (残存高)	底径(cm) (復原径)
1	須恵器	杯	ヘラ削り	回転ナデ	(12.6)	(4.65)	7
2	須恵器	杯	ヘラ削り	回転ナデ	(13.5)	(3.65)	
3	弥生土器	壺	凹線+小口圧痕 +ミガキ	ハケ+ミガキ	(12.6)	(6.5)	
4	土師器	鉢	不明	不明	13	5.9	
5	土師器	高杯	不明	不明	不明	(8.5)	
6	土師器	高杯	ナデ+ミガキ	ナデ+ミガキ	18.4	11.5	
7	土師器	甕	不明	不明	(13.5)	(3.6)	
8	土師器	甕	ハケ	ナデ	(14.2)	(6.5)	
9	土師器	甕	ナデ	ナデ	(15.4)	(10.2)	
10	弥生土器	甕	タタキ	ナデ	We say	5.3	(8.0)
11	土師器	魙	ナデ	ナデ	(17.6)	(4.3)	
12	土師器	甕	不明	不明	(15.4)	(5.2)	

付表 5 池上古里遺跡出土土器観察表

土坑2基、流路4条と古墳時代後期の竪穴式住居跡10基と古墳時代以降の掘立柱建物跡1棟などと遺構密度は高く、弥生時代中期ならびに古墳時代後期の住居跡などの遺構が重複することが判明した。第4・5次調査の成果でも、調査地の南側に遺構が集中する傾向があり、今回の調査地付近に大型の住居が点在するなど、両時期において集落の中で重要な位置にあったと推察できる。さらに南方約100mには西里遺跡が所在する。この遺跡は、道路工事時に発見された遺跡で、池上遺跡と同様に弥生時代から奈良時代にかけての土器が散布する。池上遺跡が南方に広がる可能性もあることから、関連を考える必要があり今後に期待される。

今までの調査は、当遺跡を南北に縦断する形で実施されてきた。今回の調査は、遺跡南端部を 東西に横断する形での調査であり、遺跡の広がりを知る上でも良好な資料を得ることができた。 弥生時代の出土品では、良好な石製品に混じって玉作り関連のものも少量出土しており、弥生時 代の玉作りの作業工程を示す資料も得た。また、古墳時代には、住居中央の床面が非常に硬く焼 けしまった部分を数か所確認しており、鍛冶炉の可能性が考えられたが、鍛造剣片などの検出に は至らなかった。

また、隣接する池上古里遺跡からも弥生時代中期の土器片や古墳時代前期の竪穴式住居跡などを確認したことから、池上遺跡だけでなく周辺に所在する池上古里遺跡や西里遺跡などとの関連を考える必要がある。また、両遺跡の間に自然流路(谷地形)を確認している。この谷地形は、弥生時代には存在したが、古墳時代には埋没したと考えられ、この付近の地形が大きく変化したことが判明した。

本遺跡は、弥生時代中期と古墳時代後期の丹波地域を知る上で重要な遺跡であり、検出した遺構密度は予想を上回るものであった。このような点からも、再度、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡の広がりを検討する必要があると考える。今後の調査によって、より一層遺跡の性格が解明されていくと期待される。

(岡﨑研一)

- 注1 明田郁美・明田喜代子・浅田サダ枝・麻田志づ江・浅田昭二・天池佐栄子・井上聡・今福豊・大内 正美・大内ミユキ・岡崎ヨシコ・緒方優子・笠浪恒正・川端美恵・小寺明美・川勝千代・木村まさ 江・古賀友佳子・杉山雅之・宅間のり子・宅間正夫・宅間美津子・竹井実・竹上てる・東古昌樹・ 中井優志・中川香世子・中川俊治・中島恵美子・西垣久江・西川きぬ子・西河みつ・西河美ゆき・ 人見昭・平井和美・船築紀子・松下道子・松田早映子・松本貴宏・松本敏子・三村保彦・陸田初 代・森川敦子・森口亮・安田裕貴子・山岡匠平・山中道代(敬称略)
- 注 2 谷口悌『八木町遺跡地図-町内遺跡詳細分布調査報告書-』八木町教育委員会 1997 谷口悌『池上遺跡発掘調査概要-第 2 次調査-』八木町教育委員会 1998
- 注3 田代弘ほか『太田遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センタ ー) 1986
- 注4 野々口陽子「余部遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第81冊 (財)京都府埋蔵文化 財調査研究センター) 1998
- 注 5 八木町教育委員会『池上遺跡発掘調査報告書-第 3 次·第 4 次調査-』(『京都府船井郡八木町文化 財調査報告』第 6 集) 2000
- 注 6 野島永ほか「鹿谷遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第52冊 (財)京都府埋蔵文化財調査 研究センター) 1993
- 注7 三好博喜『天若遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第20冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 注8 鵜島三壽「国道9号バイパス関係遺跡平成2年度発掘調査概要(1)八木嶋遺跡第2次」(『京都府遺 跡調査概報』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注9 沢田弘「八木町の城」(『郷土誌八木』第4号(特集号) 八木史談会) 1993 上島享「池上院と神護寺・丹波国府」(『郷土誌八木』第10号 八木史談会) 2000 細見末雄『丹波の荘園』名著出版 1980
- 注10 中川和哉ほか「池上遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第91冊 (財)京都府埋蔵文 化財調査研究センター) 2000

2. 府営ほ場整備事業(三俣地区) 関係遺跡発掘調査概要

はじめに

杉北遺跡は亀岡市旭町杉・樋ノ口に所在する奈良・平安時代を中心とした集落遺跡である。里 遺跡は同旭町美濃田に所在する弥生時代から中世に至る複合遺跡である。

当該地に府営ほ場整備事業(三俣地区)が計画されたことから、遺跡に影響を及ぼす地点について亀岡市教育委員会が試掘調査を行い、遺構が確認された地点を中心として亀岡市教育委員会、京都府教育委員会が調整を図り、調査範囲を確定した。また、その範囲の発掘調査を京都府南丹土地改良事務所の依頼を受けて当調査研究センターが実施することになった。

杉北遺跡第7次調査は、旭町樋ノ口において古墳時代の住居跡が確認されたことから、平成13年7月4日から8月20日まで、調査面積約600㎡を、里遺跡第2次調査は、旭町大通において奈良時代の建物跡が確認されたことから、平成13年8月23日から10月9日まで約600㎡を、里遺跡第3次調査は、旭町森本において弥生・古墳時代の竪穴式住居跡が確認されたことから、平成13年11月22日から12月20日まで約200㎡の調査を実施した。

本概要は、杉北遺跡第7次調査・里遺跡第2次調査について報告するものであり、里遺跡第3次調査については次年度以降、改めて報告する。



第26図 杉北·里遺跡調査地位置図(1/25,000)

現地調査は、調査第2課課長補佐兼調査第1係長水谷壽克、同主任調査員戸原和人、同調査員松尾史子、第2係主任調査員小池寛が担当した。調査にあたっては亀岡市教育委員会や京都府教育委員会をはじめとする関係諸機関や地元旭町自治会、関係区の区長の方々から多大なご協力を得た。また、寒暑の中、作業員として参加いただいた地元住民の方々、調査補助員、整理員には記して感謝の意を表したい。

なお、調査に係る経費は、全額京都府 南丹土地改良事務所が負担した。

(水谷壽克)

(1)杉北遺跡第7次

今回の調査地は旭町樋ノ口93(第1トレンチ)・94(第2トレンチ)・95(第4トレンチ)・100(第3トレンチ)番地を対象とした。杉北遺跡の所在する旭町の樋ノ口周辺は、遺跡の東で標高613.7mの三郎ヶ岳を頂とした南北に連なる山稜に端を発する三俣川水系によって形成された扇状地形を呈している。また、三俣の地名が由来する3条の河道は北から現在の三俣川のほか、本調査地の西と東に地形図から読み取ることができる。これらの河道は、氾濫を繰り返しながらその流れを替え、現在の景観を形成している(第27図)。

1. 調査の概要

今年度の調査では、当初4か所にトレンチを設定した。第1トレンチは、平成12年度に亀岡市



-42-

教育委員会によって試掘調査され、6世紀前半頃の竪穴式住居跡が検出された第9トレンチを含むトレンチで、溝やピットを検出した。第2トレンチでは、中世の遺物を出土するピットを検出している。

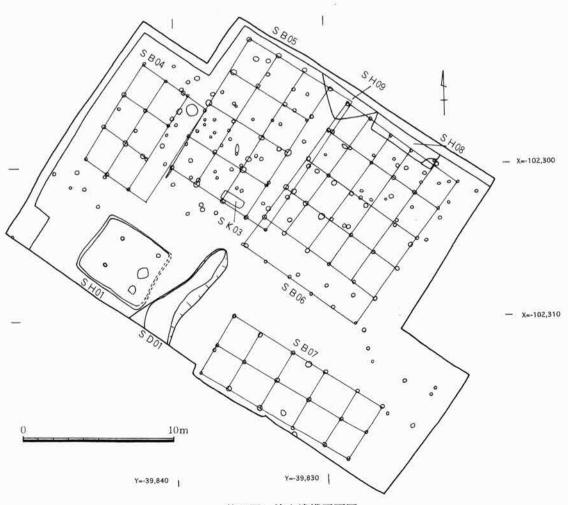
第3・4トレンチでは、耕作土、床土の下には洪水の堆積による砂や礫層が被っており、遺構・遺物は検出できなかったため、第1・2トレンチの間を拡張して、調査を行った。

調査の結果、古墳時代の竪穴式住居跡 3 基、鎌倉・室町時代の掘立柱建物跡 4 棟、溝や柱穴などを検出した。

(1)検出遺構

溝跡SD02 調査地の中央南寄りで検出した南北溝である。幅1.5~3.5m、深さ約0.1mを7.2 mにわたり検出した。溝内からは、土師器片が出土したが時期を確定できるものはなかった。

竪穴式住居跡 S H 01 調査地の南西で検出した。住居跡の規模は、南北約4.4m、東西約5.0m を測り、平面形は方形を呈する。検出した住居の内側には、壁面にそって幅約10cm、深さ約10cm の周壁溝がめぐっている。また、住居の東側の中央部には馬蹄形状の焼土が広がっており、この 場所には幅約0.8mの竈が築かれていたことが明らかになった。住居の埋土中からは、須恵器の 壺や土師器片が出土している。

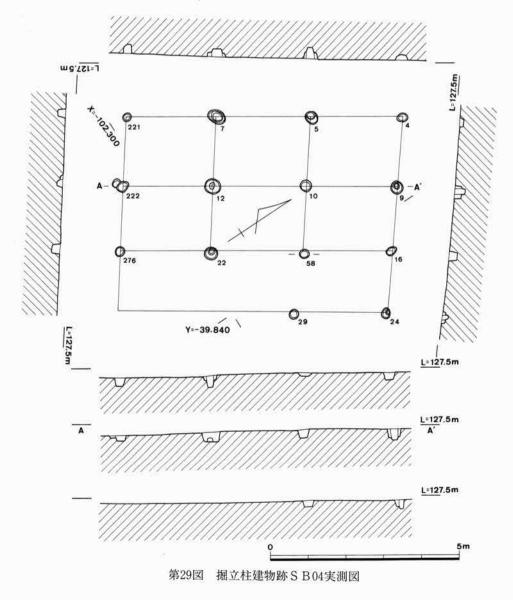


第28図 検出遺構平面図

竪穴式住居跡 S H 08・09 調査地北辺で、その1辺もしくは2辺を検出したが、規模は不明である。出土遺物は無い。

掘立柱建物跡 S B 04 調査地の西寄りで検出した桁行約7.5m、梁間約3.6mを測る総柱の建物である。南北 3 間、東西 2 間の建物で、建物の主軸方向はN-34°30′-Eである。柱の掘形は直径が0.3~0.4mで、0.2~0.3mの深さを測る。柱間は、桁行で約2.0m、梁間で約1.8mを測る。東の1 間は1.6mと他の柱間より狭く、土庇と考えられる。柱穴内からは、P-9から瓦器椀や土師器の皿、羽釜などが出土した。

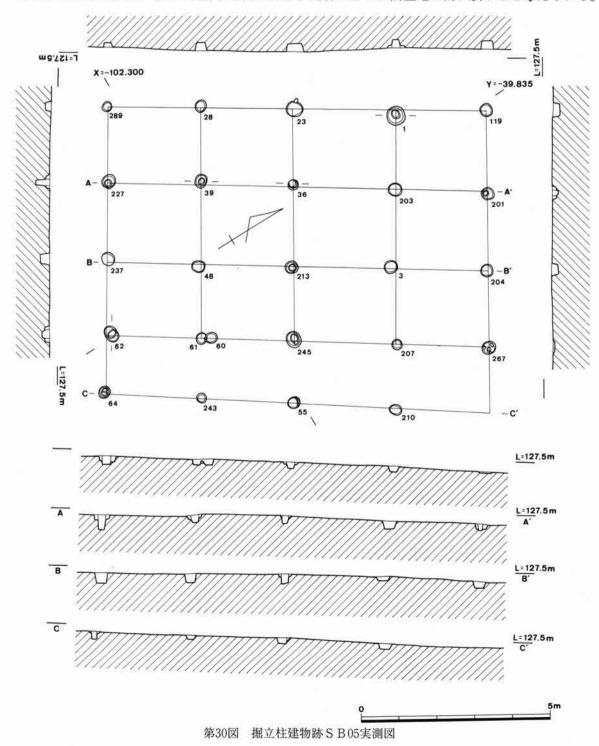
掘立柱建物跡 S B 05 掘立柱建物跡 S B 04の東で検出した桁行約10.0 m、梁間約7.5 mを測る 総柱の建物である。南北4間、東西3間の建物で、建物の主軸方向はN-33°40′-Eである。柱穴の掘形は直径が $0.3\sim0.4$ mで、 $0.2\sim0.4$ mの深さ測る。柱間は、桁行が長く約2.5 m、梁間で約2.0 mを測る。東の1間は1.5 mと他の柱間より狭く、土庇と考えられる。柱穴内からは、P-1 から土師器小皿、瓦器椀が、P-55 から土師器小皿、月波産の瓦器椀、中国製の青磁が、P-203 から中国製の白磁椀などが出土した。

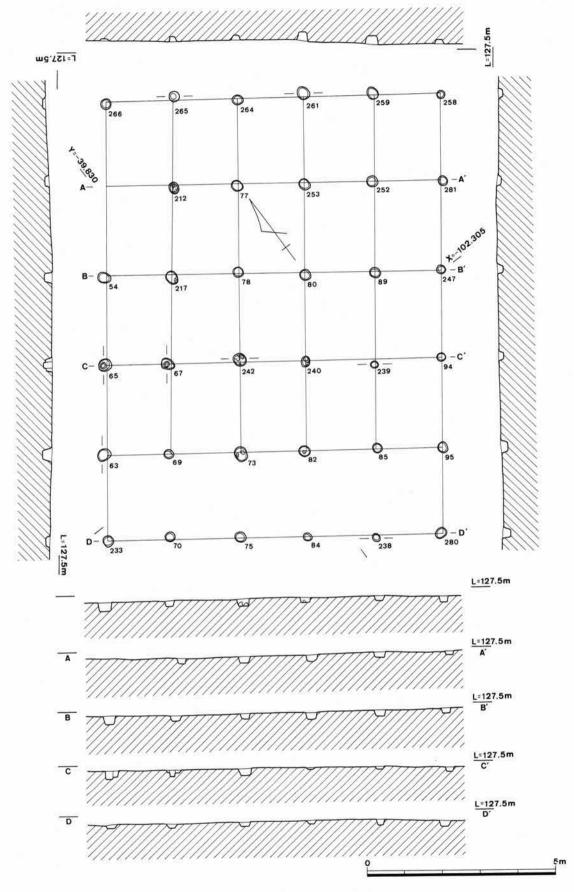


-44 -

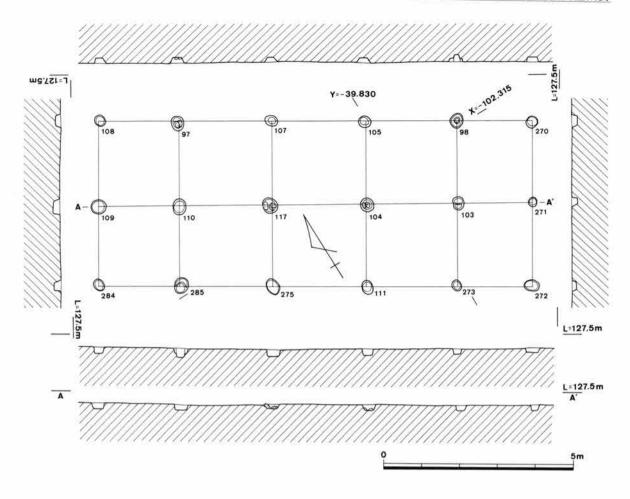
掘立柱建物跡 S B 06 調査地の中央で検出した桁行約9.0 m、梁間約11.5 mを測る総柱の建物である。東西 5 間、南北 5 間の建物で、建物の主軸方向は N $-36^{\circ}40'$ - E である。柱穴の掘形は直径が約0.3 m で、 $0.1\sim0.3$ m の深さを測る。柱間は、梁間が長く約2.3 m、桁行では約1.8 m を測る。南辺の柱列は全体に細く、庇の柱列と考えられる。柱穴内からは、P-89 から緑釉陶器の椀や、瓦器皿、土師器の皿などが出土した。

掘立柱建物跡SB07 調査地の南東で検出した南北約4.2m以上、東西約11.6mの総柱建物である。柱は南北2間、東西5間分を確認したが、建物はさらに調査地の南に広がると考えられる。





第31図 掘立柱建物跡SB06実測図

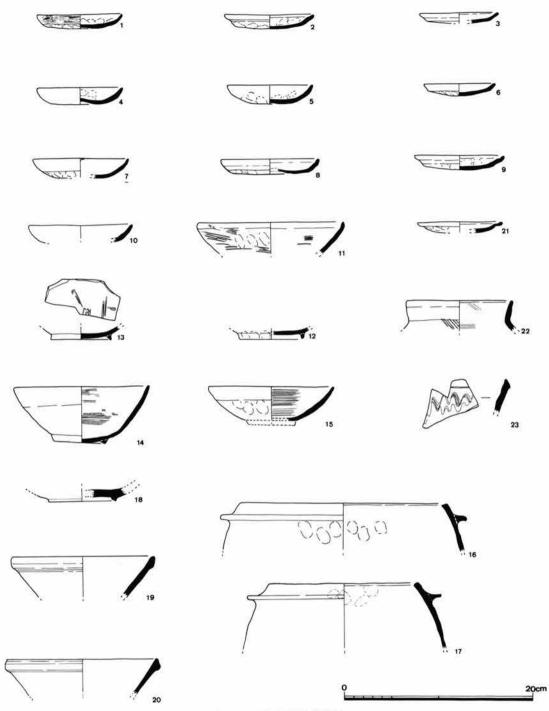


第32図 掘立柱建物跡 S B 07実測図

柱穴は直径が約0.2mで、約0.2mの深さを測る。柱間の距離は、東西が長く2.3m、南北では1.8 mを測る。柱穴内からは、P-98から土師器小皿、瓦器椀片が、P-107から土師器小皿、P-108 から土師器小皿などが出土した。

(2)出土遺物(第33図、図版第20)

今回の調査で出土した遺物は、古墳時代の土師器・須恵器、平安時代の緑釉陶器、鎌倉・室町時代の瓦器椀類・土師器類・貿易陶磁器類が中心である。



第33図 出土遺物実測図

1 · 2 · 18: S B 06

 $3 \sim 7$: S B 07 $8 \sim 14 \cdot 19 \cdot 20$: S B 05

15~17: SB04

23: SH01

21 · 22:包含層

器高1.1cmの3・6と口径9.0cm、器高1.6~2.0cmの4・5、口径10.0~10.2cm、器高1.6~2.0cm の7・8に大別される。

2. まとめ

今回の調査では、古墳時代の竪穴式住居跡3基と鎌倉・室町時代の掘立柱建物跡4棟などを検 出した。杉北遺跡では、平成9・10年度に行われた京都府教育委員会と亀岡市教育委員会の調査 によって、今回の調査地の南西約500mで、古墳時代の竪穴式住居跡が8基検出されている。これらの竪穴式住居跡は、北東から南西に流れ出した旧三俣川の自然堤防にそって営まれていたと考えられる。

また、旧三俣川の自然堤防上には、古来からの周山街道が里道として残っており、鎌倉・室町時代の掘立柱建物もこの方向に沿って建てられていた。SB04~06はそれぞれ庇部分や軒部分で重複しており、時期差があるものと考えられる。

(戸原和人)

(2) 里遺跡第2次

1. 調査の概要

里遺跡では、亀岡市教育委員会の試掘調査により、調査地一帯に奈良時代の掘立柱建物跡群が 存在することが確認されたため、最も遺構が密集する部分を中心に面的な発掘調査を実施した。

今回、実施した調査地の遺構検出面は、標高約117mを測り、ほぼ平坦面を呈している。検出した遺構には土坑や溝などがあり、調査地のほぼ全面において円形ないし方形の柱穴を検出している。柱穴の分布には部分的な粗密がみられるが、調査地周辺には、同様な平坦面が広がっていることから、未調査部分の広い範囲に掘立柱建物跡群を中心とした諸施設が存在する可能性が指摘できる。

(1)検出遺構

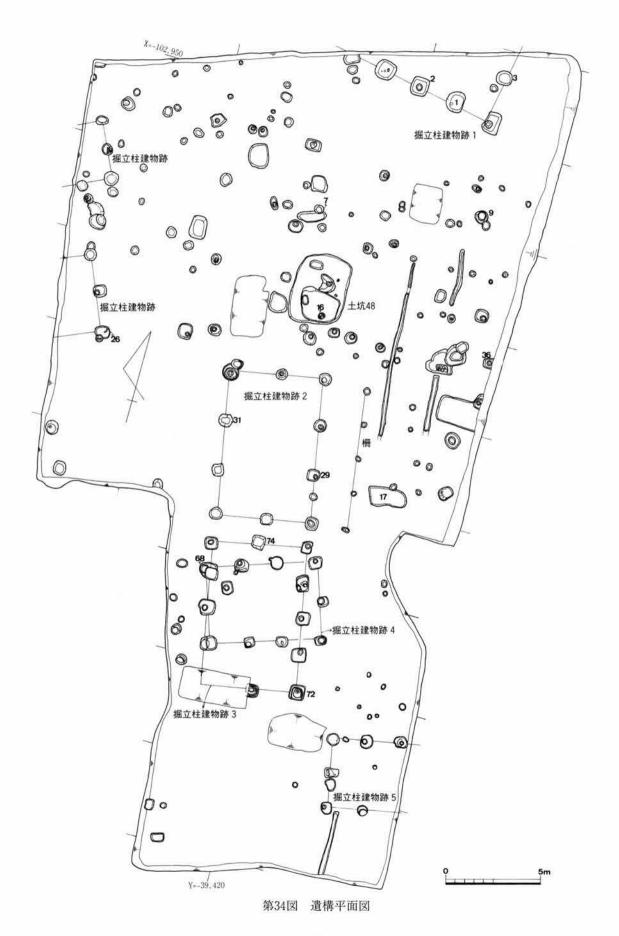
検出した柱穴群から確実に復原できる掘立柱建物跡の棟数は、わずか 5 棟であるが、トレンチ 西端では、後述する掘立柱建物跡 4 とおおむね同一の主軸を有する 2 間分の柱穴列を確認してお り、掘立柱建物跡である可能性も指摘できる。

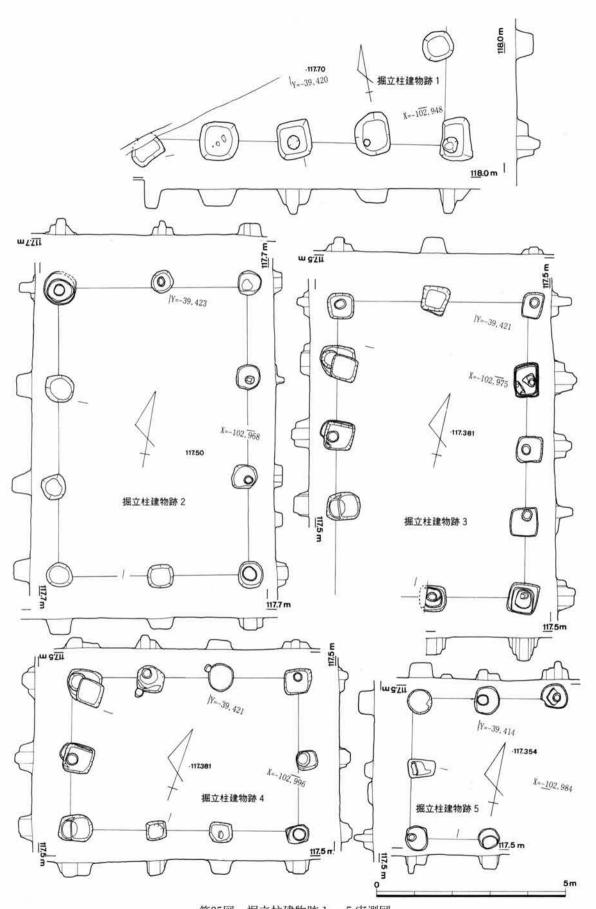
以下、主要な検出遺構について概観しておきたい。

掘立柱建物跡1は、一辺1.1mの方形掘形をもつ柱穴によって構成される東西棟である。南北1間(2.3m)以上、東西3間(8.4m)以上の規模に復原でき、建物の主軸は、座標北から98°東に振っている。梁間の南東隅の柱穴が、掘立柱建物跡の復原線からわずかにずれるが、柱穴の規模や深度が酷似していることから、一連の掘立柱建物跡を構成する柱穴として認識できる。

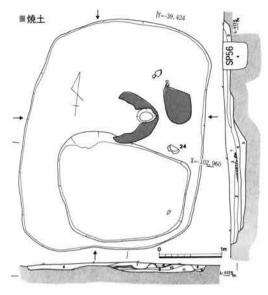
掘立柱建物跡2は、直径0.6mの円形ないしは隅丸方形の掘形をもつ柱穴によって構成される 南北棟である。桁行3間(7.6m)、梁間2間(5.2m)の規模であり、主軸は、座標北から9°西に 振っている。柱間距離は、8尺(2.4m)である。なお、掘立柱建物跡2の東側には、桁行と同じ 距離を有する柱列を1条検出しており、掘立柱建物跡2に付随する庇か柵として認識できる。

掘立柱建物跡 3 は、一辺0.7mの方形の掘形をもつ柱穴によって構成される南北棟である。桁 行 4 間(7.6m)、梁間 2 間(5.2m)の規模に復原でき、主軸は、座標北から 9 。西に振っている。柱間距離は、桁行が1.5m、梁間が2.4~2.6mを測る。





第35図 掘立柱建物跡 1~5実測図



第36図 土坑48実測図

先に述べた掘立柱建物跡2と比較すれば、梁間および桁行はほぼ同一規模である。が、掘立柱建物跡2の桁行の柱間が、3間であるのに対して、掘立柱建物跡3の柱間は、4間である点が大きく異なっている。なお、両掘立柱建物跡は隣接しており、同時に併存したか否かについては、事例研究などを通して検討する必要があるが、同一規模でありながら、柱間が異なっていることは、各々の掘立柱建物跡の使途と密接な関係があると思われる。

掘立柱建物跡 4 は、一辺0.6mの方形掘形をもつ 柱穴によって構成される東西棟である。桁行 3 間 (6.0m)、梁間 2 間(4.6m)の規模であり、建物の主

軸は、座標北から73°東に振っている。柱間距離は、桁行が7尺(2.1m)、梁間が同じく7尺(2.1m)を測る。

掘立柱建物跡 5 は、一辺0.6mの方形の掘形をもつ柱穴によって構成される建物跡である。桁 7 2 間以上(3.8m)、梁間 2 間(3.8m)の規模に復原でき、建物の主軸は、座標北から79°東に振っている。

土坑48は、南北約3.7m、東西約3mの隅丸長方形の平面プランを有し、ほぼ中央に「U」字形の竈をもつ。床面の北半と南半の高さは、北半が約0.2m高く、通有に見られる竪穴式住居跡とは床面の様相が著しく異なっている。また、周壁溝も存在しないことから煮炊に使途した施設である可能性が指摘できる。

(2)出土遺物

出土遺物には、縄文時代の石鏃、弥生時代後期から古墳時代前期の土器、奈良時代の土師器および須恵器、鎌倉時代の瓦器などがある。

 $1\cdot 3\sim 5$ は弥生土器の甕である。口径および口縁部の形状が各々異なっているが、弥生時代後期に比定できる特徴をもっている。 2 は、口縁端部内面が肥厚し、体部をハケにより調整する甕である。古墳時代前期に比定できる。

8は、内面に暗文が観察できる土師器の杯である。10~15は、須恵器の蓋である。口径は各々異なるが、口縁端部の断面形態が逆三角形状を呈する共通の特徴が見られる。

18~21は須恵器の杯A、22~25は、須恵器の杯Bである。

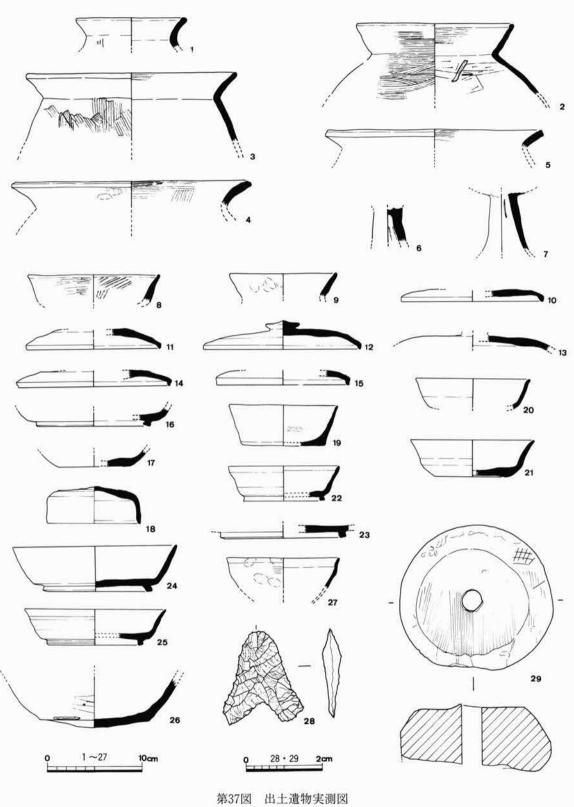
27は、口径12.0cmを測る瓦器椀である。外面の一部に暗文が観察できる。

28は、チャート製の石鏃である。29は、直径4.1cmの滑石製の紡錘車である。

2. まとめ

今回の発掘調査では、奈良時代に比定できる掘立柱建物跡とそれに付随する土坑などを検出し

府営ほ場整備事業(三俣地区)関係遺跡発掘調査概要



1:柱穴1 2:柱穴2 6 · 11 · 14 · 17:土坑17 12 · 18 · 24: 土坑48

20・21:柱穴16

28:柱穴59 29:土坑84

3:柱穴29 4:柱穴3 5:柱穴37 7 · 9 : 柱穴68 8:柱穴36 10 · 13: 柱穴31 15: 柱穴26 16: 柱穴72 19: 柱穴 9 25・27: 柱穴7 22 · 23:包含層 26: 柱穴74

た。周辺域では初出の遺構群であり、奈良時代における当地の歴史的環境を考察するうえで、基礎資料を得ることができた。特に、掘立柱建物跡 $1 \sim 5$ は、奈良時代の一般的な集落のありかたと少なからず様相が異なっており、その性格については、今後とも継続して検討する必要がある。なお、包含層から出土した弥生土器や奈良時代の柱穴から出土した古墳時代前期の古式土師器は、すでに消失した遺構が存在したことを示唆している。

(小池 寛)

おわりに

今回、府営ほ場整備事業にともない発掘調査を実施した杉北遺跡第7次・里遺跡第2次調査は、 それぞれの遺跡範囲内において遺構に影響を及ぼす限られた地点での調査であったが、事実報告 で述べたように貴重な成果を得ることができた。初出の考古資料も含んでおり、今後近隣での調 査で、当該地域の歴史的環境を復原する際の基礎的な資料となれば幸いである。

- 注1 青木政幸・天池佐栄子・西村治郎・山口卓也・宅間のり子・森口亮・杉原実・緒方信幸・金原寿 江・山本茜・高田眞由美・関口睦美・田中美恵子・藤井矢壽子・柿谷悦子・松元須代・原野実子・ 木村まさ江・平井房枝・山下秋雄・山下春子・平井良子・東前愛子・大内ミユキ・川勝亮三・大内 照子・西尾節子・川勝丘司・平井照子・平井啓次・中野ゆかり・國府貴志・中本隆夫・平井賢次・ 平井厚生・川勝朗正・川勝一真・川勝清美・藤山喜市・石田栄・國府シゲノ

3. 内里八丁遺跡第16·17次発掘調査概要

1. はじめに

内里八丁遺跡は八幡市大字内里小字八丁・中島・日向堂に所在する。これまで、第二京阪自動車道(京都南道路)の建設工事に先立って、当調査研究センター、京都文化博物館による調査が実施されてきた。今回の発掘調査は第二京阪自動車道にアクセスする府道八幡木津線整備事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

調査対象地は南北に延びる第二京阪自動車道を挟む東西の2か所(内里小字今福・日向堂)に分かれ、東側の地区をA地区、西側の地区をB地区と呼称することとした。なお、調査次数については、八幡市教育委員会が調整を図り、文末の付表1に示すとおり整理された。

第16次調査は平成12年12月20日から平成13年2月27日にかけて実施し、A地区の試掘調査を実施するとともに、B地区の上層遺構(中世以降)を中心とした面的調査を実施した。

第17次調査は平成13年4月18日から9月27日にかけて、A地区の面的調査および、B地区の中世以前の遺構の調査を実施した。調査面積はA地区約800㎡、B地区約900㎡、計約1,700㎡である。現地調査は、調査第2課課長補佐兼調査第1係長水谷壽克、専門調査員石尾政信、調査員石崎善久が担当した。

調査は重機にて表土を掘削することから開始し、その後、人力で包含層の除去作業、遺構の掘削作業を行った。写真撮影、遺構実測作業は適宜行った。また、B地区の飛鳥~平安時代の遺構、B地区の弥生時代を中心とする遺構については空中写真撮影を行った。平成13年9月20日には現地説明会を実施し、約60名の参加を得ることができた。

本概要報告で用いた座標は国土座標第6座標系、方位は座標北、標高はT.P.である。遺構番号については現地作業段階で付した番号、略号を踏襲している。

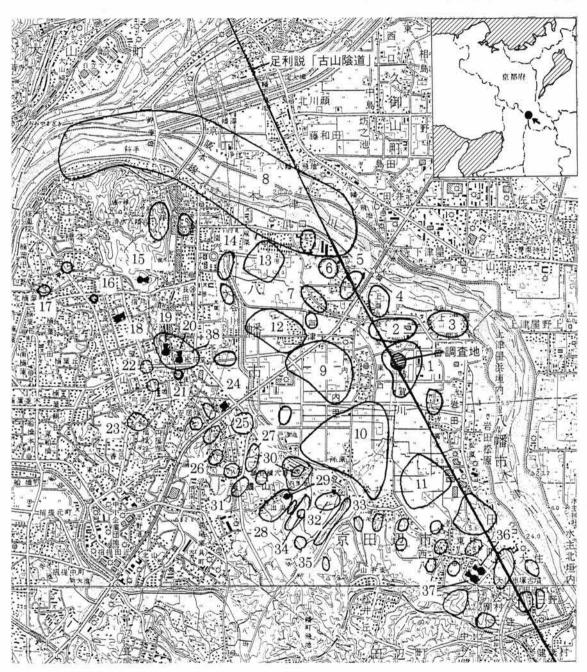
調査に際しては関係諸機関からご教示、ご指導を得ることができ、また、補助員・整理員として参加していただいた方からも多数のご助力をいただくことができた。記して謝意を表したい。なお、調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

2. 位置と環境

八幡市は山城盆地の西南部に位置し、西辺から南辺を男山丘陵から連なる丘陵部が占め、北東部には木津川により形成された沖積平野が広がる。また、木津川北部には、かつて淀川水系の遊水池として機能した巨椋池が存在していた。内里八丁遺跡は、このうち、木津川南岸の平野中心部に位置し、旧木津川により形成された自然堤防上に立地する。

八幡市域を中心とした遺跡の動向について概観すると、旧石器時代に属するものとして、ナイ

フ形石器が出土した荒坂遺跡、宮ノ背遺跡がある。縄文時代の遺跡は、現在の所、後期とされる 石錐が出土した金右衛門垣内遺跡、晩期の土器が出土した内里八丁遺跡が知られる。弥生時代に なると遺跡数は大幅に増加する。中期の集落として内里八丁遺跡、金右衛門垣内遺跡が、方形周 溝墓群として幸水遺跡が知られている。後期段階では丘陵部に立地する幣原遺跡・西ノ口遺跡・



第38図 調査地周辺遺跡分布図(1/50,000)

	21,00	HATTI POLICE	15 to 15 (1) 00)	0007	
1. 内里八丁遺跡	2. 上奈良遺跡 3	3.上津屋遺跡	4.上奈良北遺跡	5. 出垣内遺跡	6. 下奈良遺跡
7. 今里遺跡	8.木津川河床遺跡	亦 9. 内里五丁	遺跡 10.新田遺	遺跡 11. 魚田遺跡	12. 戸津遺跡
13.河口扇遺跡	14. 嶋遺跡 1	5. 石不動古墳	16. 西山廃寺	17. 平野山瓦窯	18. 茶臼山古墳
19. 西車塚古墳	20. 東車塚古墳 2	1. 志水廃寺	22. 中の山遺跡	23. 幣原遺跡	24. ヒル塚古墳
25. 幸水遺跡	26. 西ノ口遺跡	27. 金右衛門	垣内遺跡	28. 本郷遺跡	29. 王塚古墳
30. 狐谷横穴群	31. 宮ノ背遺跡	32. 女谷横穴	群	33. 荒坂横穴群	34.美濃山廃寺
35. 荒坂遺跡	36. 大住車塚古墳	37. 大住南塚	古墳	38 女郎花遺跡	

宮ノ背遺跡・中の山遺跡、平野部に位置する木津川河床遺跡・内里八丁遺跡を挙げることがで きる。

古墳時代には男山丘陵を中心に多くの古墳が築造された。前期後半とされる石不動古墳、茶臼山古墳、西車塚古墳、東車塚古墳、大住車塚古墳、大住南塚古墳などは木津川西岸を代表する前方後円墳、前方後方墳である。中でも茶臼山古墳出土の阿蘇溶結凝灰岩製の石棺は畿内ヤマト政権との関連を物語る資料として注目される。前期末から中期初頭頃にはヒル塚古墳が首長系譜を引く前方後円墳として知られる。内部主体には2基の粘土槨が採用され、鏡のほか、多数の武器類が副葬されていた。これ以降、大型古墳は築造されなくなる。後期段階では、女谷横穴群、狐谷横穴群、荒坂横穴群など横穴墓が、美濃山丘陵を中心に多数築造される。丘陵の斜面を中心に密集して造墓される様相は、造墓に関して強い墓域規制を受けたものと推される。また、横穴式石室墳が確認されていない点も、この地域の特徴といえよう。古墳時代の集落としては、前期の木津川河床遺跡、内里八丁遺跡、女郎花遺跡が知られるが、豪族居館と考えられる遺構は未検出である。中・後期では内里八丁遺跡を挙げることができる。

飛鳥~奈良時代の遺跡として、寺院遺跡である美濃山廃寺、志水廃寺、西山廃寺が知られる。このうち、志水廃寺、西山廃寺は堂、塔跡や近接する瓦窯が確認され、7世紀後半~末頃の創建年代が考えられている。美濃山廃寺は瓦の出土が確認されているものの、明確な寺院に関連する遺構は未確認である。集落としては、内里八丁遺跡、上奈良遺跡、荒坂遺跡、女郎花遺跡などが知られている。このうち、内里八丁遺跡では今回の調査も含め瓦が多数出土しており、北に近接する上奈良遺跡は、その地名から『延喜式』内膳司条に記載された「奈良園」の候補地として注目され、則天文字を記すものなど多数の墨書土器が出土している点から見ても一般集落とは考えにくい。このほか、生産遺跡として、摂津四天王寺に創建瓦を供給した平野山瓦窯の存在も注意される。

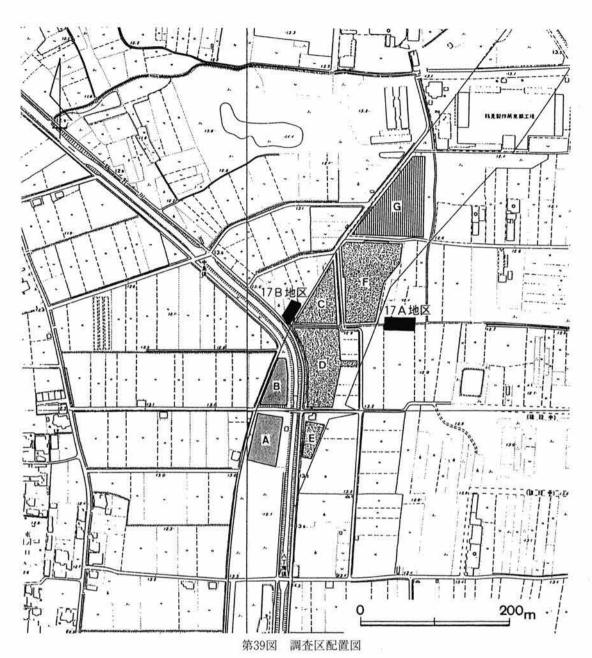
平安時代には男山丘陵の先端付近に石清水八幡宮が創建される。これ以降、門前町として発達した地域が現在の市街地部分となったものと見られる。一方、市域北東部の平野の大半は八幡宮領の荘園となるようである。内里八丁遺跡の周辺部分も「奈良園」を引き継いだ「奈良荘」の一部に相当していた可能性が指摘されている。

3. トレンチの配置

今回の調査地は、第二京阪自動車道に隣接する2か所の地点に設定した。東に設定したトレンチを17Aトレンチ、西に設定したトレンチを17Bトレンチとして報告する。

17Aトレンチは中央に用水路が既設されていたため、南北2か所に分けて設定した。北を17A 北トレンチ、南を17A南トレンチとする。

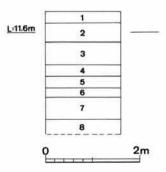
これらを、過去の調査区と対比させると、17Aトレンチは、第二京阪F地区の南東に近接し、17Bトレンチは、第二京阪C地区の南西部にそれぞれ近接して設定したこととなる。



4.17A地区の調査概要

(1)基本的層序(第40図)

基本的な層序は南北両トレンチとも同様であり、上層から、耕作土、暗茶灰色粘質土(洪水



- 1.耕作土
- 3.淡茶灰色砂質土
- 4. 暗灰褐色粘質土

- 6. 淡灰褐色砂質土 7. 暗青灰色砂質土
- 8. 淡灰色砂質土

第40図 17A地区土層模式図

砂? · 2次的堆積土)、淡茶灰色砂質土(島畠盛 2. 暗茶灰色粘質土 土)、暗灰褐色粘質土(島畠形成以前の堆積層)、 淡青灰色砂質土(下層遺構ベース面)、淡灰褐色 5. 淡青灰色砂質土 砂質土、暗青灰色砂質土、淡灰色砂質土の順で あり、暗青灰色砂質土以下は湿地状自然堆積層 であると考える。

(2)上層遺構(第41図)

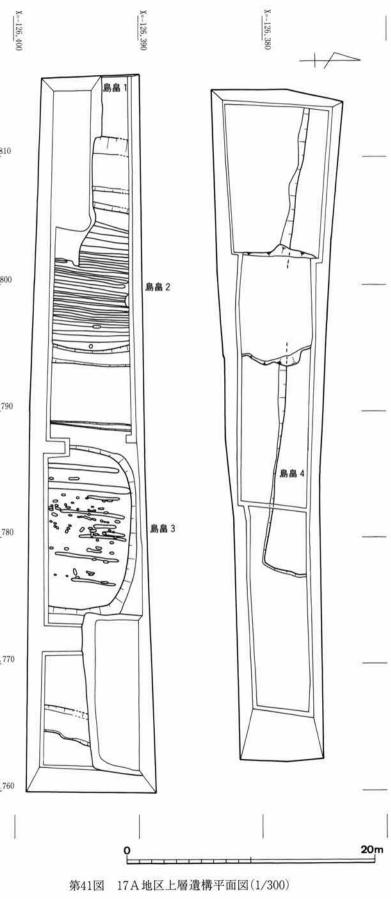
17A地区では上層遺構として、島畠を4か所

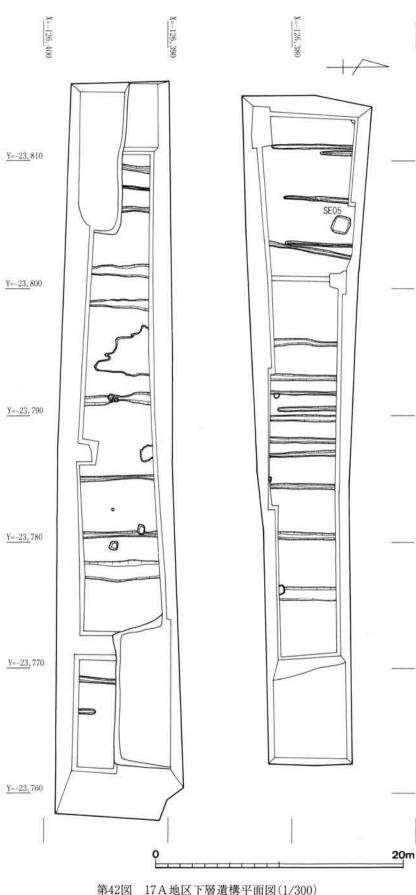
検出した。17A南トレン チでは南北方向に主軸を とる島畠を3基(島畠1~ 3)、17A北トレンチでは 東西方向の島畠を1基(島 畠4)検出した。島畠1は 幅 6 m以上を測る南北方_{Y=-23,810} 向に長い島畠と考えられ る。島畠2は幅12mを測 り、南北方向に主軸をと る。島畠上面では多数の 素掘り溝を検出した。島 Y=-23,800 畠3が幅13mを測りやは り南北方向に主軸をとる。 島畠上面では素掘り溝お よび浅い土坑状の遺構を 検出した。これら土坑状 Y=-23.790 の遺構は、本来素掘り溝 であったものが削平され、 底部の深い部分のみが遺 存したものと考える。

島畠 4 は南トレンチで 検出したものと方位を異 にし、東西方向に主軸を とる。その規模は東西36 m以上、南北 3 m以上を 測る。

このトレンチの東側で は島畠を確認することは できず、島畠群の東端を 確認したものと見られる。 Y=-23,760

これら鳥畠の造成時期 は不明であるが、島畠盛 土層および、島畠上に残 された耕作痕と考えられ





る素掘り溝内から出土した瓦器片から、12世紀後半以降に造成されたものと見られる。

(3)下層遺構(第42図)

3・4層を除去した 段階で検出した。検出 面はおおむね5層上で あるが、南北両トレン チとも東側には5層の 堆積が認められず6層 上で検出した。

遺構は南北方向の素掘り溝、不整形な溝のほか、ピット、土坑などがある。また、北トレンチでは素掘りの井戸1基(SE05)を検出した。

井戸SE05は1辺約
1.3mを測る平面隅丸正
方形プランを呈し、検出
面からの深さは約1.5m
を測る。埋土にはブロッ
ク状のシルトや粘質土が
認められ、廃絶時に埋め
戻されたものと判断され
る。埋土中から土師器片
が出土しており、平安時
代後期には埋め戻された
ものと考える。

素掘り溝群は上層に堆 積する第4層が流入して おり、人為的に埋め戻さ れたのではなく、自然に 埋没したものと判断され る。ピットや土坑は、いずれもこの素掘り溝群を切って検出された。

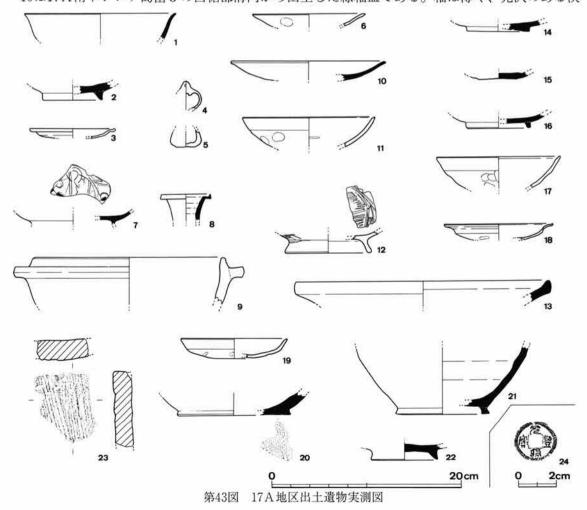
これより下層は、重機による深掘りを行ったところ、砂層とシルトの互層を呈しており、部分的に有機質堆積層が認められる状態であった。以上のような状況から、この地区周辺は、本来、湿地であり、平安時代後期段階で初めて耕作地として土地利用が開始され、居住地として利用されることはなかったものと判断する。

(4) 出土遺物(第43図)

17A地区出土遺物は細片化したものが多く、また、遺構に伴うと考えられるものもほとんどない。大部分が島畠を形成する盛土内に包含されていたものと考える。そのうち主要なもの24点を図示した。

 $1 \sim 7 \cdot 23$ は島畠 $2 \cdot 3$ 間の低位部分から出土した。 1 は青磁椀である。器壁は薄く口縁端部をわずかに外反させる。 2 は灰釉椀である。断面三角形の高めの高台を持つ。 $3 \cdot 6$ は土師器皿である。 3 は「て」字状口縁を有する。 6 はわずかに外方に開く口縁形態を呈する。 4 は手捏ねの土鈴である。 5 は手捏ねのミニチュア土器と考えられる。 $4 \cdot 5$ とも白色の胎土である。 7 は染付皿である。 23は平瓦である。 焼成は軟質で裏面に縄目タタキが観察される。

8・9は島畠3の東低位部分から出土した。8は須恵器壺の口縁、9は土師質の羽釜である。 10は17A南トレンチ島畠3の西裾部溝内から出土した緑釉皿である。釉は薄く、光沢のある淡



緑灰色を呈する。

11・13は島畠2上の素掘り溝、12は島畠3上の素掘り溝から出土した。11は瓦器椀である。磨 耗が著しいが、調整は内面のみにミガキが認められる。13は須恵器鉢である。12は黒色土器椀で ある。高い輪高台を有し、内外面ともミガキが認められる。

14~18は島畠3を構成する盛土層から出土した。14は須恵器椀の底部である。削り出しの平高台を有する。15は白磁皿の底部。16は須恵器杯の底部。17は瓦器椀である。磨耗が著しく、調整が不明瞭であるが、口縁端部に段を持つ。18は土師器皿である。口縁を外上方にのばし端部をつまみ上げる。

19~22・24は島畠 4 周辺の低位部分から出土した。19は土師器皿、20~22は須恵器である。24 は元豊通寳であり1078年初鋳の北宋銭である。

5,17B地区の調査概要

17B地区では、弥生時代後期から中世以降にわたる各時期の遺構を検出した。遺物は現在把握している限り、弥生時代中期~近世に及ぶ各時期の遺物の存在を確認している。調査に際しては、これらの遺構を遺構面ごとに把握するように努めたが、当地区の土色の変化は極めて判断が付きにくく、さらに下層の面で上層の遺構を確認するような状況もあった。従って、必ずしも同一面で検出した遺構が、同一遺構面上の遺構とは言い切れない状態にある。出土遺物の全容についても、十分把握し切れていないため、ここでは概略的に時期をおって説明を行う。

(1)中世以降(第1遺構面)

遺構(第44図) 17B地区では、島畠を3基検出した。西に位置するものから島畠 $1 \sim 3$ と呼称する。

これらの島畠は、いずれも周辺を溝状に掘削し、その際生じた廃土を盛り上げ、畑地として利用し、掘削して大きな溝状となった部分を水田として利用したものと思われる。

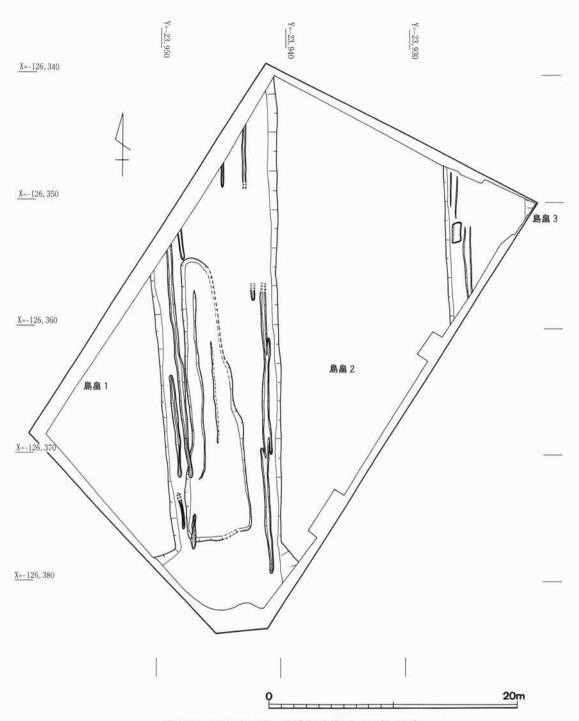
なお、調査に際し、島畠の盛土の大部分は重機によって除去したため、島畠そのものに伴う耕 作痕などは認められなかった。

島畠1と島畠2の間、溝状に掘り込まれた部分では島畠の裾に沿う形で複数の溝を検出した。 また、中央部分は全体に浅く掘り窪められており、いわゆる稲株痕跡を複数確認した。この中 央の掘り窪められた部分が水田部分であり、島畠の裾部に設けられた溝は水利に関する施設と 考える。

島畠1・2間の溝状遺構からは多数の須恵器、土師器、瓦器、黒色土器などが出土したが、周辺からの混入であろう。島畠の形成時期については遺構の切り合いや、その分布状況などから検討する必要がある。また、後述する溝SD257の状況から平安時代末まで遡る可能性を考える。

(2)中世遺構面(第2遺構面)

遺構(第45図) この時期の遺構としては、掘立柱建物跡 5 棟以上、井戸 3 基、耕作痕と思われる素掘り溝群がある。



第44図 17B地区第1遺構面遺構平面図(1/300)

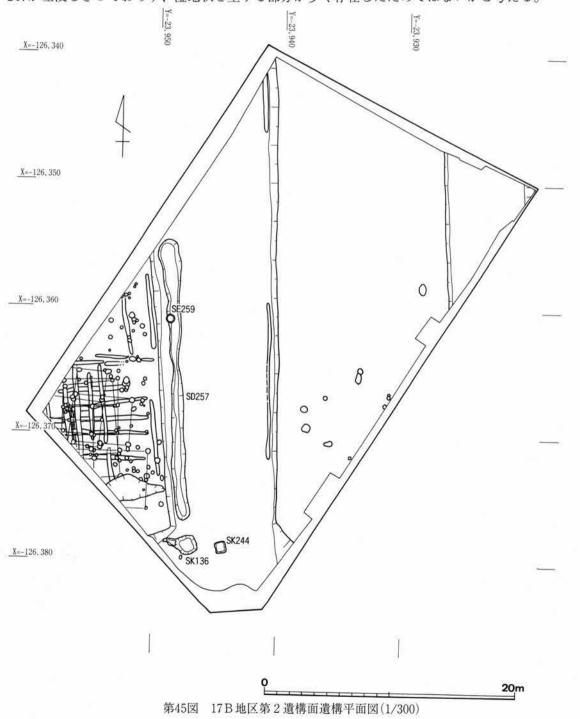
掘立柱建物跡群は総柱のものと通有のものの2種類が認められ、現状では5棟を復原している。また、素掘りの柱穴以外に、柱穴内に根石を持つものも認められた。また切り合い関係から見て下層の素掘り溝群が掘立柱建物跡群に先行することが明らかとなった。これらの掘立柱建物跡群はいずれも主軸方位をほぼ同一にすることから、近接した時期の建て替えによるものであると考える。

井戸はいずれも素掘り井戸であり、井戸枠などを持つものはない。なお、調査段階では土坑として調査を実施したため、調査時の略号SKを遺構略号として使用したものと、当初から井戸として調査し、SEの略号を付したものがある。井戸SK136は1 辺約1.5mを測る不整方形を呈し、

埋土中から青磁、白磁、瓦器、黒色土器、土師器が出土した。井戸SK244は1辺約0.9mを測る方形プランを呈し、白磁、瓦器、土師器が出土している。井戸SE259は円形プランを呈し、瓦器、土師器が出土した。この井戸SE259に切られる溝SD257はほぼ真北に方位をとり、島畠の方位と一致する。

掘立柱建物跡群に先行する素掘り溝群は南北に主軸をとるものと東西に主軸をとるものの2者が認められる。切り合いから見ておおむね東西軸のものが南北軸に先行する。

島畠2上では中世に関する遺構はほとんど確認できなかった。これは、後述する下層の溝SD 247が埋没しきっておらず、湿地状を呈する部分が多く存在したためではないかと考える。

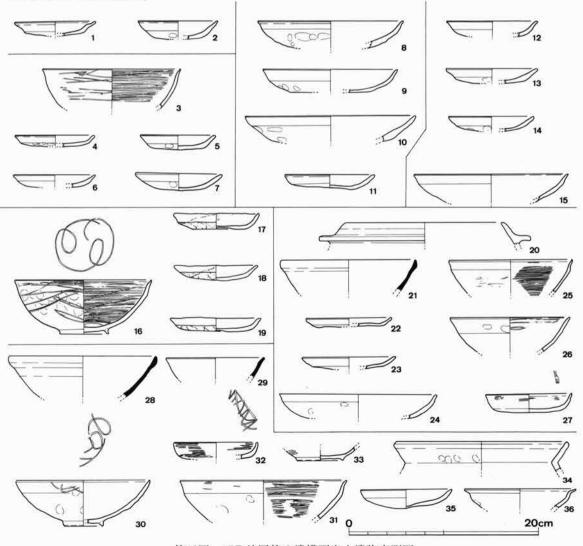


-64 -

注目されるのは、この井戸群が、いずれも島畠と島畠の間の低地部分から検出されている点である。また、島畠2上で中世に関する遺構がほとんど検出されていない点や、島畠1上で掘立柱建物跡群に先行する耕作溝と考えられる素掘り溝群を検出したこと、井戸SE259に先行する溝SD257の存在を考え併せると、島畠状の地形に区画されたのが中世段階まで遡りうる可能性を示唆していると考える。

出土遺物(第46図) 各掘立柱建物跡柱穴出土の土器、井戸出土土器のうち代表的なものを図示した。

- $1 \cdot 2$ は掘立柱建物跡 S B 01 の柱穴内から出土した土師器皿である。 1 は口縁端部をわずかにつまみ上げる。
- $3 \sim 7$ は掘立柱建物跡 S B 02の柱穴内から出土した。 3 は瓦器椀である。やや深手の作りであり口縁内面に段を有する。内外面ともヘラミガキにより調整を行う。 $4 \sim 7$ は土師器皿である。
 - 8~11は掘立柱建物跡SB03の柱穴内から出土した土師器皿である。8~10は大皿である。
- 12~15は掘立柱建物跡 S B 04の柱穴内から出土した土師器皿である。12~14は口径8.8~9.4cm、15は口径16.0cmを測る。



第46図 17B地区第2遺構面出土遺物実測図

16~19は井戸SE259から出土した。16は瓦器椀である。ほぼ完形品であり、深手の作りである。内外面ともヘラミガキにより調整し、底部内面には連結輪状暗文を施す。高台はやや貧弱であるが外方に踏ん張る輪高台を付す。また、口縁内面には段を有する。17~19は土師器皿である。いずれも一枚の粘土板を型に入れ、ユビ押さえにより調整したものと思われる。

 $20\sim27$ は井戸S K 244から出土した。20は土師質の羽釜である。内傾する短い口縁部を持ち、ほぼ水平にのびる鍔を持つ。21は白磁椀である。口縁は玉縁状を呈する。 $22\sim24$ は土師器皿である。 $22\cdot23$ は口径8.9cm、9.6cmを各々測り、24は口径16.2cmを測る。 $25\cdot26$ は瓦器椀である。25は内外面ともヘラミガキを行い、26は内面のみヘラミガキを認めることができる。27は瓦器皿である。口径9.0cm、器高2.0cmを測り内外面ともヘラミガキが観察される。

28~36は井戸SK136から出土した。28は白磁椀である。井戸SK244出土の白磁椀と同様に、鈍い玉縁状の口縁を持つ。29は青磁椀である。わずかに外反する口縁を持ち、復原口径13.4cmを測る。30・31は瓦器椀である。30は浅手のプロポーションを呈する。磨耗が著しいが、外面にヘラミガキを認めることができる。31は復原口径17.4cmを測る。口縁部はやや外反気味に仕上げられる。内面にヘラミガキを行う。32は瓦器皿である。内外面ともヘラミガキを行い。底部内面には暗文を施す。34は土師器甕である。短くほぼ一定の厚みのまま延びる口縁を持ち、口縁端部は面をなす。35・36は土師器皿である。36は口縁を水平につまみ出す。

(3)飛鳥~平安時代(第3遺構面)

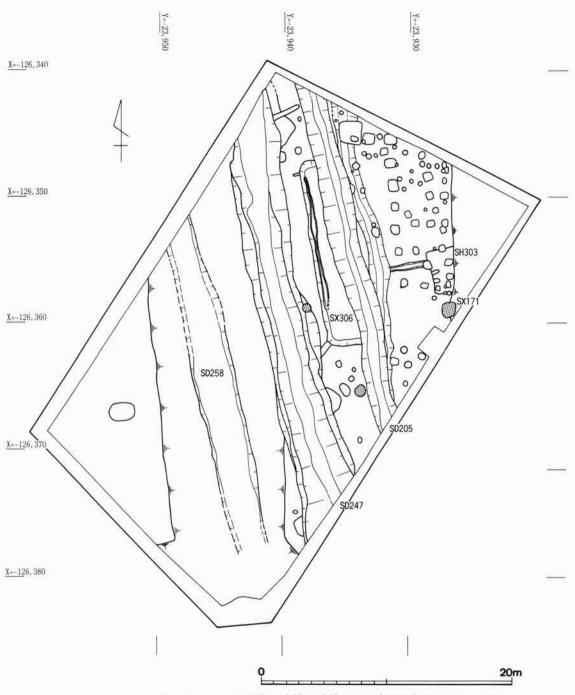
遺構(第47図) 第3遺構面で検出した遺構として、溝、掘立柱建物跡群、土坑、焼土坑、竪穴式住居跡などがある。遺構の分布状況を見ると、東側に集中して存在しており、西側はかなり希薄な状態を呈している。これは包含層の遺物にも顕著に認められ、この時期の遺構は今回の調査区の北および東側に中心があるものと考える。

溝は南北方向に主軸を持つものを4条検出した。過去の調査剝おいて道路状遺構の側溝として 認識されてきたものである。

溝SD205は幅2.5m、深さ0.7mを測る素掘り溝である。全長27.5mを検出した。埋土は砂質 土を主体とし、底部付近にわずかに還元した青灰色粘質土が堆積していた。溝の断面形はおおむ ね逆台形を呈する。第二京阪関係遺跡の溝SD97217の北延長部分に相当する。埋土中からは多 数の須恵器、土師器のほか、製塩土器、鉄滓、鉄製品、石帯、土馬などが出土した。

溝SD247は調査地の中央部で検出した最大幅約5m、深さ1.1mを測る大型の溝である。調査 地内で全長30m余りを検出した。第二京阪関係遺跡の溝SD97218の北延長部分に相当する。埋 土の状況をみるとおおむね3層に大別できる。また、両肩部付近の埋土は砂質であり、一見する と再掘削された溝のように見受けられるが、埋没後の環境の差(乾燥のしやすさなど)により土質 が変化したのではないかと寒川旭氏よりご教示をいただいた。

遺物は、最上層から瓦器を主体とする12世紀代の遺物が、底部付近の埋土から多数の須恵器、 土師器のほか、獣骨、銭貨、緑釉、灰釉、黒色土器、フイゴの羽口、木製品などが出土している。 溝SD258は島畠1・2間で検出した。幅約3mを測る。島畠の形成段階に上面が削平されて



第47図 17B地区第3遺構面遺構平面図(1/300)

おり、残存する深さは10~20cmと非常に浅く、南側部分では検出することができなかった。第二京阪関係遺跡の溝SD97219の北延長部分に相当する。埋土中からわずかではあるが須恵器、土師器が出土している。

土坑としては不整形な土坑のほか、性格不明遺構SX306がある。SX306は溝SD205の西に位置し、SD205に切られる。平面プランはほぼ長方形を呈すると考えられ、東西約3m以上、南北15mを測る。掘形底部西側には竪穴式住居跡の壁溝状の溝が部分的に認められる。床面から掘り込まれる柱穴などは存在せず、その性格については不明である。埋土からは須恵器、土師器などが出土した。

焼土坑は焼土塊、炭を埋土に含むもの、埋土のある面が被熱しているものの2タイプがある。 そのうち、焼土坑SX171からはフイゴの羽口が検出されている。過去の調査においても鍛冶炉 と考えられる焼土坑が確認されている。現在、サンプリングした土壌の選別作業中のため、明確 なことは言えないものの、包含層あるいは溝内からフイゴの羽口、鉄滓などが出土していること を考えるとこの周辺で鍛冶が行われていたと見てよいと思われる。

掘立柱建物跡は、現在、4棟以上が復原できるものと考えている。

竪穴式住居跡 S H303はこの面で確認した。東側は削平されているものの、平面隅丸方形を呈し、西辺で1辺3.5mを測る。住居西辺中央部分に作りつけ竈を持ち、石製の支脚を確認した。袖部には破砕した土師器甕を用いている。主柱穴と考えられるピットを2か所確認した。出土遺物から古墳時代後期もしくは飛鳥時代前半代のものと見られる。

出土遺物(第48・49図) 当該期に含まれる遺物は非常に多く、現在基礎的な分類作業を含め整理中であるため、ここでは溝SD205・247の遺物の一部を提示するに留めたい。

第48図は溝SD205出土遺物である。 $1\sim10$ は須恵器である。 $1\sim3$ は杯蓋である。1は口径 14.6cmを測り、内面にかえりを有する。2は口径16.0cmを測り、扁平な天井部を持ち、口縁端部は大きく屈曲する。3は口径11.4cmを測り、口縁はやや内面に垂下する。

 $4 \sim 7$ は杯身である。 $4 \cdot 5$ は高台を持つタイプである。4 は口径12.8cmを測り、高台は底部外縁に付される。5 は口径15.8cmを測り、高台は4 に比して、やや底部内側に付される。 $6 \cdot 7$ は高台を持たないタイプである。6 は口径12.7cm、7 は口径17.6cmを各々測る。

8 は皿である。口径17.7cmを測る。口縁はわずかに外方にふくらみ、口縁端部は面を形成する。 9 は鉢である。直線的な体部に厚い底部を持つ。底部外面から直径 4 ~ 5 mm前後を測る小孔を 多数穿つ。そのうち貫通するものは 8 か所である。

10は平瓶である。最大径10.3cmを測る小形品であり、把手の剝離痕が観察される。

11・12は無釉陶器椀である。11は口径15.3cmを測り、丸みを帯びたプロポーションを呈する。 12には底径12.0cmを測る削り出し高台が認められる。

13~23は土師器である。13~16は杯である。13は口径15.2cmを測るやや深手のものであり、内面に放射状暗文と螺旋状暗文を施す。14は平らな底部を有し端部をやや内湾させる。底部内面に螺旋状暗文、内側面に放射状暗文を施す。15は口径13.6cmを測る。口縁端部を内湾させる。16も15同様、口縁端部を内湾させる。口径14.0cmを測る。

17は鉢と考える。口径21.0cmを測る。口縁端部はわずかに内湾させ、外面はヘラケズリにより調整する。

18は皿である。口径21.6cmを測る。口縁端部は内湾し、底部内面に螺旋状暗文、内側面に放射 状暗文を施す。

19は椀である。口径12.6cmを測る。残存部分から高台は持たないものと判断される。口縁端部は丸く収められ、外面はヘラケズリにより調整される。

20~22は甕である。20のように口径が体部最大径より大きいものと、21・22のように口径より



第48図 S D 205出土遺物実測図

体部最大径の方が大きなものの2者が認められる。いずれも口縁端部を上方につまみ上げ、端部外側面は面をなす。体部の調整は外面をハケ調整、内面をハケもしくはケズリののちナデにより 仕上げる。なお、体部内面に須恵器甕と同じ青海波文の当て具痕を持つ個体も複数存在する。

第49図は溝SD247出土遺物である。 $1\sim11\cdot16\sim18$ は須恵器である。 $1\sim4$ は杯蓋である。 1は口径10.05cmを測り口縁内面にかえりを有する。2は口径21.0cmを測り、口縁内面にかえりを有する。3は口径19.0cmを測り、傘形の天井部を有し口縁端面を下方に屈曲させる。4は口径16.1cmを測る。扁平な天井部を持ち、口縁端部は大きく屈曲する。

 $5\sim 9$ は杯身である。5 はやや丸みを帯びたプロポーションを呈し、口径12.1cmを測る。6 は高台を有する深手の杯身である。口径11.2cmを測る。7 は高台を持たないタイプの杯身である。口径12.75cmを測る。 $8\cdot 9$ は高台を持つ杯身である。8 は口径13.5cmを測る。底部外面に墨書で「井」を記す。9 は口径16.2cmを測り、底部外面に墨書を記す。 $10\cdot 11$ は皿である。両者とも端部は面をなす。10は口径15.7cm、11は口径14.2cmを各々測る。16は小形の壺である。底径3.75cmを測り、底部外面に糸切り痕が観察される。17は短脚の高杯脚部である。底径9.7cmを測る。

12・13は緑釉椀である。12は口径9.85cm、13は口径8.25cmを測る小形品である。両者とも削り出しの平高台を持ち、底部外面に糸切り痕が認められる。色調は12が淡黄褐色、13は淡緑灰色を呈する。

14は灰釉椀である。内面にのみ釉が認められる。内湾するやや高めの高台を持ち、底部外面に 墨書により「天」を記す。底径8.55cmを測る。

18は甕である。大きく肩の張るプロポーションを呈し、口縁端部は内面に肥厚する。外面はタタキののちカキメにより調整される。

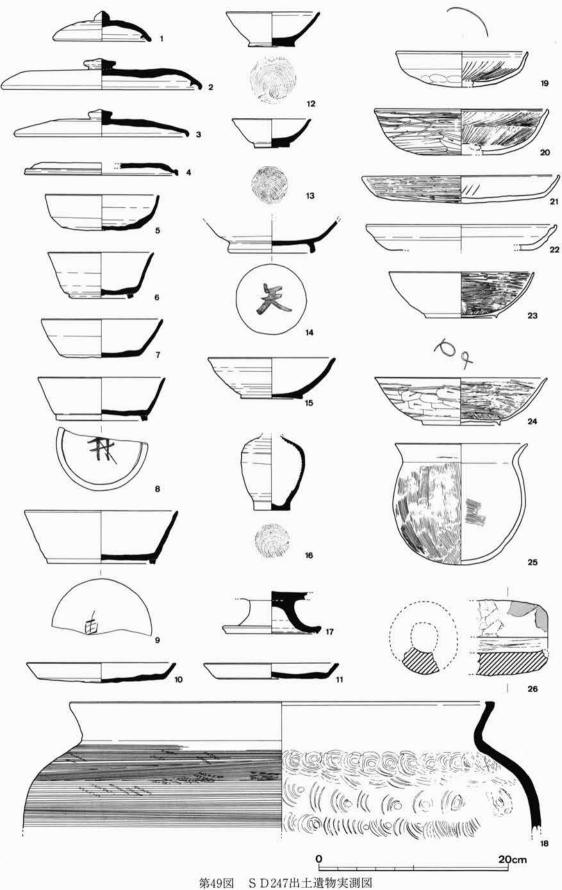
19~22・25は土師器である。19・20は杯である。19は口径13.9cmを測る。口縁端部をわずかに 内湾させる。内面に暗文を有する。20は口径18.2cmを測る。口縁端部を内湾させる。外面はヘラ ケズリの後、ヘラミガキにより調整する。内面に暗文を持つ。21・22は皿である。21は口径 20.8cmを測る。外面はヘラミガキにより調整され、内面に暗文を持つ。22は口径19.9cmを測る。 口縁端部を大きく内湾させる。25は甕である。口径14.0cmを測る小形品である。球形の胴部から 大きく開く口縁を持つ。口縁端部は丸く仕上げられ面を構成しない。調整は外面が縦方向のハケ メ、内面は磨耗が著しいが、わずかに横方向のハケメを観察することができる。

23・24は黒色土器椀である。23は口径15.3cmを測り、内面はヘラミガキにより調整される。高台は貼り付けの輪高台であり、断面三角形を呈する。24は口径18.3cmを測る。内面はヘラミガキ、外面はヘラケズリの後、粗いヘラミガキにより調整される。内面に暗文を有する。

26はフイゴの羽口の先端部分である。復原径約8cm、復原孔径約3cmを測る。先端部分外面はガラス化している。

(4)弥生~古墳時代(第4遺構面)

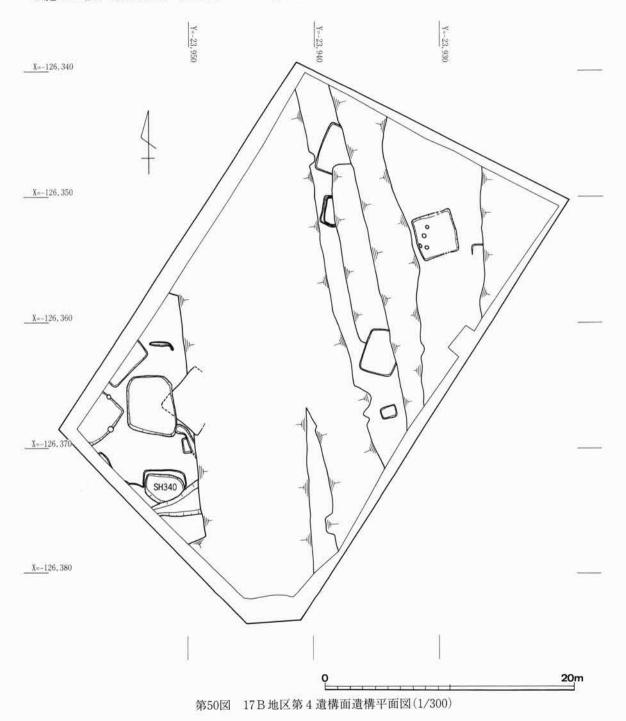
遺構(第50図) 弥生時代から古墳時代に属する遺構として、竪穴式住居跡と考えられるもの、



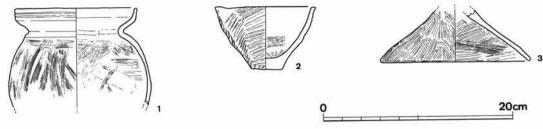
溝、土坑などを検出した。ただし、竪穴式住居跡と考えたものでも、主柱穴や周壁溝が確認されなかったり、炉跡や焼土などの生活面が認められないものが大部分であるため、本稿では竪穴状遺構として報告し、今後検討を加えたい。

竪穴状遺構は総数9基を確認した。大部分のものは方形もしくは不整方形を呈する掘形を持つ。 埋土中からは弥生時代から古墳時代前期の土器が出土した。

出土遺物(第51図) 竪穴状遺構 S H 340出土遺物の一部を図示した。1 は甕である。球形に近い体部と複合口縁を持ち、口縁外側面には2条の擬凹線を施す。調整は体部外面が縦方向のハケを施した後、頸部付近に横方向のハケを行う。内面はケズリの後、斜め方向にハケを施している。



-72-



第51図 S H340出土遺物実測図

2は鉢である。外面は右上がりのタタキ、内面はハケの後、ナデにより調整される。3は高杯の 脚部である。外面は縦方向のヘラミガキを行い、端部付近のみ横方向のヘラミガキを行う。内面 にはハケを施す。

6. まとめ

今回の調査により得られた成果、問題点を記述し、今後の検討課題としたい。

内里八丁遺跡では、これまでも多数の島畠が確認されてきた。島畠の造成時期は、鎌倉時代以降のものとこれまで捉えられてきた。しかし、今回の調査によって12世紀後半代までその時期が遡る可能性が考えられるようになり、これまでの成果を含め再検討する必要が生じた。

また、12世紀後半代の集落のあり方についても新たな成果を得ることができた。これまで、この時期の建物群は遺跡の範囲内にいくつかのグループを形成して存在しており、17B地区西半で確認された建物群は新たに検出されたグループとみられ、当時の景観を復原する上で欠かせない存在である。また17A地区の成果から、同時期に周辺部まで耕作地としての土地利用が行われていたものと考えることができた。

飛鳥~平安時代ではこれまで道路状遺構として報告されていた側溝に相当する溝を確認することができた。出土遺物自体の様相からみると、この2つの溝は明らかな前後関係を持つものではなく同時期に存在していた可能性がある。とすると、これまで道路状遺構の側溝と認識されていたこれらの溝の性格そのものを再検討する必要がある。この点については今後、出土遺物や遺物の出土状況を検討し、詳細を明らかにしていきたい。

また、出土遺物には多数の瓦のほか、墨書土器、鍛冶関連遺物、銭貨、製塩土器、土馬、ミニチュア竈など一般集落で見られない遺物が多数存在する。これまでの指摘通り公的性格を持つ遺構群が近隣に存在する可能性は高いと考える。

弥生時代から古墳時代では竪穴状遺構の存在から、当該期の集落はさらに周辺へ拡大することが明らかとなった。墓域や集落中心部分の確認をふくめ、今後の調査に期待される所である。

(石尾政信・石崎善久)

付表6 内里八丁遺跡調査次数一覧表

次数	調査年度	調査地	調査主体	調査原因	文献
1	昭和63	試掘(今福・内垣内)	京都府埋文センター	第二京阪自動車道	京都府遺跡調查報告書26
2	平成元	試掘(八丁・中島・ 日向堂)	京都府埋文センター	第二京阪自動車道	京都府遺跡調査報告書26
3	平成2	第二京阪A地区	京都府埋文センター	第二京阪自動車道	京都府遺跡調査報告書26
4	平成3	第二京阪A地区	京都府埋文センター	第二京阪自動車道	京都府遺跡調査報告書26
5	平成3	試掘	八幡市教育委員会	上津屋土地区画整理事業	八幡市埋蔵文化財発掘調査概報13
6	平成4	試掘	八幡市教育委員会	上津屋土地区画整理事業	八幡市埋蔵文化財発掘調査概報13
7	平成4	第二京阪A・B地区	京都府埋文センター	第二京阪自動車道	京都府遺跡調查報告書26
8	平成5	第二京阪B地区	京都府埋文センター	第二京阪自動車道	京都府遺跡調查報告書30
9	平成6	第二京阪 D 地区	京都府埋文センター	第二京阪自動車道	京都府遺跡調查報告書30
10	平成7	第二京阪D地区	京都府埋文センター	第二京阪自動車道	京都府遺跡調查報告書30
11	平成7	第二京阪G地区	京都府埋文センター	第二京阪自動車道	京都府遺跡調查報告書30
12	平成8	第二京阪G地区	京都文化博物館	第二京阪自動車道	京都文化博物館調査研究報告13
13	平成8	第二京阪C・F地区	京都文化博物館	第二京阪自動車道	京都文化博物館調査研究報告13
14	平成9	第二京阪E・F地区	京都府埋文センター	第二京阪自動車道	京都府遺跡調查報告書30
15	平成10	第二京阪E地区	京都府埋文センター	第二京阪自動車道	京都府遺跡調查報告書30
16	平成12	府道A・B地区	京都府埋文センター	府道	本概要報告
17	平成13	府道A·B地区	京都府埋文センター	府道	本概要報告

注1 調査参加者は以下のとおりである。

調査補助員 青木政幸・藤木旬子・元木和歌子・村上計太・山内彩子・大月直子・岩本佳之、整理 員:丸谷はま子・山本弥生・兵頭真千・永田啓子・神谷昭子・西脇夏海・木村悟 なお、調査に際しては以下の個人、諸機関からご協力、ご教示を得ることができた。 京都府教育委員会・八幡市教育委員会・日本道路公団・木下良・木元雅康・高橋誠二・櫛木謙周・ 菱田哲郎・八十島豊成・大道真白・寒川旭・磯野浩光・森下衛・森正・奈良康正・上田真一郎 注2 昨年度までの遺構番号については、森下衛『内里八丁遺跡』 II(『京都府遺蹟調査報告』第30冊

注 2 昨年度までの遺構番号については、森下衛『内里八丁遺跡』 Ⅱ(『京都府遺蹟調査報告』第30冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001 第22・23図の遺構番号に依ることとした。

4. 兰山木遺跡第4次発掘調査概要

1. はじめに

調査地は、京田辺市三山木に所在する。今回の調査は、三山木地区特定土地区画整理事業に伴うもので、京田辺市の依頼を受けて実施した。平成9年度に京田辺市教育委員会が事業施行地内を対象に試掘調査を実施し、遺跡の範囲確認などを行った。その結果、三山木山崎から北東方に延びる丘陵先端の微高地を「三山木遺跡」とし、弥生時代から鎌倉時代にかけての集落遺跡と考えられている。これまで、この遺跡内で3回にわたって調査が行われ、弥生時代前期以降の多くの遺構が検出されている。また、縄文時代晩期の土器なども出土している。調査地付近には、平城京と山陽・山陰を結ぶ官道が敷設され、その中継地のひとつである「山本駅」が三山木山本の地に設置されたと想定されている。

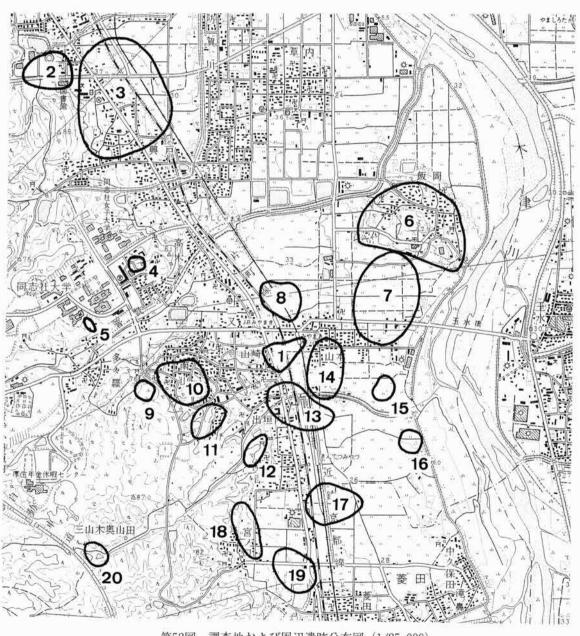
今回の調査地は、JR学研都市線と近畿日本鉄道京都線の間に位置しており、それぞれの三山木駅に間近の地点である。三山木遺跡の範囲内の北東側にあたる。今回は、3か所のトレンチを設定して調査を行った。調査は、平成13年5月21日から開始した。各トレンチとも、重機で近年の盛土や旧耕作土などを除去し、その後、人手により精査・遺構掘削・記録作業を行った。調査面積は約1,300㎡である。なお、2トレンチは調査中に下層遺構面を確認したので、上層遺構面の調査後、再度重機掘削を行った。また、3トレンチは危険なため調査中に埋め戻したが、その際、トレンチ南西隅を重機で断ち割り、古墳時代前期の川の幅を確認した。調査終了は10月26日である。この間、10月18日に現地説明会を実施した。また、10月23日には京田辺市立三山木小学校6年生児童有志による校外活動の一環としての遺跡見学があった。なお、調査に係る経費は、

刊衣 /	二山不退砂祠宜	見衣
- 1		

遺跡名	次数	調査期間	調査面積	調査主体	調査担当	時代	検出遺構
三山木遺跡	第1次	平成10年11月9日 ~ 平成11年2月5日	約300m²	京田辺市教育委員会	鷹野一太郎 五百磐顕一	縄文晩期 ~ 鎌倉時代	溝・柱穴
三山木遺跡	第2次	平成11年5月17日 ~ 平成11年10月28日	約1,800m²	(財)京都府埋蔵 文化財調査研究 センター	岡崎研一田代 弘	弥生前期 ~ 鎌倉時代	土坑・溝・ 掘立柱建物 ・井戸
三山木遺跡	第3次	平成12年5月15日 ~ 平成12年9月28日	約1,400㎡	(財)京都府埋蔵 文化財調査研究 センター	岡﨑研一	平安	掘立柱建物 溝・土坑
三山木遺跡	第4次	平成13年5月21日 ~ 平成13年10月26日	約1,300㎡	(財)京都府埋蔵 文化財調査研究 センター		弥生時代 ~ 江戸時代	土坑·溝· 掘立柱建物 ·池·井戸

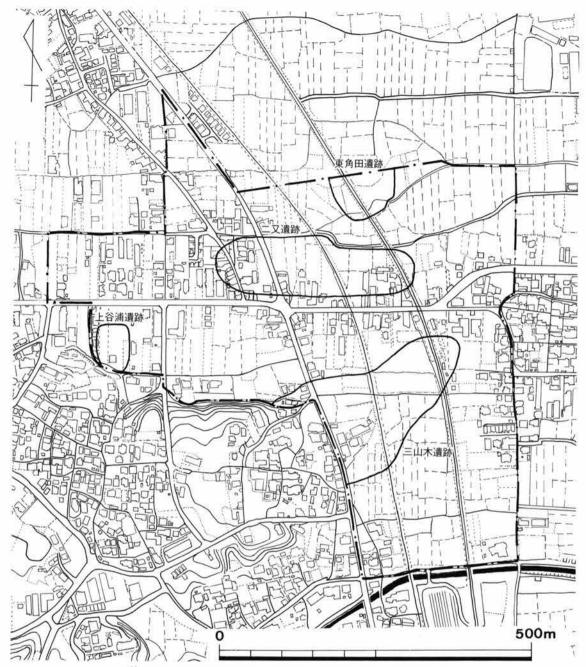
京田辺市が全額負担した。

調査を担当したのは、当調査研究センター調査第2課調査第2係長伊野近富、同主任調査員引 原茂治、同主査調査員岡崎研一である。調査を実施するにあたり、京田辺市建設部三山木地区区 画整理室、京田辺市教育委員会、京都府教育委員会などからご協力いただいた。調査においては、 猛暑の時期にもかかわらず地元有志の方々、各大学生の方々などに参加していただいた。感謝し たい。特に、京田辺市教育委員会の鷹野一太郎氏からは格別のご協力、ご教示をいただいた。特 記して謝意を表したい。



第52図 調査地および周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- 1.三山木遺跡(調査地) 2.田辺遺跡 3.興戸遺跡 4. 天神山遺跡 5. 新宗谷遺跡 6. 飯岡遺跡 8.田中(二又)遺跡 9.口駒ヶ谷遺跡 10.南山遺跡 11.西羅遺跡 7. 古屋敷遺跡 12. 三山木廃寺
- 13. 宮ノ下遺跡 14. 直田遺跡 15. 遠藤遺跡 16. 下川原遺跡 17. 桑町遺跡 18. 屋敷田遺跡



第53図 区画整理区域内の遺跡分布図(破線は区画整理範囲)

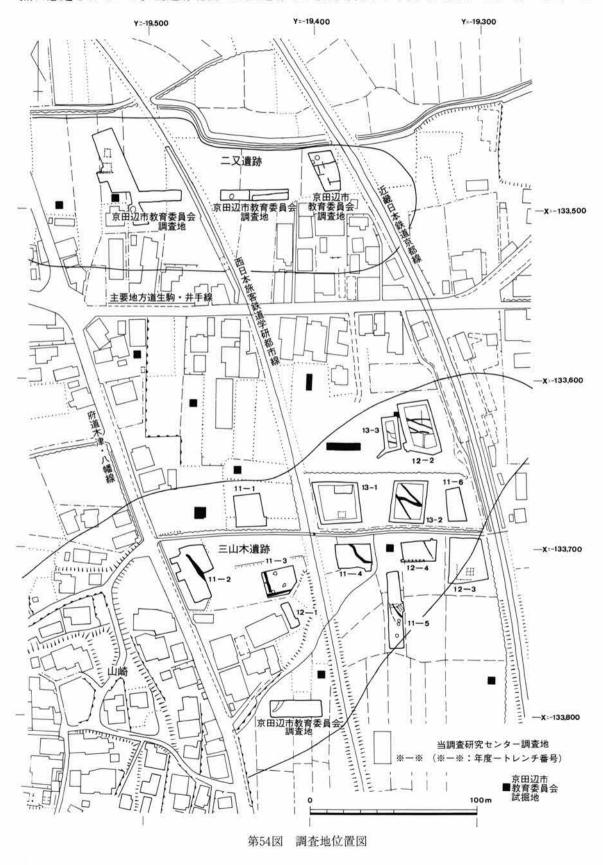
2. 位置と環境

京田辺市は、京都府南部の南山城地域ほぼ中央に位置し、この地域を南北に貫流する木津川の西岸に所在する。同市の西部は生駒山系に連なる丘陵地帯で、この丘陵から木津川に流れる小河川の多くは平野部で天井川化しており、独特の景観を呈している。三山木遺跡は同市南部に位置しており、丘陵先端から北東側に延びる微高地上に想定されている。

周辺の歴史環境をみると、付近の山崎神社には縄文時代の石棒、石冠が伝わっている。弥生時代の遺跡としては、宮ノ下遺跡や宮ノ口遺跡が前期の遺跡として知られている。古墳時代の遺跡としては、当遺跡北東側の飯岡丘陵に前方後円墳の飯岡車塚古墳を含む飯岡古墳群がある。この古墳群では横穴も確認されている。このほか、山崎古墳群、宮ノ口古墳群などの後期古墳がある。

古代の遺跡としては、奈良時代前期に創建されたとみられる三山木廃寺跡がある。また、奈良

時代には平城京を起点とする山陽道が官道として敷設され、『続日本紀』和銅4 (711)年の条によると、綴喜郡に山本駅が設けられている。当遺跡東側に隣接する三山木山本の集落がその設置地点に想定されている。当遺跡北側の二又遺跡では飛鳥時代から平安時代後期の井戸跡や塀跡が墨



書土器を伴って確認されており、特に平安時代前期の建物跡、井戸跡は山本駅の機能を引き継いだ施設の一部と、調査を担当した京田辺市教育委員会は推定している。当遺跡の西側約2kmには、奈良時代の木心乾漆造十一面観音立像を本尊とする観音寺がある。塔跡なども残り奈良時代前期から平安時代にかけての瓦などが散布している。宮ノ下遺跡からは、弥生時代の遺構のほかに奈良時代の掘立柱建物跡や円面硯が出土し、官衙的性格が考えられている。

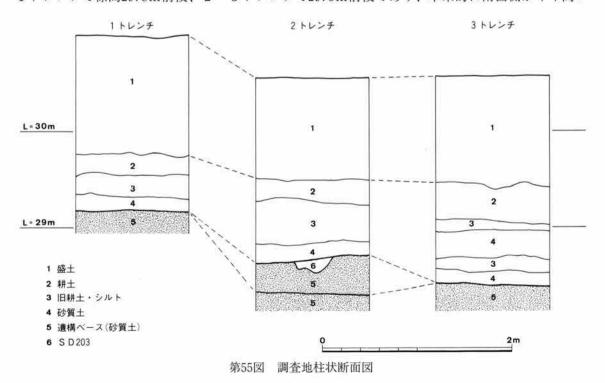
中世の遺跡としては、宮ノ口遺跡から鎌倉時代後期の建物跡群や池、井戸跡が検出されている。 近世のものとしては、当遺跡南側、近畿日本鉄道宮津車庫の東側に庚申塚がある。

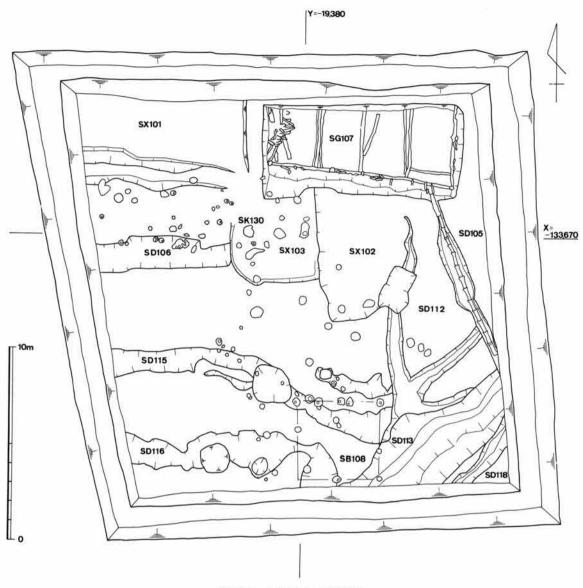
3. 調査概要

今回は、3か所のトレンチを設定して調査を行った。1トレンチは、JR学研都市線の東側に設定した。このトレンチでは、弥生時代から近世までの遺構を検出した。2トレンチは工事用道路を挟んで1トレンチの東側に位置する。このトレンチでは、上下2層の遺構面を確認した。上層では、飛鳥時代から平安時代頃にかけての溝、土坑、柱穴などを検出した。下層では、弥生時代の溝、川などを検出した。3トレンチは2トレンチの北側に位置する。このトレンチでは、中世の柱穴、溝などを検出した。柱穴は、建物としてはまとまらない。また、トレンチ南側から古墳時代前期の川跡を検出した。以下、主な遺構について概要を記す。

(1)基本層序

今回設定した各トレンチの現地表面の標高は、1トレンチが31.0m、2・3トレンチが30.6mで、南西側に位置する1トレンチがわずかに高くなる。各トレンチとも近年の盛土がなされており、その厚さは1.0~1.3mにおよぶ。盛土下は、各トレンチとも耕土層である。耕土層の上面は、1トレンチで標高29.8m前後、2・3トレンチで29.5m前後であり、本来的に南西側がやや高い





第56図 1トレンチ平面図

地形である。

耕土下は、洪水などの堆積とみられる砂質土層や旧耕土層となり、1トレンチでは標高29.2m 前後で遺構面にいたる。ベースは青灰色砂質土である。2トレンチでは標高28.7m前後で上層の 遺構面にいたる。ベースは灰青色砂質土である。この層は30~40cmの厚さがあり、その下に下層 の遺構面がある。ベースは淡青灰緑色砂質土である。3トレンチでは標高28.5m前後で遺構面に いたる。なお、このトレンチでは南半部が古墳時代前期の川跡で約1.2m落ち込んでおり、その 埋土上が上層遺構面になる。

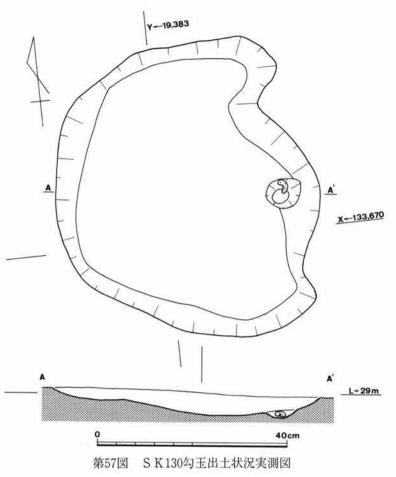
(2) 1 トレンチ

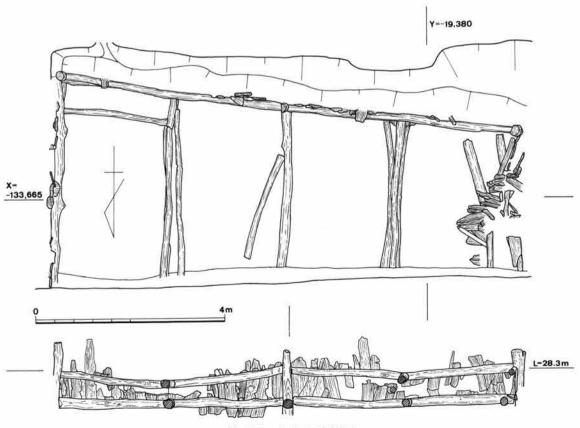
溝SD118 トレンチ南東隅で検出した。北東から南西方向に延びており、幅は約 $0.6\sim1.0$ mを測る。弥生時代後期の土器が出土した。

溝SD113 溝SD118西側に並行して延びる。幅は約4.6mで、弥生時代の土器が出土した。 土坑SK130 調査地北半部中央付近で検出した。径約60cmの不整形土坑である。中近世の耕 作で削り取られた部分にあり、 深さは約4cmしか残存していない。この中から、翡翠製の勾玉 1点が出土した。

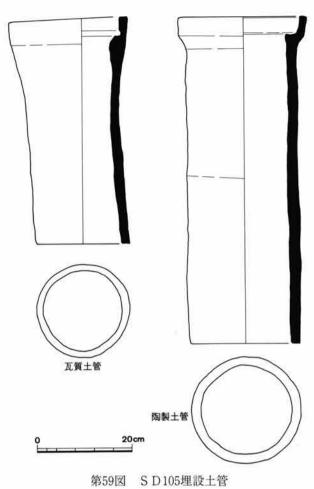
掘立柱建物跡 S B 108 トレンチ南側で検出した。柱穴の残りが浅く、確認できなかった部分もあるが、ほぼ 2 間×3間の南北棟の建物と考えられる。建物の規模は東西約4.5m、南北約4.0mを測るが、南側調査地外に延びる可能性もある。時期は不明であるが、建物の軸線がほぼ南北方向であり、これまで確認されている建物の状況から、10世紀頃のものと考えられる。

池SG107 北東側で検出し





第58図 SG107実測図



た。東西約10m、南北約5mの長方形の池 と考えられる。深さは約1.8mとみられる。 地面を掘り込み、その中に枘を切った丸太 を組み合わせて枠組みし、その外側に板を あてて作られている。また、南北方向に丸 太の梁を入れて補強する。主に18世紀後半 から19世紀にかけての陶磁器が出土してお り、その時期頃までは存在した池と考えら れる。

溝SD105 池SG107の南東隅部から南東方向に延びる暗渠である。池SG107に接する部分には木樋、それに続いて瓦質土管、さらに信楽製とみられる陶製土管が埋設されている。土管の接続状況から見て、池SG107からあふれそうになった水を排水するためのものと考えられる。管の違いから、2回程度の改修が行われたとも考えられる。

(3) 2 トレンチ

川NR220 トレンチ南側にあり、ほぼ東

西方向に延びる。幅は約4~5mを測る。弥生時代の川と考えられる。

溝SD225 トレンチ西側をほぼ南北方向に延びる。幅は約 $2 \sim 3$ mを測る。弥生時代前期の 土器が出土した。

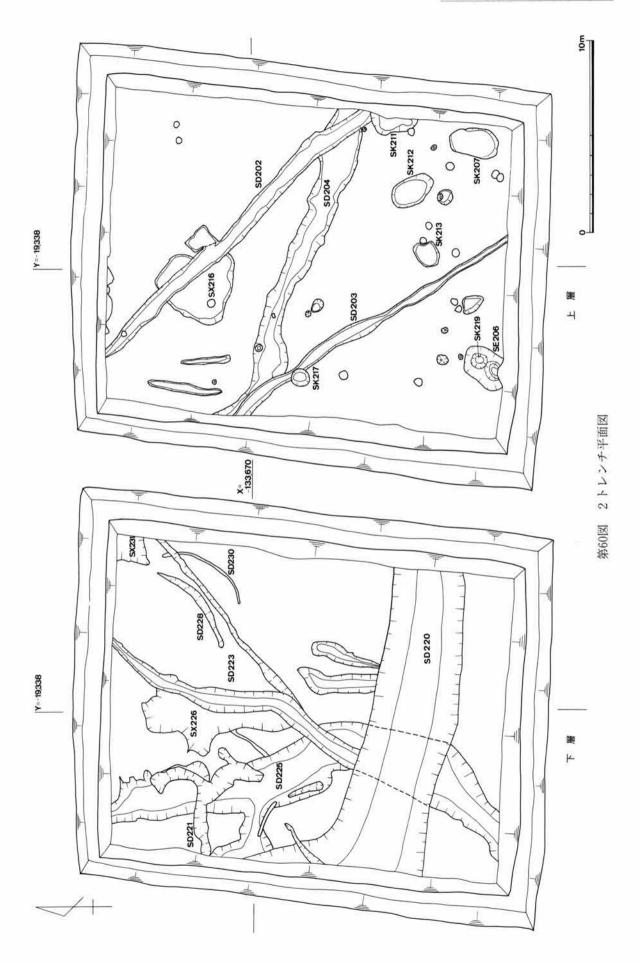
溝SD204 トレンチ中央をほぼ東西方向に横切る。幅は、0.9~2.0mを測る。7世紀頃の須恵器などが出土した。飛鳥時代頃の溝と考えられる。

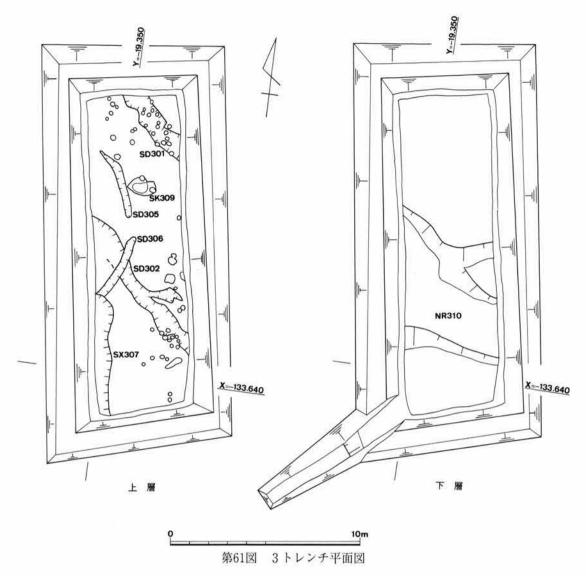
溝SD202・203 北西から南東方向に延びる。溝SD202は幅約1 m、溝SD203は幅 $0.2\sim0.5$ mを測る。8世紀後半頃の須恵器などが出土した。奈良時代頃の溝と考えられる。なお、この時期には、官道の方向である南北方向からやや西側に傾いた地割りがあったという説があり、この溝もその地割りに伴うものとも考えられる。

井戸S E 206 トレンチ南西隅で検出した。上面は 2.8×1.8 mの楕円形であるが、南側が径約 1mの円形に深く掘り込まれている。深さは、約1mを測る。須恵器壺、円面硯や斎串などが出土した。

(4) 3 トレンチ

川NR310 北西から南東方向に延びるものと考えられる。川幅は、ほぼ11mとみられる。古墳時代前期の土器が出土した。その他の時期の遺物の出土はわずかであるため、この川は、ほぼ古墳時代前期に流れており、その時期の内に埋まったものと考えられる。





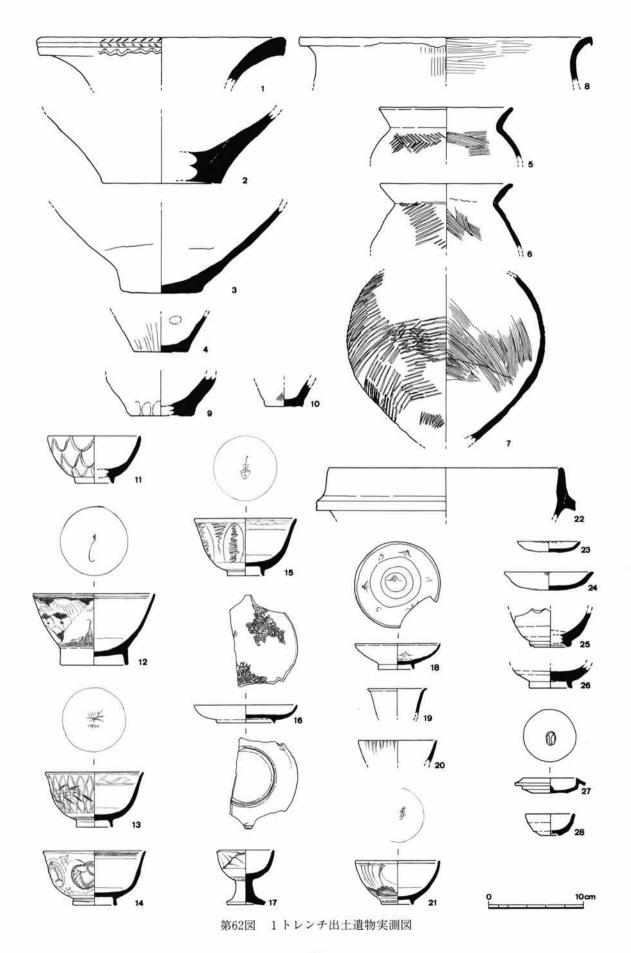
4. 出土遺物

今回の調査では、縄文時代晩期から近世にかけての遺物が出土した。1トレンチでは弥生土器と近世陶磁器が中心である。2トレンチでは弥生土器と7・8世紀頃の土器が主になる。3トレンチでは古墳時代前期の土師器が主な出土遺物である。縄文時代晩期の土器片も出土しているが、小片であり、今回は図化していない。なお、今回は古墳時代中・後期の土器がほとんど出土していない。また、中世の土器についても、3トレンチからわずかに小片が出土したのみで、図化できるものではない。

1・2トレンチからは、石器・剝片が多数出土した。また、1トレンチから、翡翠製の勾玉が 出土したのが注目される。木製品としては、2トレンチ出土の斎串がある。

(1) 1 トレンチ出土遺物

弥生土器(1)は、壺の口縁部とみられ、口縁端部下端は刻み目を施し、上半はヘラ描きの沈線をめぐらして羽状文施す。口径は25.6cmを測る。弥生土器(2)は壺底部とみられ、胎土は暗茶褐色を呈する。底部は内面から粘土を充填している。低部径12.6cmを測る。弥生土器(3)も、壺底



-85-

部とみられる。底部径8.5cmを測る。弥生土器(4)は、甕底部とみられ、外面にハケメ調整がみられる。底部径5.6cmを測る。以上4点は溝SD113出土である。

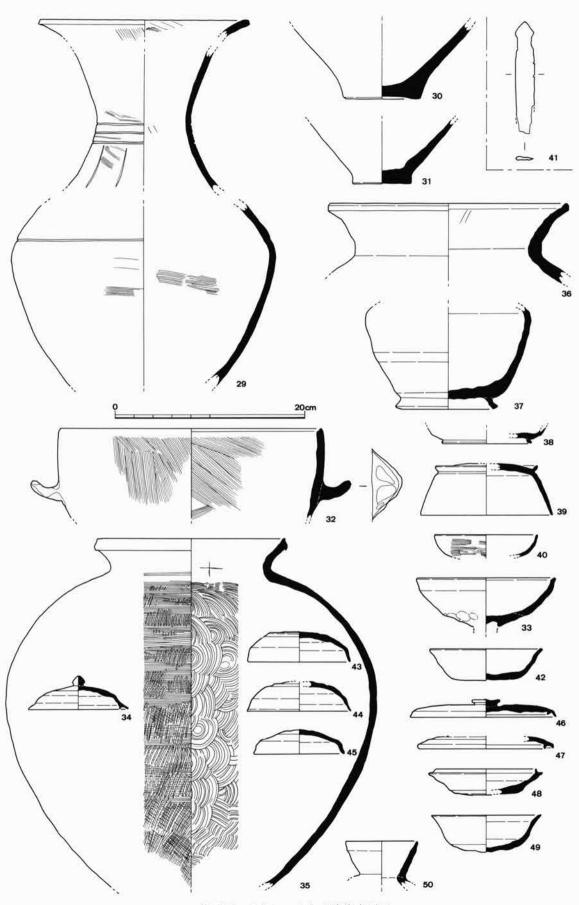
弥生土器甕(5)は、口縁部が「く」字状に屈曲し、体部外面にタタキ目がみられる。口径 14.0cmを測る。弥生土器甕(6)も、口縁部が「く」字状に屈曲し、体部外面にタタキ目が残る。口径14.0cmを測る。弥生土器甕(7)は、体部外面にタタキ目、内面にハケメ調整がみられる。最大胴径21.0cmを測る。以上3点は溝SD118出土である。

弥生土器甕(8)は、外面にタテハケ調整、口縁部内面にヨコハケ調整がみられる。口縁端部を わずかに垂下させる。口径31.0cmを測る。溝SD116出土である。弥生土器底部(9)は下部に指頭 圧痕が残る。底部径6.4cmを測る。溝SD112出土である。弥生土器底部(10)は、外面ハケメ調整 である。底部径4.0cmを測る。包含層出土である。

碗(11)は、肥前系染付磁器で、外面に2本引きの網目文を描く。口径9.8cm、器高5.0cm、高台径4.1cmを測る。碗(12)は、肥前系染付磁器で、いわゆる広東碗である。外面に網干文、見込みに壽字文を描く。口径12.8cm、器高7.6cm、高台径6.7cmを測る。碗(13)は、肥前系染付磁器で、いわゆる端反碗である。外面には立湧の地文の上に笹文を、内面口縁部に四方襷文を、見込みには笹文を描く。口径10.5cm、器高5.8cm、高台径4.0cmを測る。碗(14)は、肥前系染付磁器で、端反碗である。外面に葵文とみられる紋様を描く。口径10.8cm、器高5.9cm、高台径4.8cmを測る。碗(15)は、肥前系染付磁器で、端反碗である。外面に葵文とみられる紋様を描く。口径10.8cm、器高5.9cm、高台径4.8cmを測る。碗(15)は、肥前系染付磁器で、端反碗である。外面には立湧文を、口縁部内面に連弧状文を、見込みに壽字文を描く。口径10.8cm、器高6.0cm、高台径3.9cmを測る。皿(16)は、肥前系染付磁器で、内面に草花文をいわゆるコンニャク印判で施し、外面には折松葉文を描く。口径11.0cm、器高1.9cm、高台径6.2cmを測る。ほぼ同様の施文の皿が元禄7(1694)年および元禄9(1696)年と箱書きされた箱とともに伝世している。皿(18)は、肥前系染付磁器で、内面に簡略化された松および帆とみられる文様を描く。見込みは蛇の目状に釉を掻き取っている。口径9.0cm、器高2.8cm、高台径3.6cmを測る。仏飯器(17)は、肥前系染付磁器で、外面に半截花文を交互に描く。口径6.0cm、器高6.0cm、脚径3.9cmを測る。碗(26)は、肥前系陶器とみられ、内外面ともに灰釉系の釉を施す。高台径4.5cmを測る。以上9点は、池SG107出土である。

碗(19)は、口縁部が外反する小碗で、中国製の青花磁器とみられる。口径6.2cmを測る。碗(20)は、肥前系染付磁器で、口縁部外面に雨降文を描く。口径8.4cmを測る。あるいは、仏飯器とも考えられる。碗(21)は、肥前系染付磁器で、外面に半截花文など、見込みに壽字文を描く。口径8.8cm、器高4.7cm、高台径3.3cmを測る。碗(25)は、肥前系陶器で、内面および外面上半に藁灰釉を施す。高台径4.2cmを測る。土師器羽釜(22)は、口径25.0cmを測る。土師器皿(22)は、口径6.8cm、器高1.2cmを測り、23は、口径9.6cm、器高2.0cmを測る。いずれも口縁端部に煤が付着する。陶器蓋(27)は、京焼系陶器で、上面に鉄釉を施す。急須などの蓋か。口径7.6cm、器高1.6cmを測る。以上8点は、SX101出土である。

小碗(28)は、美濃系陶器で、いわゆる志野である。口径5.2cm、器高2.2cm、底径1.8cmを測る。 S X 102出土である。



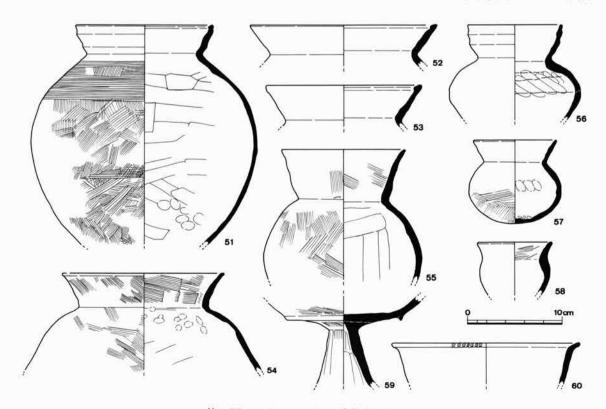
第63図 2トレンチ出土遺物実測図

(2) 2 トレンチ出土遺物

弥生土器壺(29)は、頸部に3条のヘラ描き沈線をめぐらせ、胴部にも1条の沈線をめぐらせる。また、頸部から肩部にかけて縦方向のヘラ描き沈線を施す。口径22.0cm、最大胴径28.0cmを測る大形の壺である。溝SD225から出土した。弥生土器(31)は、壺底部とみられ、底径6.0cmを測る。川NR220埋土から出土した。弥生土器(30)は、壺底部とみられ、底径8.0cmを測る。下層遺構面上の包含層から出土した。

土師器甑(32)は、内外面ともにハケメ調整で、三角形状の薄手の把手が付く。口径27.4cmを測る。土師器高杯(33)は、杯部が内湾気味に立ち上がるもので、口径14.6cmを測る。須恵器蓋(34)は、宝珠つまみ付きで、内面口縁部に返りをもつ。口径10.6cm、器高3.6cmを測る。須恵器甕(35)は、口径20.0cm、最大胴径39.1cmを測り、内面頸部に十字の窯印がある。以上4点は、溝SD204出土である。

須恵器甕(36)は、口縁部内面に縦方向の沈線2条の窯印をもつ。口径25.0cmを測る。須恵器壺(37)は、「ハ」字状に開く貼り付け高台をもつ。長頸壺とみられる。高台径9.6cmを測る。須恵器杯(38)は、貼り付け高台付きで、高台径9.4cmを測る。須恵器円面硯(39)は、高台付き杯を逆転した形状を呈する。陸部が周縁部よりも盛り上がっており、墨痕が付着することから、円面硯と判断した。周縁部も、杯の高台のように四角形のものではなく、先端部を丸くおさめる細身のものである。陸部中央付近もわずかに磨滅する。周縁部径10.4cm、器高5.1cm、底径14.0cmを測る。土師器杯(40)は、外面へラミガキ調整である。口径11.0cmを測る。斎串(41)は、上端部を三角形状に尖らせ、その下部両側をわずかに丸く抉る。下端部は失われている。残存長12.8cm、幅



第64図 3トレンチ出土遺物実測図

2.0cm、厚さ0.3cmを測る。以上6点は、井戸SE206出土である。須恵器杯(42)は、底部から口縁部が屈曲して斜め上方に直線的に立ち上がるもので、口径12.0cm、器高3.3cmを測る。溝SD202出土である。

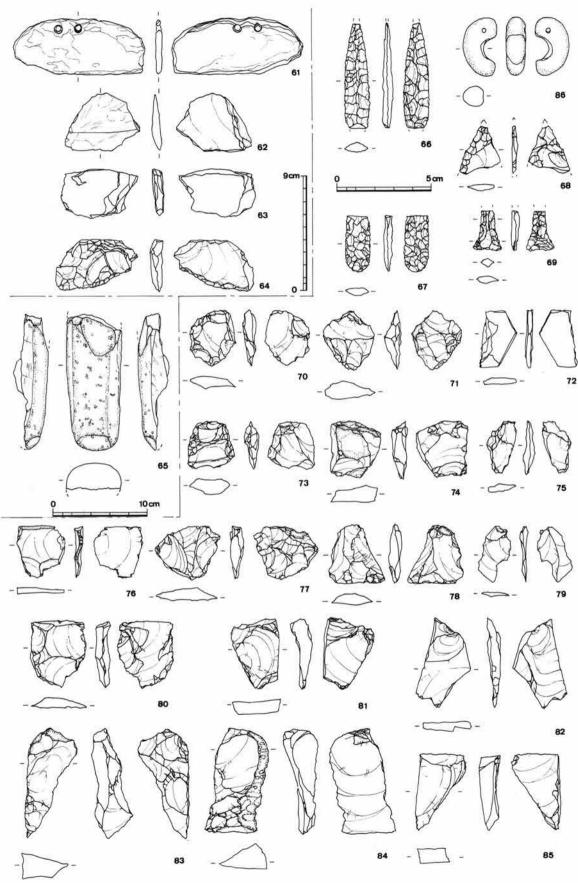
須恵器杯蓋(43~45)は、天井部が丸味をもち、小形のものである。43は口径10.7cm、器高3.2cm、44は口径11.0cm、器高3.1cm、45は口径9.6cm、器高2.6cmを測る。須恵器蓋(46)は、扁平な宝珠つまみ付きで、内面口縁部に返りをもつ。口径15.6cm、器高1.9cmを測る。須恵器蓋(47)は、内面口縁部に返りをもつ。口径14.5cmを測る。須恵器杯身(48)は、低い立ち上がりをもち、小形のものである。口径10.8cm、器高2.7cmを測る。須恵器杯(49)は、口縁部が外反気味である。あるいは壺蓋か。口径11.6cm、器高4.0cmを測る。須恵器(50)は、平瓶の口縁部か。口径7.6cmを測る。以上8点は、上層遺構面に伴う包含層出土である。

(3) 3 トレンチ出土遺物

土師器甕(51)は、口縁端部を内側に折り返して肥厚させ、体部は丸味をもつ。体部外面はハケメ調整、内面は頸部付近までヘラ削りである。口径14.4cm、最大胴径23.8cmを測る。土師器甕(52・53)は、口縁端部を内側に折り返して肥厚させるもので、52は口径19.8cm、53は、口径16.6cmを測る。土師器甕(54)は、口縁部が「く」字状に屈曲して外反気味に立ち上がる。外面ハケメ調整、内面は口縁部横方向のハケメ調整、体部はヘラ削りである。口径17.1cmを測る。土師器壺(55)は、斜め上方に高めに立ち上がる口縁部をもつ。外面ハケメ調整、内面は口縁部ハケメ調整、体部はヘラ削りである。口径13.0cm、最大胴径16.8cmを測る。土師器壺(56)は、二重口縁状の口縁部をもち、肩部が張り気味である。肩部内面に指頭圧痕がみられる。口径10.0cm、最大胴径14.0cmを測る。土師器壺(57)は、口縁部が「く」字状に屈曲して立ち上がる小形のものである。体部外面下半はハケメ調整である。口径8.8cm、器高8.9cmを測る。土師器壺(58)は、口縁部がゆるやかに屈曲する小形のものである。口径7.8cmを測る。土師器高杯(59)は、杯部の底部と口縁部の境を垂下させる。杯部外面はハケメ調整、脚部はヘラ削りである。弥生土器甕(60)は、短い口縁部を外反させるもので、口縁端部側面に刻み目を施す。口径19.8cmを測る。以上10点は、川NR310出土である。

(4) 石製品

石器 61は、石庖丁で、長さ10.9cm、幅4.4cm、厚さ0.5cmを測る。粘板岩系の石材で、2トレンチ包含層から出土した。62・63は、石庖丁の破片とみられ、研磨面が残る。62には刃部が認められる。62はSX101、63は2トレンチ包含層出土である。64は、スクレイパーで、サヌカイト製である。長さ6.7cm、幅3.9cm、厚さ0.9cmを測る。SG107包含層出土である。65は、磨製石斧の破片で、多孔質の石材を使用している。残存長14.2cm、幅5.8cmを測る。2トレンチ包含層出土である。66は、長身の石鏃で、サヌカイト製である。長さ5.5cm、幅1.3cm、厚さ0.5cmを測る。1トレンチ包含層出土である。67は、全容は不明であるが、長身の石鏃の基部ともみられる。サヌカイト製で、残存長3.0cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmを測る。2トレンチ包含層出土である。68は、無茎の石鏃で、サヌカイト製である。調整は粗い。残存長2.4cm、残存幅2.1cm、厚さ0.3cmを測



第65図 石製品実測図

る。SD106出土である。69は、石鏃の基部もしくは石錐の一部かとみられる。サヌカイト製で、 残存長2.1cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmを測る。SD106出土である。70~85は、剝片である。材質は サヌカイトである。

玉類 勾玉(86)は、翡翠製で、長さ3.0cm、厚さ1.1cmを測る。穿孔は片側である。1トレンチの土坑SK130から出土した。ほかに伴う遺物が無く時期は不明であるが、材質や周辺の遺構、遺物の検出状況からみて、古墳時代前期を下るものではないと考えられる。

5. 小 結

今回の調査では、弥生時代前期から近世にかけての遺構を検出した。遺物としては、縄文時代 晩期の土器片なども出土している。

これまでの調査でも、この遺跡からは弥生時代前期の土器などが出土しており、南山城地域でも最も早く成立した弥生集落遺跡のひとつであることが想定されていた。今回も弥生時代前期の土器が出土した溝を確認している。ただ、今回確認した弥生時代の遺構は、全て溝もしくは川とみられるものである。古墳時代前期の川も確認しており、弥生時代から古墳時代前期頃にかけては、湿地状の居住には適さない場所であったものとも考えられる。このような状況や地形的にみて、その頃の居住地は、今回の調査地の南側および南西側ではないかと考えられる。なお、古墳時代前期の川NR310から出土した土器は、田辺地域においては類例が少なく、まとまった資料として注目される。

奈良時代の当地域は、官道および山本駅の設置が想定されている。今回の調査では、直接それらに関係する遺構は検出できなかった。ただ、2トレンチで見つかった斜行する溝は、官道の方向に規制された地割りに係わるものとも考えられる。

寛政9 (1797)年の年紀をもつ経図によると、1トレンチで検出した池SG107に当たると考えられる池が描かれており、「クスハラ池」という池の名称が記されている。この絵図によると、現在も残っている大きい用水池のほかに、今回見つかったような小さい池が30か所描かれている。付箋などの貼り込みがあり確認できない部分もあるが、現在の府道八幡木津線以東、木津川以西、普賢寺川以南、遠藤川以北の範囲内にこれだけの池が記されている。今回の調査では、このような小さな池の構造的な実態の一例を知ることができた。

また、これらの池には、池の名称とその所有者名が記されている。今回検出した池SG107と考えられる池にも、池の名称の他に「浅井様入」と記されている。浅井氏は、江戸時代に田辺地域に支配地を所有していた旗本クラスの小領主である。ほかの池にも公家、武家などのそれらの池に何らかの利権を有する支配者の名が記されており、これはそのまま江戸時代の南山城地域の複雑な支配形態を物語っている。今回検出した池SG107は、出土した皿(16)の年代観から、17世紀末頃おそくとも18世紀前半頃には存在していたものと考えられる。また、この池から出土した最も新しい遺物は、広東碗や端反碗などで、18世紀末頃から19世紀中頃のものである。明治期の印判手のものは含まれていない。このようなことから、この池は、徳川幕府の崩壊とともに機

能を停止して埋められたものと考えられる。絵図に記された小さい池の全てがそうであるとは言えないが、少なくとも今回検出した池についてはそのように考えられる。これは、絵図に「池」とのみ記された大きい池が、今に至るまで、または近年まで残存するのとは対照的である。今回検出したような小さい池は、巨視的にみると、徳川幕藩体制の領地支配に関連するものとも言えよう。これは、このような池の性格を考える上で重要な手がかりとなるものであろう。

(引原茂治)

- 注1 川端美恵・小西麻佐子・一森雄次・小野彰子・杉浦直子・柴田文恵・福田咲智子・杉浦亮介・合田 育代・富和秀幸・兵頭千帆・羽生奈津子・北森さやか・坂本由香・森川敦子・安田裕貴子・藤井矢 壽子・荻野冨紗子
- 注2 a、九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』 2000 p.142 b、国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告』第89集 下巻 2001 p.450
- 注3 今回参照した絵図は、かつて展示された時に京田辺市教育委員会の鷹野一太郎氏が撮影されたものを提供していただいた。原本は現在所在不明とのことである。

5. 国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡 平成13年度発掘調査概要

はじめに

国営農地再編整備事業「亀岡地区」は、亀岡市を貫流する大堰川(保津川)東岸の馬路町、千歳町、河原林町、保津町の未整地農地など635haを対象として、農家の経営規模の拡大と経営の合理化を図ることを目的として近畿農政局が区画整理と農地造成を行う事業である。

この地域には丹波国分寺(国史跡)、御上人林廃寺(国分尼寺推定地)、千歳車塚古墳(国史跡)など貴重な遺跡が点在することから、一部の遺跡については事業地区外とし、やむを得ず遺跡に影響を及ぼす地点については記録保存を前提とした発掘調査を実施することとなった。

調査は京都府教育委員会、亀岡市教育委員会が試掘調査を行い、遺跡が確認された地点を中心 として近畿農政局をはじめとする開発部局と十分な調整を行ったうえ調査範囲を確定し、近畿農 政局の依頼を受けて当調査研究センターが実施することとなった。

当調査研究センターが平成13年度に実施した調査は、保津車塚古墳(案察使1号墳)第2次調査、 案察使遺跡第4次調査の2遺跡である。現地調査は調査第2課課長補佐兼調査第1係長水谷壽克、 同主任調査員戸原和人、同専門調査員石尾政信、同調査員松尾史子、福島孝行、調査第3係調査 員村田和弘が担当した。

保津車塚古墳の調査は、平成13年9月4日から12月13日まで調査面積約860㎡を戸原・石尾が担当し、案察使遺跡は平成13年11月26日から平成14年3月8日まで調査面積約2150㎡を戸原・石尾・松尾・福島・村田が担当した。保津車塚古墳は平成13年12月1日に現地説明会を行い約250

名の参加者を得て盛況のうちに終了した。

現地作業においては、京都府教育委員会、 亀岡市教育委員会をはじめとする関係機関の 協力を得、また、保津町自治会、地権者、町 民の方々の御理解と御支援をいただいた。記 して感謝したい。

なお、本概要は保津車塚古墳について報告 し、案察使遺跡第4次調査(第67図)について は現在鋭意整理中であるため次年度報告す る。

なお、発掘調査に係る経費は、全額、農林 水産省近畿農政局が負担した。



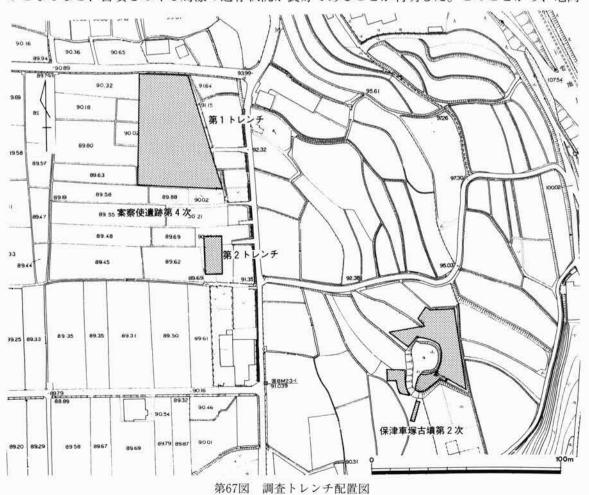
第66図 調査地位置図(1/25,000)

保津車塚古墳(案察使1号墳)第2次

1. 調査経過

保津車塚古墳は亀岡市保津町社ノ下に所在する。保津車塚古墳(案察使1号墳)は、愛宕山系の 牛松山から南西にのびる丘陵の先端部に形成された舌状台地上に立地し、古墳時代中期から後期 にかけて築造された19基(前方後円墳1基、円墳18基)からなる案察使古墳群の盟主墳と考えられ ていた前方後円墳である。保津車塚古墳が位置する南東部丘陵には、全長60mの前方後円墳(E 2号墳)をはじめとする19基からなる保津山東古墳群が位置する(第66図)。

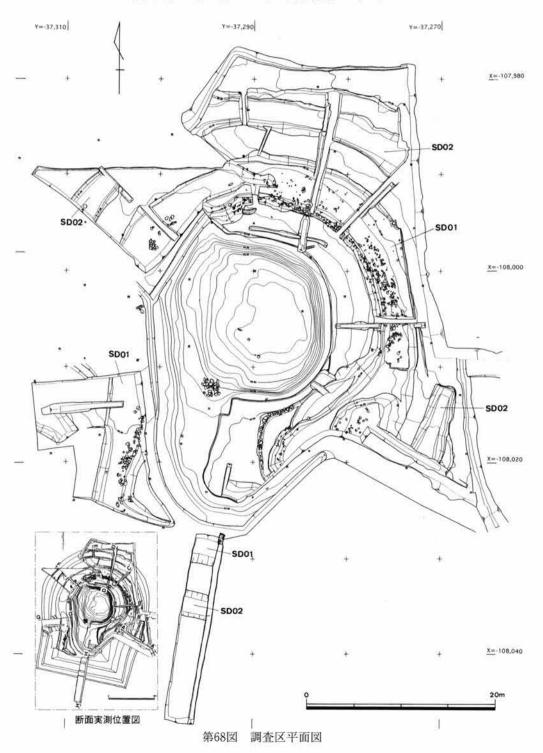
保津車塚古墳の現状は、後世の開墾による削平が著しく、水田部に径約15mの円丘が残る程度であった。この円丘部については農地造成の地区外として保存されることとなり、水田部について平成10年度に亀岡市教育委員会による試掘調査が行われた(第1次)。その結果、墳丘東部(丘陵側)において周濠の一部と外護列石が確認されたため、その水田を中心に当調査研究センターが約600㎡の調査を実施することとなった(第2次)。調査を開始したところ、周濠を確認し、その外側では地山とみられる砂礫層の堆積がみられた。ところが、その砂礫層が耕作に伴う床土であることが判明したため、掘削したところ、周濠の外側に、もう1重の周濠がめぐることが明らかとなるなど、古墳をめぐる周濠の遺存状況が良好であることが判明した。このことから、亀岡

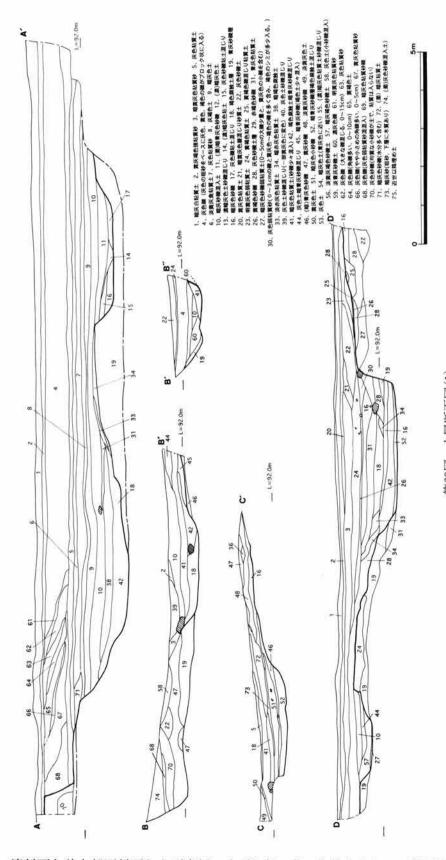


市教育委員会、京都府教育委員会、近畿農政局と協議を行い、墳丘の遺存状況および規模確認の ため、古墳の周囲に約260㎡の拡張調査を実施した。

2. 検出遺構

調査は、前方後円墳と考えられているこの古墳の後円部の周囲と古墳の西側で、一段低い水田の墳丘が削平を受ける可能性のある地点で行った。調査によって検出した遺構は、墳丘の裾部とその回りをめぐる2重の周濠、濠と濠の間をめぐる堤(外堤)である。





(1)墳丘

築造方法(第68~ 70図) 今回の調査 では、墳丘が保存工 リアに残るため全体 的な様相を知る調査 にはなっていない が、対象地内に残存 する墳丘の一部につ いて濠の底から裾部 に向かって断ち割り を行った。A·B· D地点で検出した地 層を観察すると、濠 側の第27・47層で黄 色の粘土と礫を約1 mの幅で、30cmほど の厚さにドーナツ状 に積み上げ、堅く叩 き締めている。つぎ にその内側に灰色の 砂礫(第22・28層)を 盛土し、さらにその 上を第25層の黄色の 粘土で覆っている。 墳丘は、この作業を くり返しながら外か ら内に向かって盛土 を構築したと考えら れる。

外表施設(図版第 46) 後円部側の周

濠斜面と前方部西斜面および東側のくびれ部で葺石を検出した。原位置を保っていたのは後円部 斜面とくびれ部で、前方部側では基底部の石以外は崩落していた。葺石は、拳大から人頭大の円 礫・角礫を用い、長側面を表にして貼り付けている。濠の中に多量の石が崩落していたので、古 墳築造時には墳丘斜 面の全面に葺かれて いたと考えられる。

このようにして造営された墳丘の後円部は、濠の底で測ると直径約26.8mに復原できる。

くびれ部およびテ ラス(図版第46) 墳 丘の東側くびれ部で、 テラスおよび墳丘2 段目の葺石3段分を 検出した。後円部の 東南部では、墳丘部 への削平が著しく、 地表下約1.0mまで垂 直に削り取られてい るが、くびれ部では 前方部2段目の墳丘 が削平されているも のの、テラスを含む 1段目の墳丘は削平 を受けていなかった。 このため、墳丘2段 目の葺石も一部で残 っていた。くびれ部 の基底石には人頭大 の角礫を使用し、礫 の間には小さな礫を 充塡していた。

テラスは、くびれ

土層断面図(2)

部で幅約1.8m、後円部側で幅約1.5m、前方部側で幅約0.5mを測り、ほぼ水平面をなしていた。 この地点が今回の調査の中で、唯一テラスを検出した場所であったが、盛土が砂礫中心の粘質土 であったこともあり、埴輪や木製品などを樹立した掘形は検出することができなかった。

(2)内濠SD01(図版第47)

濠は丘陵側にあたる後円部の北東で最も高く、平野部側の前方部に向かって低くなっている。 東北の尾根筋側では幅約5.5m、深さ約0.8mの規模を確認した。南東側では幅約6.5m以上、深 さ約1.26mを確認した。前方部側では、南西の角で幅約4.2m、前方部の正面で約3.5mと最も狭 くなり、深さも0.5mを測る。

埋土はおおむね最上層の灰色~暗灰色の砂礫層や礫混じりの粘質土層からは、中世の瓦器椀、 貿易陶磁器が出土しており、この古墳の濠が最後に埋まった時期を示している。中間の灰色~青 灰色の粘土層からは、平安時代以前の土器が出土している。また、その下層では、周辺の樹木の 葉や植物が積もった腐植土層の上層から、平安時代の須恵器、古墳時代の須恵器や土師器ととも に、皿や建築部材などの木製品が出土している。このことから平安時代までは内濠が地表にその 姿を留めていたと考えられる。さらに、濠の東側陸橋部以北では、最下層の初期に埋まった腐植 土混じりの砂礫層中から楯形木製品がまとまって出土した。

(3) 陸橋部

墳丘の東側で検出した。SD01を基底部の幅約4.0mで地山を掘り残して土手状に堤を築いた ものである。この陸橋部を境に、前方部側の濠底は後円部側より約0.5m深くなっている。墳丘 の西側の濠でも、前方部側が後円部側より約1.2m深くなっていることから、東側と同じ施設が あったと考えられる。

(4)外濠SD02(図版第47)

後円部側の北東よりで幅約3.5m、深さ約0.4mの規模を確認した。北西では幅約3.5m、深さ約1.2mの規模を確認した。前方部の正面では、内濠と同じく約2.5mと最も狭くなり、深さも0.4mを測る。

埋土は、おおむね3~4層の灰色~暗灰色の砂礫層である。比較的短期間に埋まったと考えられ、地点によって部分的に粘土層の堆積を認めるのみである。

(5)外堤

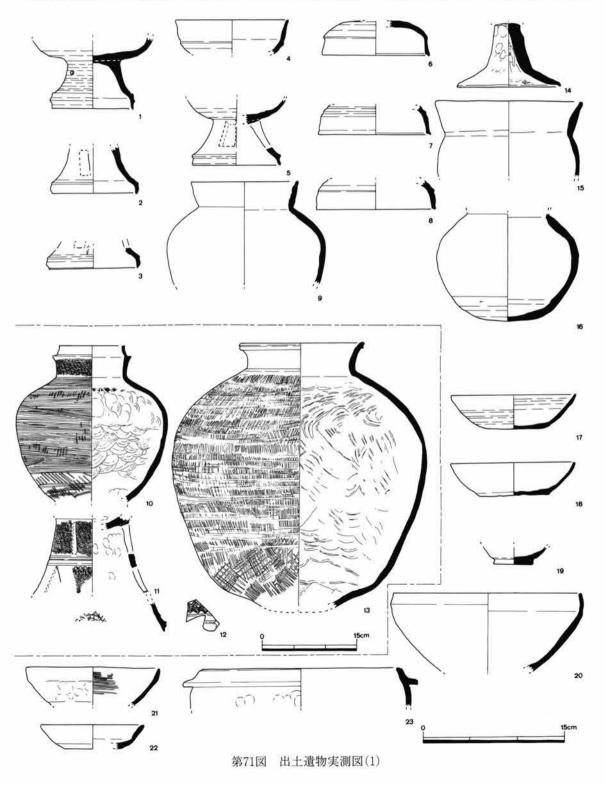
2条の濠の間の幅約2.5~3.0mの部分である。上面に黄褐色粘土層による盛土で造成していることが認められる。

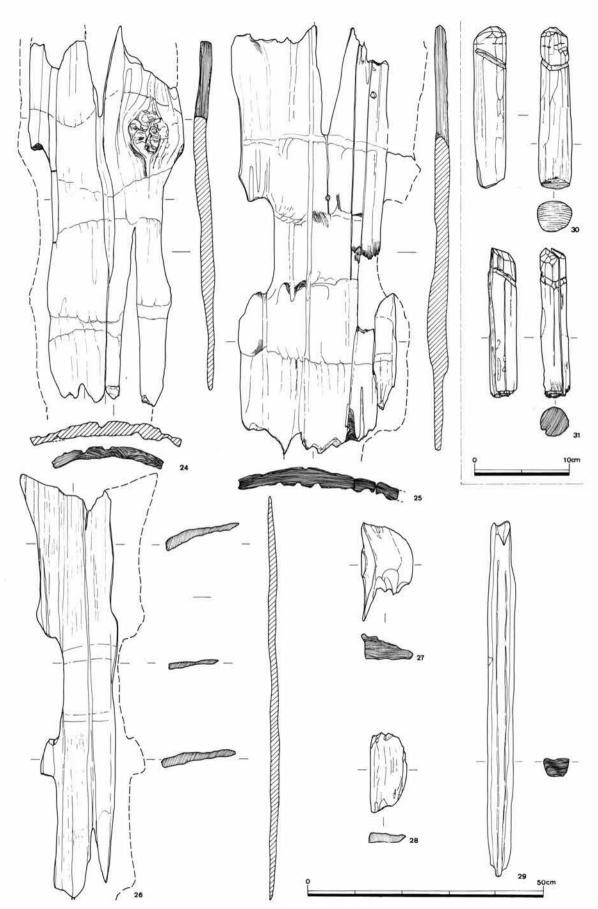
3. 出土遺物(第71·72図 図版第51·52)

調査によって出土した遺物の大部分は内濠SD01からのものである。外濠SD02の底からは、 少量であるが古墳時代の須恵器が出土している。SD01では、上層からは、中世の瓦器椀、貿易 陶磁器が出土しており、中層からは、平安時代以前の土器が出土している。下層では、平安時代 の須恵器、古墳時代の須恵器や土師器とともに、皿や建築部材などの木製品が出土している。最 下層からは楯形木製品がまとまって出土した。

土器は、 $1 \sim 4 \cdot 6 \cdot 7 \cdot 9 \sim 15 \cdot 17 \sim 23$ がSD01から出土しており、5は墳丘の盛土中からの出土である。 $8 \cdot 16$ はSD02から出土した。木製品はすべてSD01から出土している。1は、

最下層の砂礫層からの出土である。脚径8.7cm、脚高5.0cmを測る。脚の上位に径6.0mmの円孔を3方に穿っている。脚の端部は上下に突出させ、端面には断面三角形の凸帯をめぐらす。脚部の周囲にはカキ目を施す。2・3は、それぞれ、脚径9.0cm・9.3cmを測る。脚部に長方形の透しを3方にあける。脚端部の凸帯はなだらかになる。4は、口径11.8cmを測る高杯の杯部である。5は墳丘部埋土中から出土した高杯である。6・7は須恵器杯蓋である。このうち7は口径10.9cmを測り、焼成などの観察から10の蓋になる可能性がある。9は須恵器甕、10~12は台付き有蓋壺





第72図 出土遺物実測図(2)

である。蓋受部は内傾して立ち上がり、端部は明瞭な屈曲を残す。体部外面はタタキの後、横方向のカキメを施し、内面のタタキはナデ消されている。脚部は透し穴2段が残り、上段には長方形、下段には三角形の透し穴を3方に施す。頸部と脚部にはクシ描きの波状文を施している。13は須恵器の甕である。口径18.8cm、器高40.0cmを測る。後円部は断面三角形の凸帯を施し、内面のタタキ目はナデ消しを施している。14は土師器高杯の脚部、15は外面ハケ調整の土師器甕である。8・16はSD02出土の須恵器杯蓋と須恵器壺の体部である。17~20は中層から出土した。17は、口径13.2cm、器高3.5cmを測る須恵器杯、18は口径13.2cm、器高3.5cmを測る須恵器杯である。19は底部糸切りの緑釉陶器である。20は口径19.8cmを測る須恵器鉢である。21~23は上層からの出土である。21は口径14.2cmを測る瓦器椀、22は口径10.8cm、器高2.5cmを測る青磁皿である。23は口径20.6cmを測る瓦質の羽釜である。

24~26は、石見型の楯形木製品である。本製品は部位により、最上部の角状突起部、その下の 第1段帯、中央帯、第2段帯、第3段帯、基部とよばれるが、今回の出土品では、いずれの製品 も腐食により基部を欠損している。24は、幅32.9cm、高さ78.6cm、厚さ3.0cmを測る。25は、幅 33.89cm、高さ89.39cm、厚さ4.09cmを測る。両製品とも大木の木表を表面として選材しており、 木の表面のカーブを巧みに利用し楯の形状を表現している。表面は、第1段帯と第2段帯を残し 他の部位を削り込んで立体的に表現し、側面は、角状突起部、中央帯、第3段帯を抉り込み、第 1段帯と第2段帯に鰭状の突起を表現している。材は肉眼での観察では高野槙と考えられる。26 は、幅20.8cm、高さ89.2cm、厚さ2.4cmを測る。角状突起部および中央帯をはさんだ第1段帯、 第2段帯の遺存状態が良く、頂部の抉りを中心に反転すると突起部で幅約30cmの形状を復原する ことができる。本品は、上記2例にくらべ、幅や厚さが小さく、追柾の板材を使用していること や、第1段帯と第2段帯の凸帯の表現が弱いなどの特徴が認められることから形式的に細分され ると考えられる。27・28は、笠形木製品の笠部である。27は、縦20.7cm、横10.9cm、高さ5.45cm を測る。28は、縦17.3cm、横7.8cm、高さ2.1cmを測る。29は笠形木製品の柱部である。太さ約 5.6cm、長さ74.4cmを測る。下部は杭状に削り出し、上部は軸受けの枘を加工している。材は芯 去材を用いている。30・31は、木偶である。径約3.2~3.5cm、長さ15.6~16.8cmを測る。芯去材 を用いて頭部および首を削り出し、30では目の表現を施している。

4. まとめ

今回の調査では、いままで不明であった保津車塚古墳の墳形や規模がはじめて明らかになった。 発掘調査によって前方後円墳の規模が明らかになったのは亀岡市内では初めての事である。調査 の成果を簡単にまとめると、以下の4点になる。

- ①古墳の規模 全長約52.7m、墳丘長約36.0m、後円部の直径約26.8m、前方部復原幅約20m、前方部長約9.2mを測る。古墳の主軸は、N-10°20′-Eの傾きを持っている。
- ②2重の周濠 調査によって検出した濠は2重にめぐるものであった。周濠は、丘陵側で高く、 平野部側に向かって低くなっていた。内濠は、後円部側と前方部側で約1.4mの比高差を持って

京都府遺跡調査概報 第103冊

いるが、墳丘の東側で陸橋部を設けて濠底の深さを調節していることから、後円部側と前方部側とは水位を違えた水濠となっていたと考えられる。外濠は、後円部側と前方部側で約2.2mの比高差を持っているが、濠内の堆積状況や内濠のような施設を検出していないことなどから、全体に水をたたえるものでなく空濠であったと考えられる。

③墳丘施設 墳丘は、後円部・前方部とも2段に築き、斜面に葺石を施す。埴輪は1点も出土 しなかったが、内濠から楯形木製品が多数出土しており、少量ながら笠形木製品も出土している ことから、墳丘は木製樹物によって飾られていたと考えられる。

④古墳の築造時期 出土した須恵器高杯や壺はTK47からTK23の特徴を示しており、5世紀の後半から終わり頃にかけてのものと考えられる。

この古墳が造営された時代、亀岡市内の各地域の首長墓としては、馬路町坊主塚古墳、篠町桝塚古墳に代表される一辺30~40m級の方墳が主として築かれている。その後、6世紀に入り、千歳町に全長約82mの前方後円墳、千歳車塚古墳が地域全体を支配する首長墳として築かれる。

今回の調査で、5世紀後半に方墳と同規模の前方後円墳が確認されたことは、当地域の首長墓 を考えるうえで、貴重な成果である。

(戸原和人)

調査参加者 青木政幸・緒方信幸・川口庸史・黒田道崇・杉原実・西村治郎・山口卓也・浅田育裕・草剪 大蔵・小山亜美・迫間茜・西田大樹・本間賢司・前川聡・山本茜・後藤朋子・関口睦美・牧澤敏 子・俣野明子・松元順代・村上典子・粟路大樹・石川禧子・伊豆田佐知枝・井本典子・大西市三郎・大西和子・草剪和美・栗林笑子・小林聡・関口トシ子・西田千代和・古谷すが・前川百合子・村上福治・山口アキョ・脇上妙子

参考文献

「市内遺跡発掘調査報告書 国営農地再編整備事業関連遺跡発掘調査-保津車塚古墳・出雲遺跡-」 (『亀岡市文化財調査報告書』第45集 亀岡市教育委員会) 1998

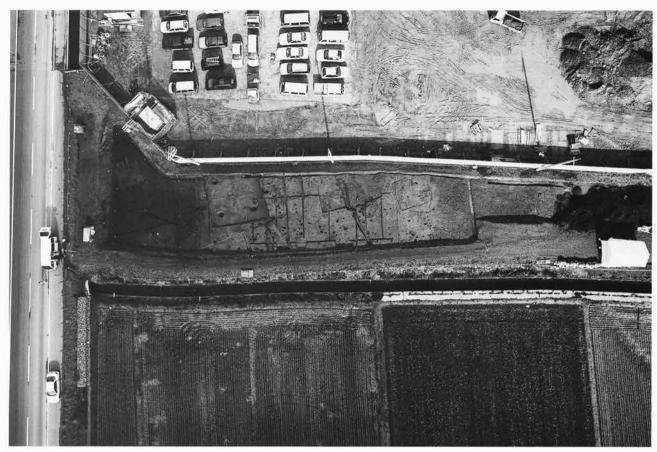
屋木英雄「Ⅱ調査・研究報告 請田神社裏山古墳群発見の経緯について」(『亀岡市文化資料館報』 第7号 亀岡市文化資料館) 1999

「小立古墳発掘調査成果発表資料」(財)桜井市文化財協会・桜井市教育委員会 2000.7.29 小篠原遺跡「林ノ腰古墳の発掘調査」(『滋賀考古』第18号 滋賀考古学研究会) 1997 栗東町出土文化財センター調査研究報告会資料「木の埴輪-滋賀県の事例を中心に一」栗東町出土 文化財センター・財団法人栗東町文化体育振興事業団 平成13年3月10日(土) 西藤清秀「四条古墳と古墳のまつり」 2000.4.30

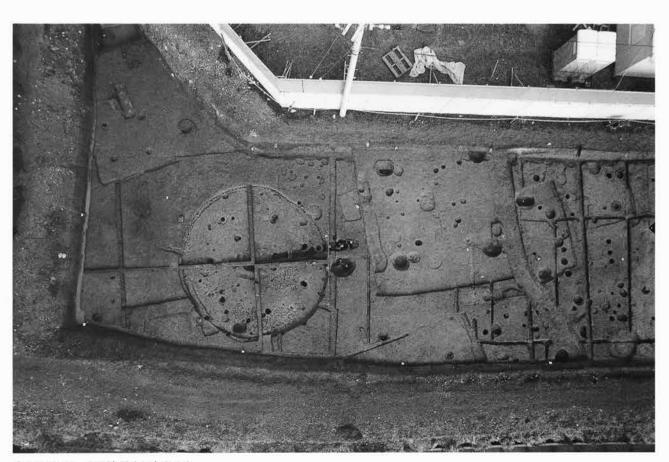
「光州月桂洞1号墳」(『全南地域古墳測量報告書』全羅南道) 2000

図 版

図版第1 池上遺跡第8次

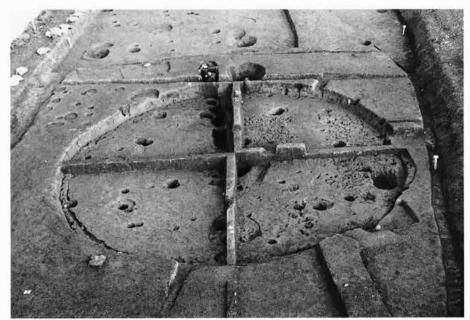


(1)調査地全景(上空から)



(2) S H 140・108遠景(上空から)

図版第2 池上遺跡第8次



(1) S H140近景(西から)



(2) S H140入口部近景(北から)

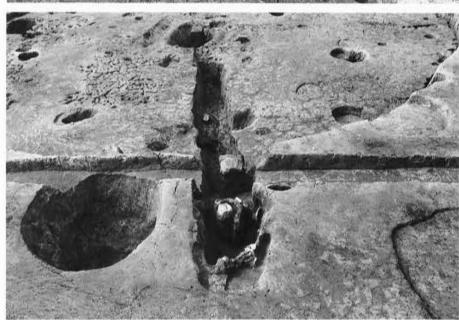


(3) S H140中央土坑堆積状況 (南から)

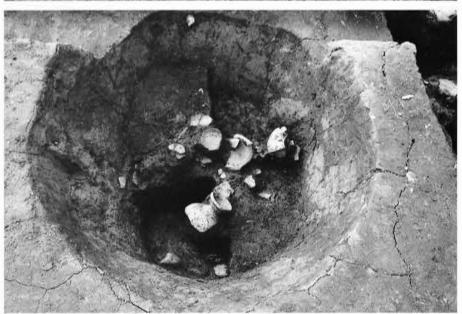
図版第3 池上遺跡第8次



(1) S D132近景(南東から)

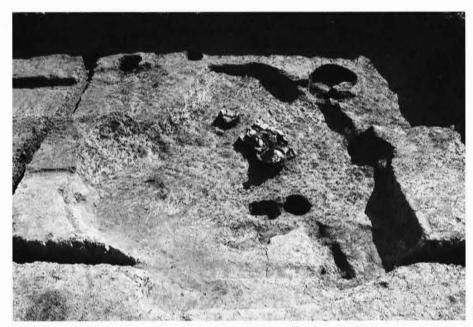


(2) S D101 · S K139近景 (東から)



(3) S K139近景(東から)

図版第4 池上遺跡第8次



(1) S K105近景(北から)



(2) S K105堆積状況(北から)



(3) S H122近景(東から)

図版第5 池上遺跡第8次



(1) S H01・02近景(南東から)



(2) S H01近景(南から)



(3) S H01竈近景(南から)

図版第6 池上遺跡第8次



(1) S H02近景(北から)



(2) S H02竈近景(南から)

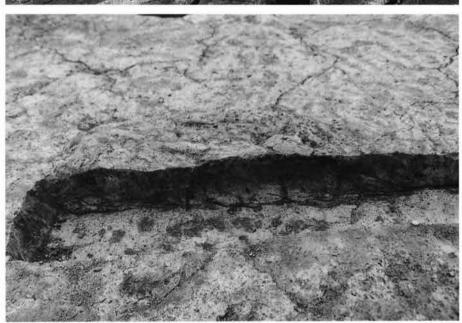


(3) S H02竈半掘状況(東から)

図版第7 池上遺跡第8次



(1) S H108近景(東から)



(2) S H108内焼土断ち割り状況 (北から)



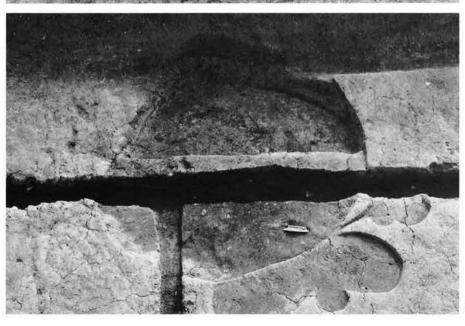
図版第8 池上遺跡第8次



(1) S H115近景(南から)

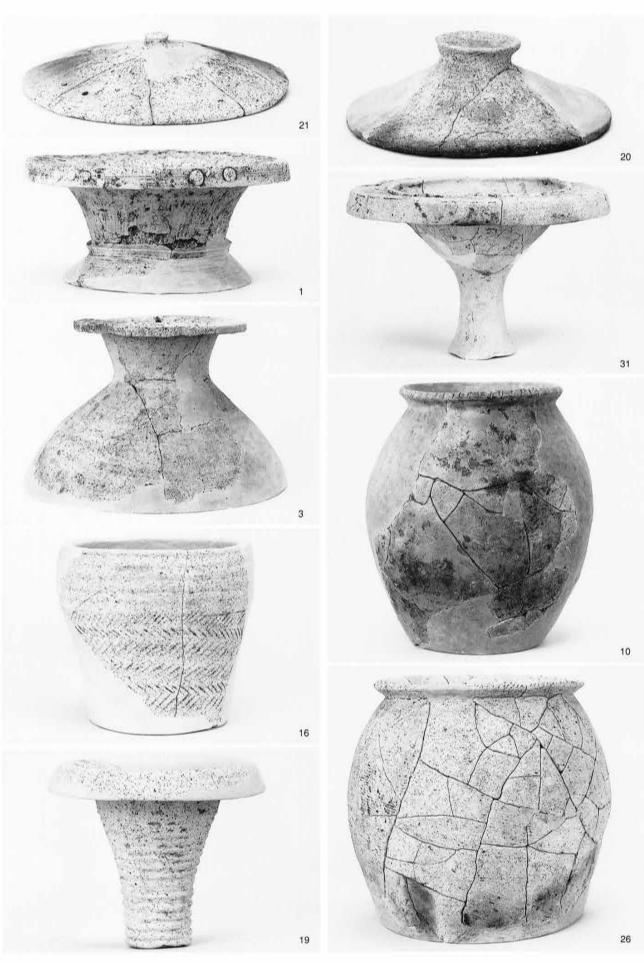


(2) S H152近景(南から)



(3) S K104近景(北から)

図版第9 池上遺跡第8次

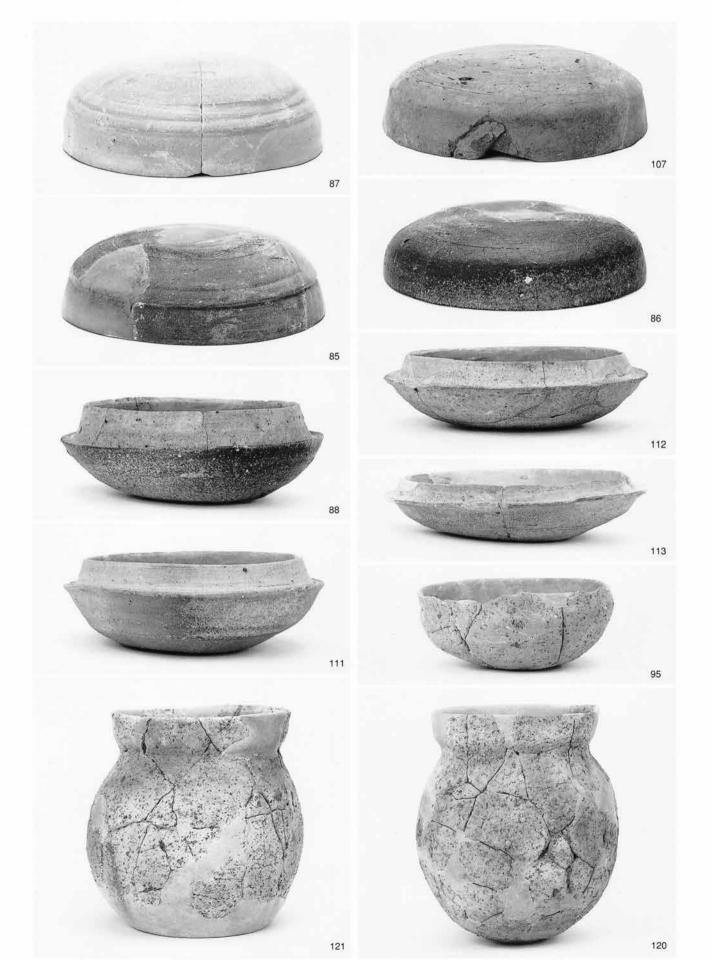


出土遺物(1)

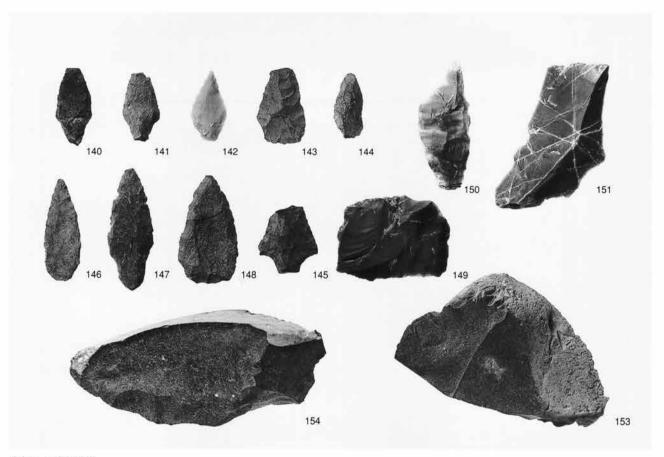
図版第10 池上遺跡第8次



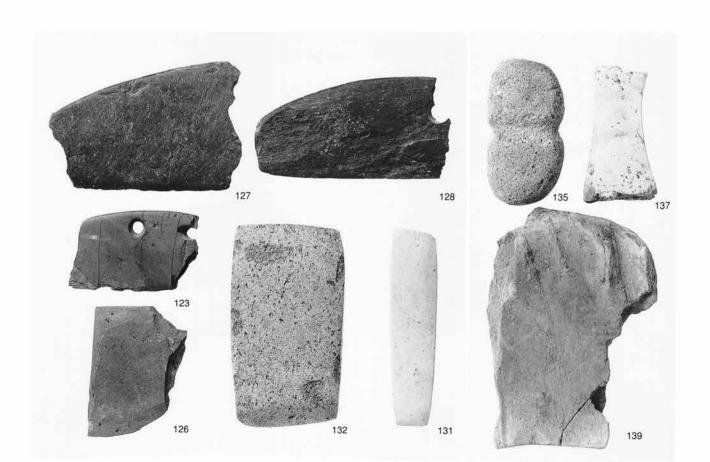
図版第11 池上遺跡第8次



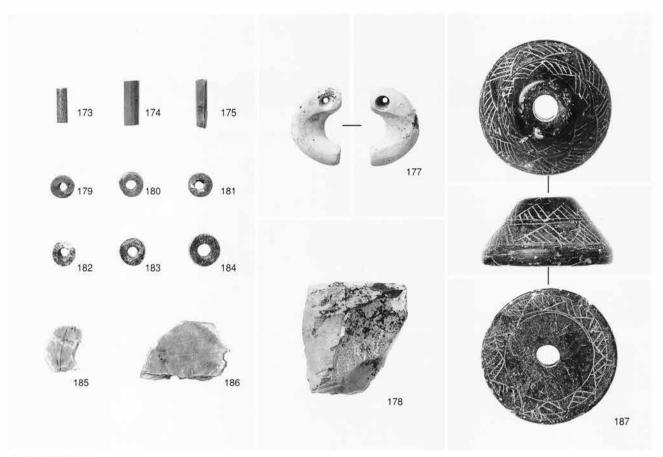
図版第12 池上遺跡第8次



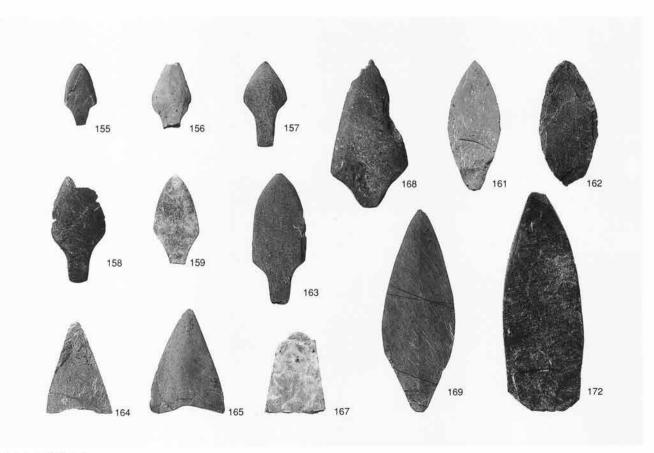
(1)出土遺物(4)



図版第13 池上遺跡第8次



(1)出土遺物(6)



(2)出土遺物(7)

図版第14 池上古里遺跡第2次



(1)調査地全景(東から)

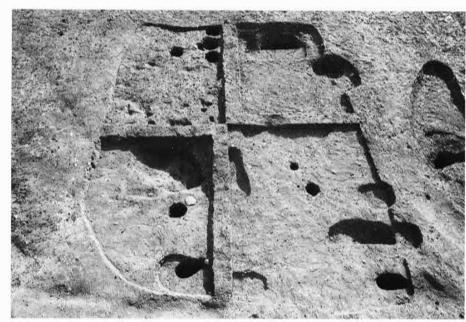


(2)調査地東部近景(東から)



(3) S H24近景(南から)

図版第15 池上古里遺跡第2次



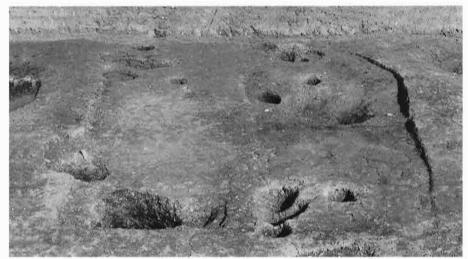
(1) S H12近景(北から)



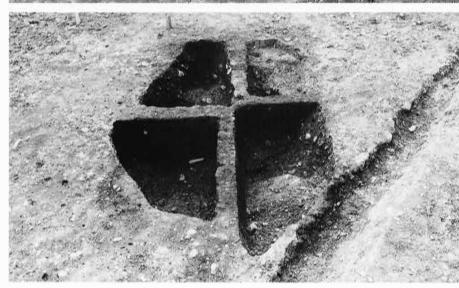
(2) S H23近景(北から)



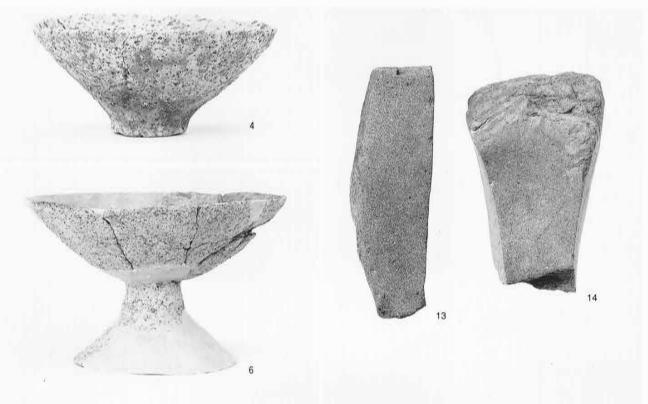
図版第16 池上古里遺跡第2次



(1) S H12近景(南から)



(2) S H23北側土坑近景(北から)

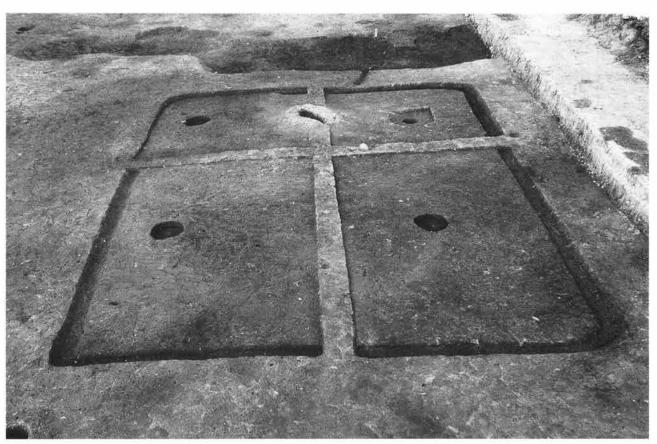


(3)出土遺物

図版第17 杉北遺跡第7次

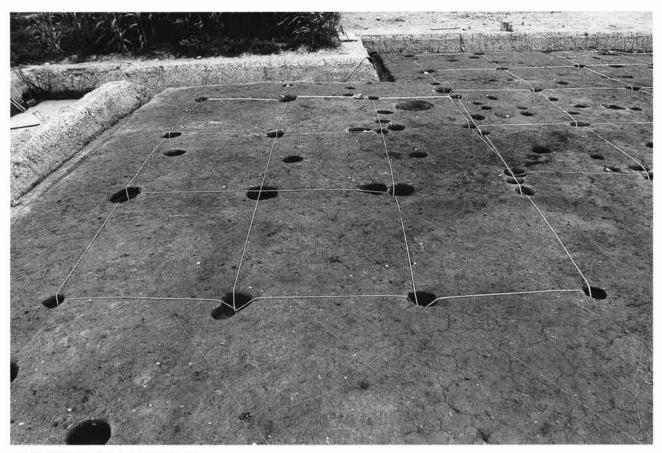


(1)調査地全景(北東から)



(2)竪穴式住居跡SH01(北西から)

図版第18 杉北遺跡第7次

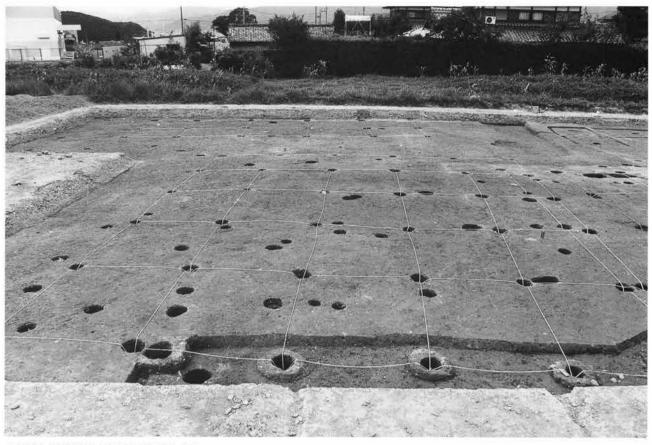


(1)掘立柱建物跡SB04(南西から)



(2)掘立柱建物跡SB05(南西から)

図版第19 杉北遺跡第7次

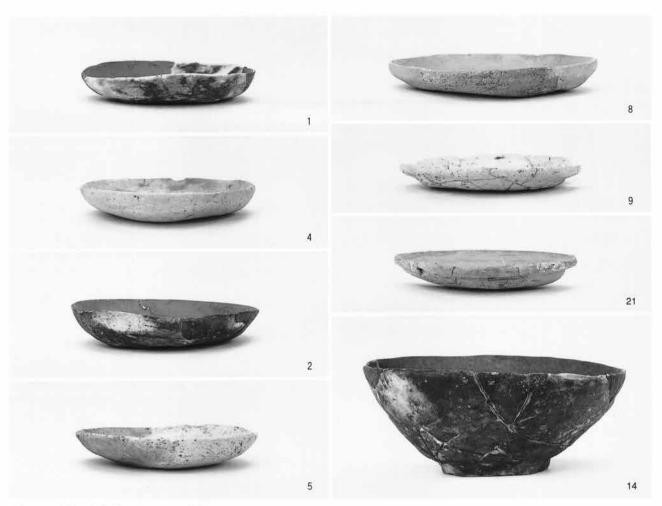


(1) 掘立柱建物跡 S B 06(北東から)

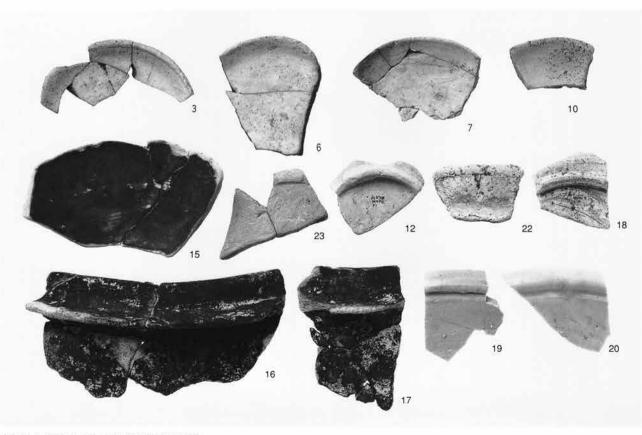


(2)掘立柱建物跡SB07(北西から)

図版第20 杉北遺跡第7次



(1)出土遺物 1 (番号は実測図に対応)



(2)出土遺物 2 (番号は実測図に対応)

図版第21 里遺跡第2次



(1)調査地遠景(北東から)

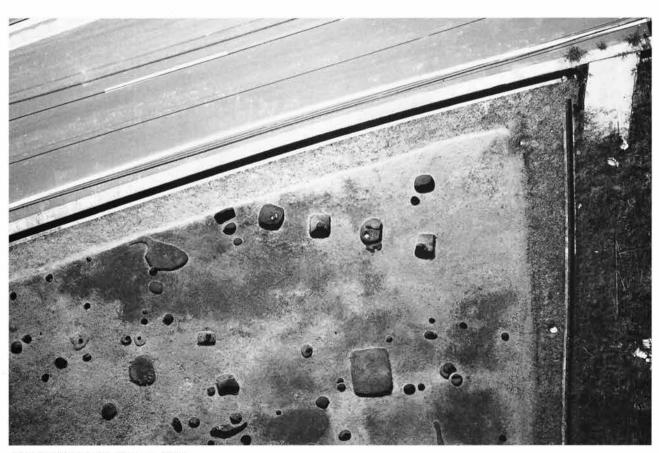


(2)調査地遠景(北から)

図版第22 里遺跡第2次



(1)調査地全景(上が北)



(2)掘立柱建物跡1全景(上が北)

図版第23 里遺跡第2次



(1)掘立柱建物跡2全景(上が北)

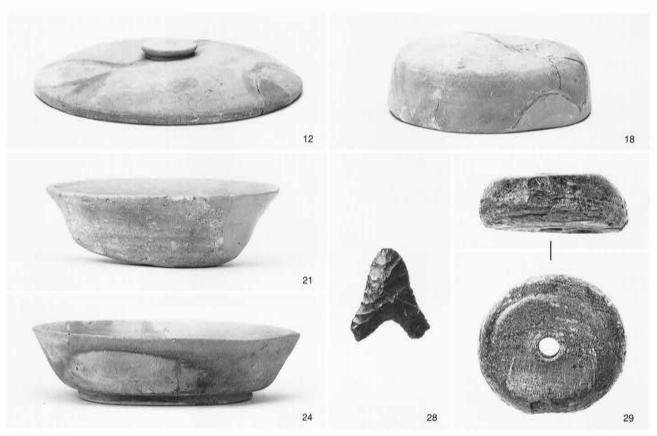


(2)掘立柱建物跡全景(南西から)

図版第24 里遺跡第2次

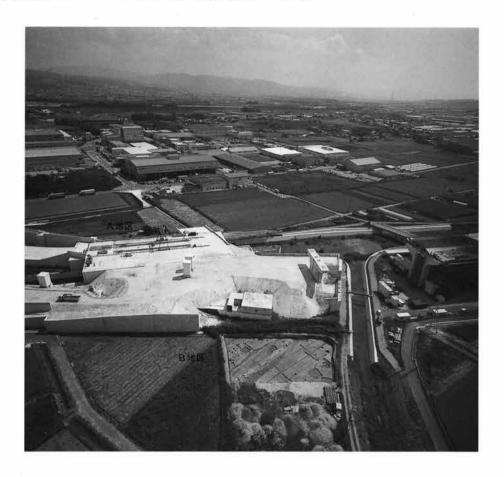


(1)土坑48検出状況(西から)



(2)出土遺物

図版第25 内里八丁遺跡第16・17次



(1)調査地全景(西上空から)



(2) B地区第3遺構面全景 (北上空から)

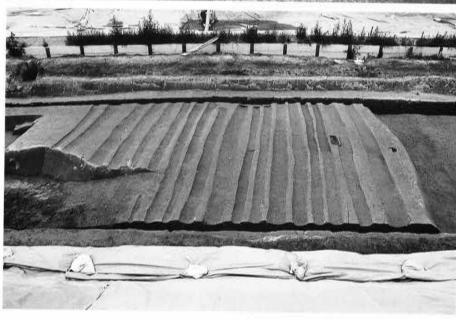
図版第26 内里八丁遺跡第16・17次



(1) A地区調査前(東から)

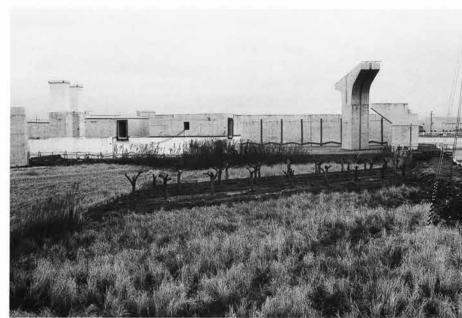


(2) A地区南トレンチ全景 (西から)



(3) A地区南トレンチ島畠 2 (西から)

図版第27 内里八丁遺跡第16・17次



(1) B地区調査前(西から)

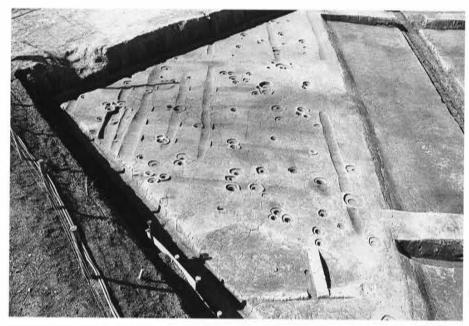


(2) B地区第2遺構面(南から)



(3) B地区第2遺構面(北から)

図版第28 内里八丁遺跡第16・17次



(1) B 地区第2 郁雄面西側 素掘り溝群・建物群(南から)

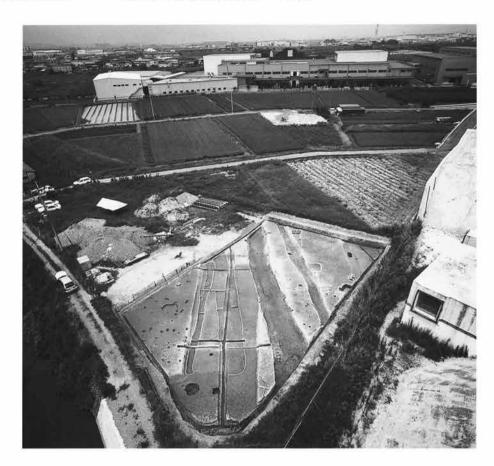


(2) B地区第1遺構面素掘り溝群 (南から)

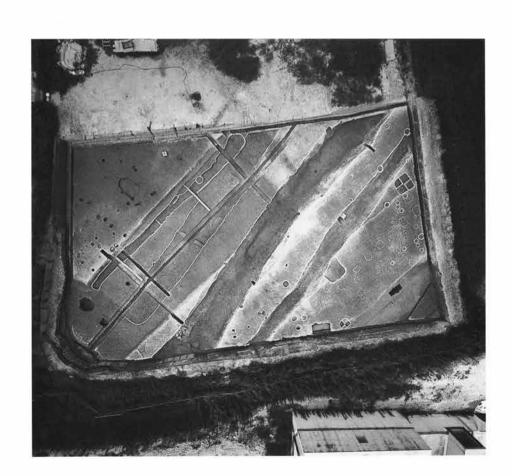


(3) B 地区第3遺構面全景 (南から)

図版第29 内里八丁遺跡第16・17次



(1) B地区第3遺構面全景 (南上空から)



(2) B地区第3遺構面全景 (右上が北)

図版第30 内里八丁遺跡第16・17次



(1) B地区 S D 205・247・258 (北から)

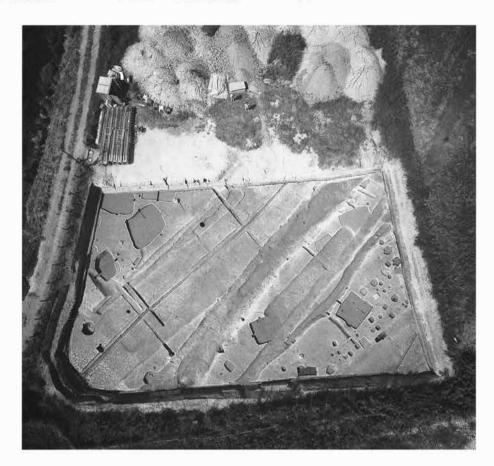


(2) B地区SD247(南から)

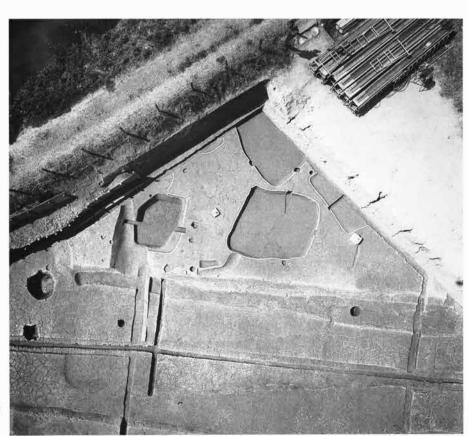


(3) B地区 S D 247中央部断面 (南から)

図版第31 内里八丁遺跡第16・17次

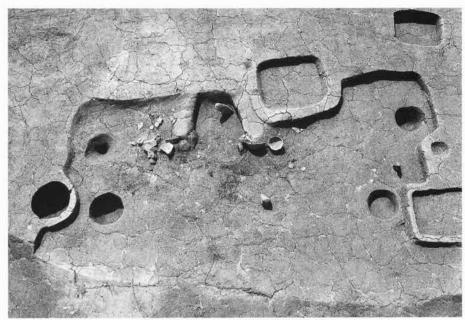


(1) B地区第4遺構面全景 (右上が北)

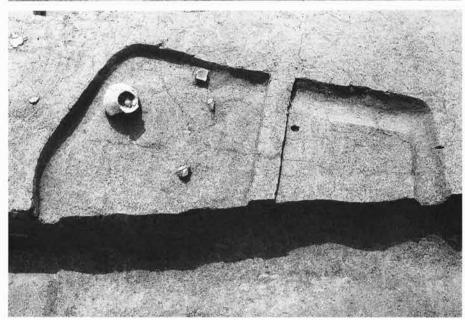


(2) B 地区第 4 遺構面竪穴式住居 跡群

図版第32 内里八丁遺跡第16・17次



(1) B地区 S H 3032(東から)

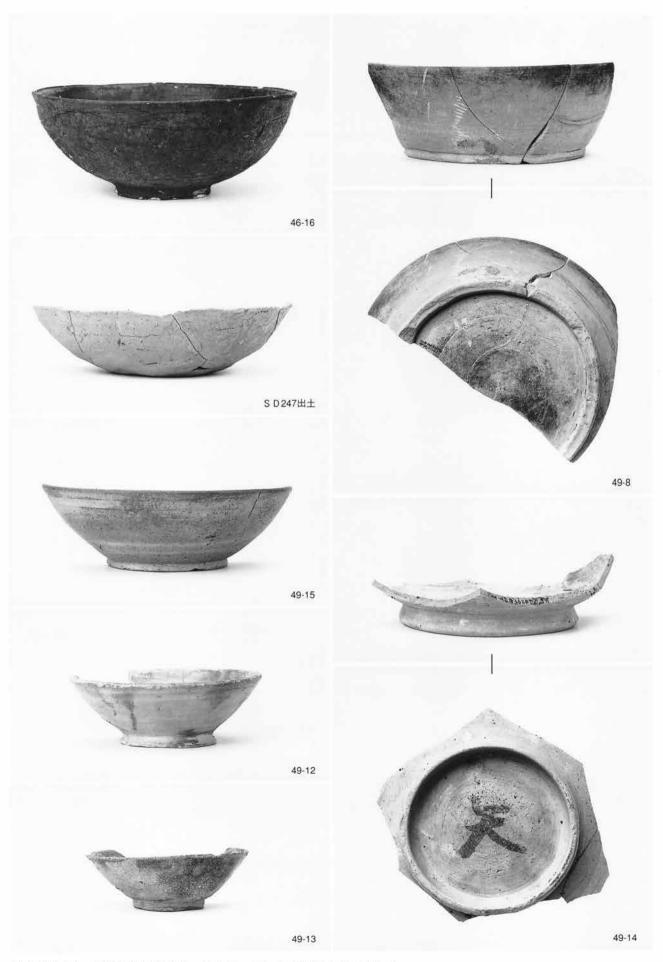


(2) B地区 S H335遺物状況 (東から)



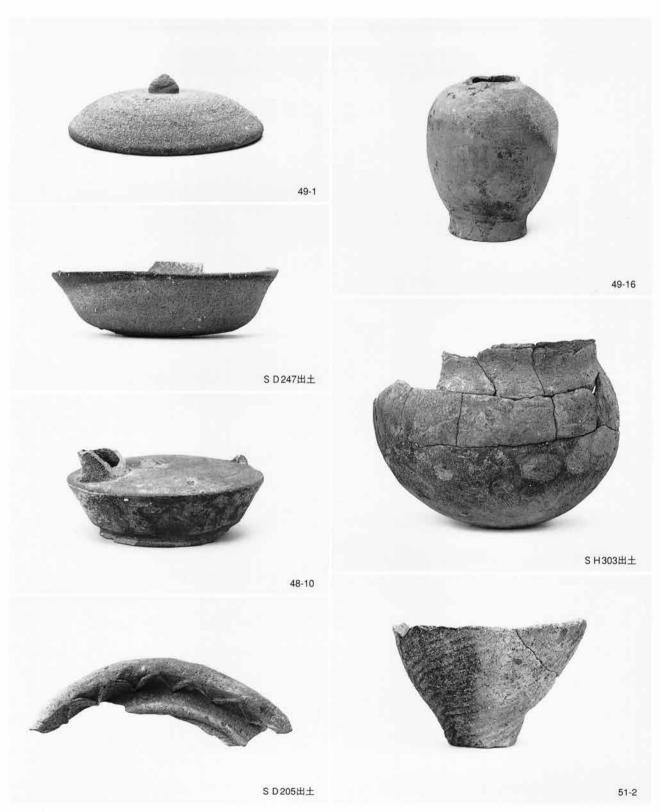
(3) B地区 S H350遺物出土状況 (南西から)

図版第33 内里八丁遺跡第16・17次



出土遺物(1) 番号は挿図番号と一致する。ないものは出土地を記した。

図版第34 内里八丁遺跡第16・17次

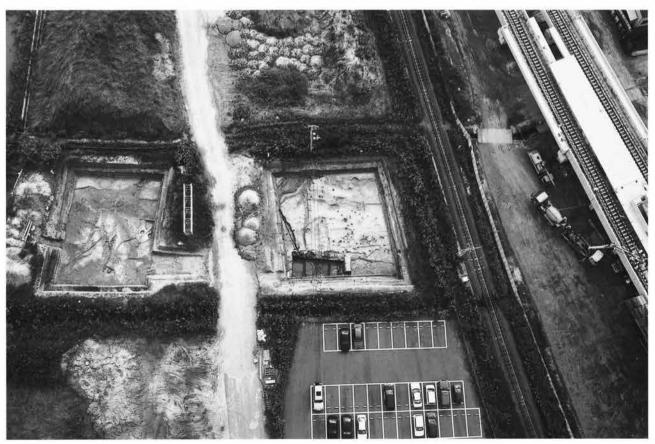


出土遺物(2) 番号は挿図番号と一致する。ないものは出土地を記した。

図版第35 三山木遺跡第4次



(1)調査地遠景(南上空から)



(2)調査地全景(北上空から)

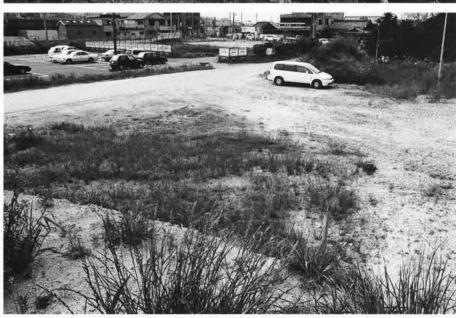
図版第36 三山木遺跡第4次



(1)1トレンチ調査前全景 (北東から)

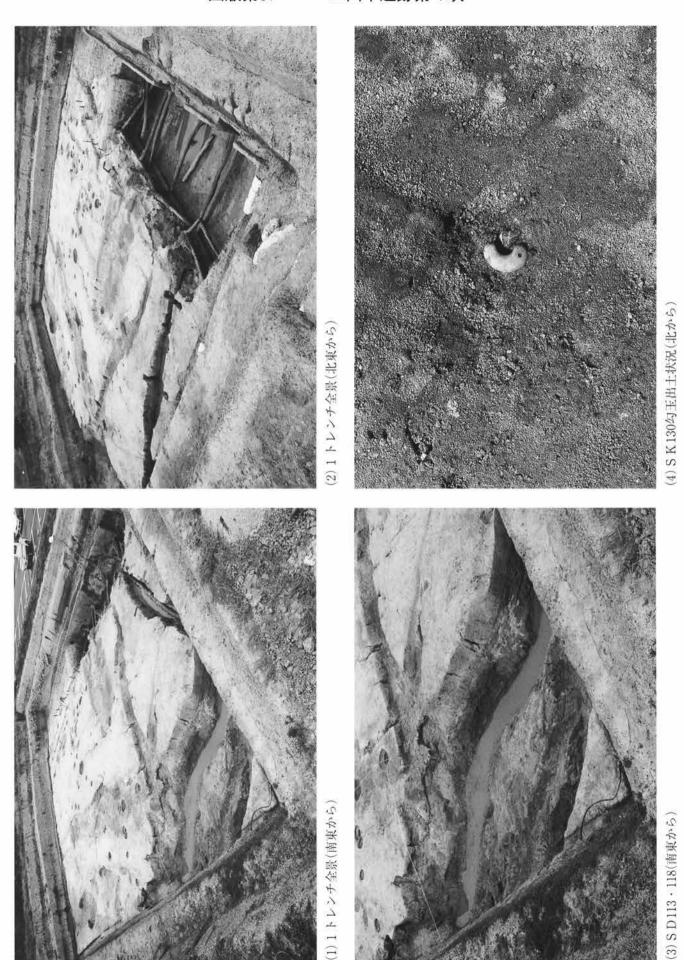


(2) 2 トレンチ調査前全景 (北から)



(3) 3トレンチ調査前全景 (南東から)

図版第37







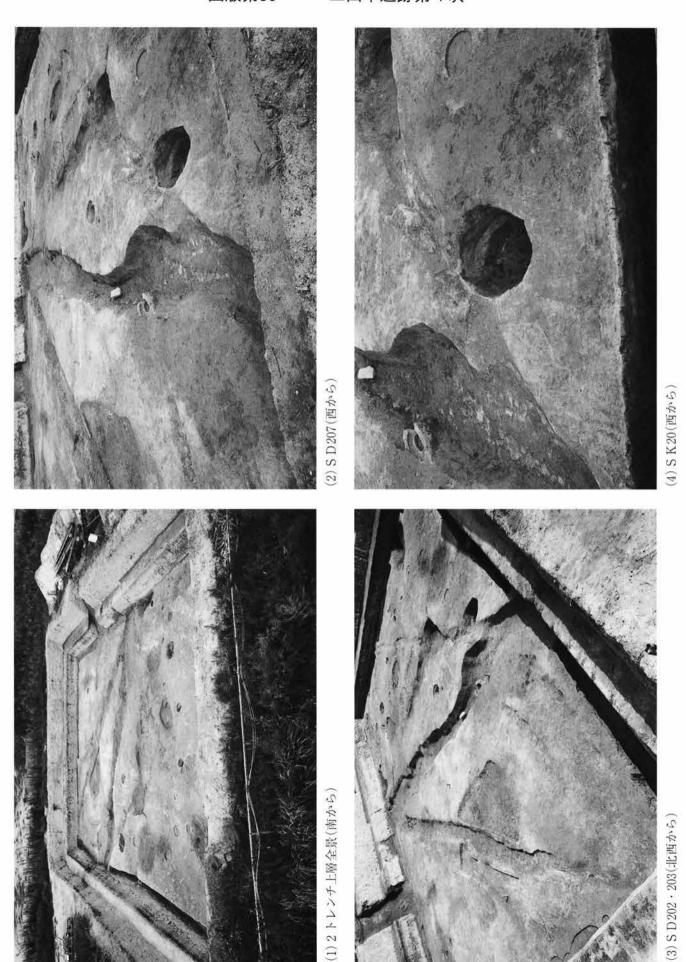
(4) S D105(北西から)

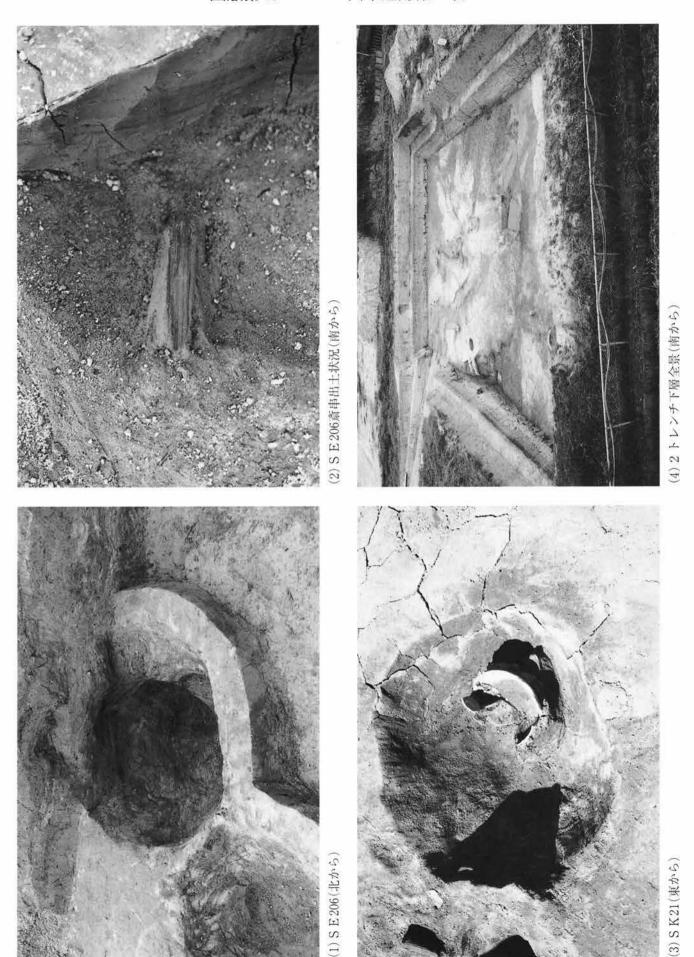




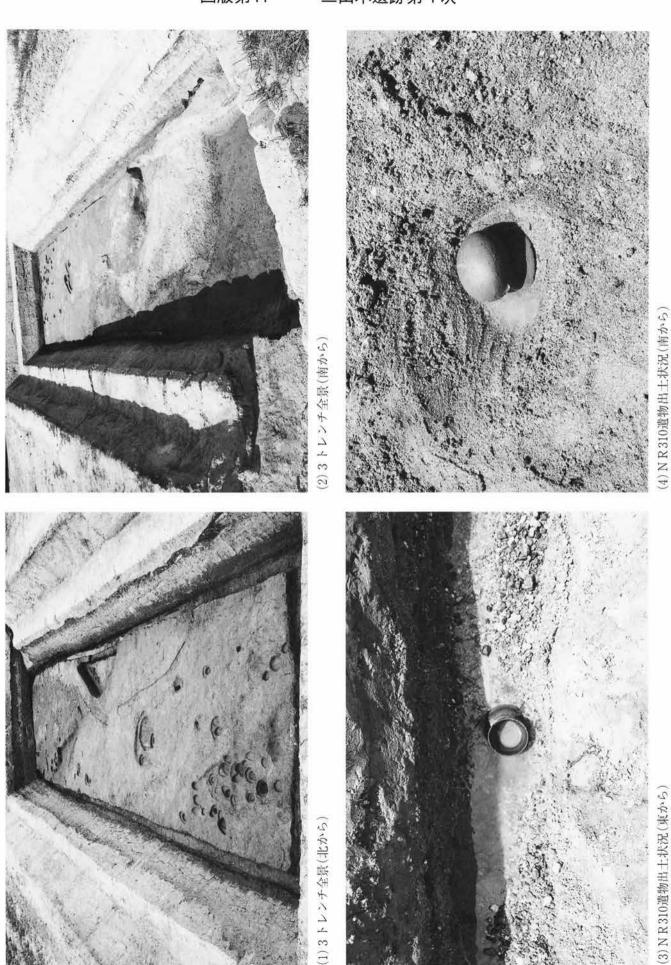


(3) S G 107 (西から)

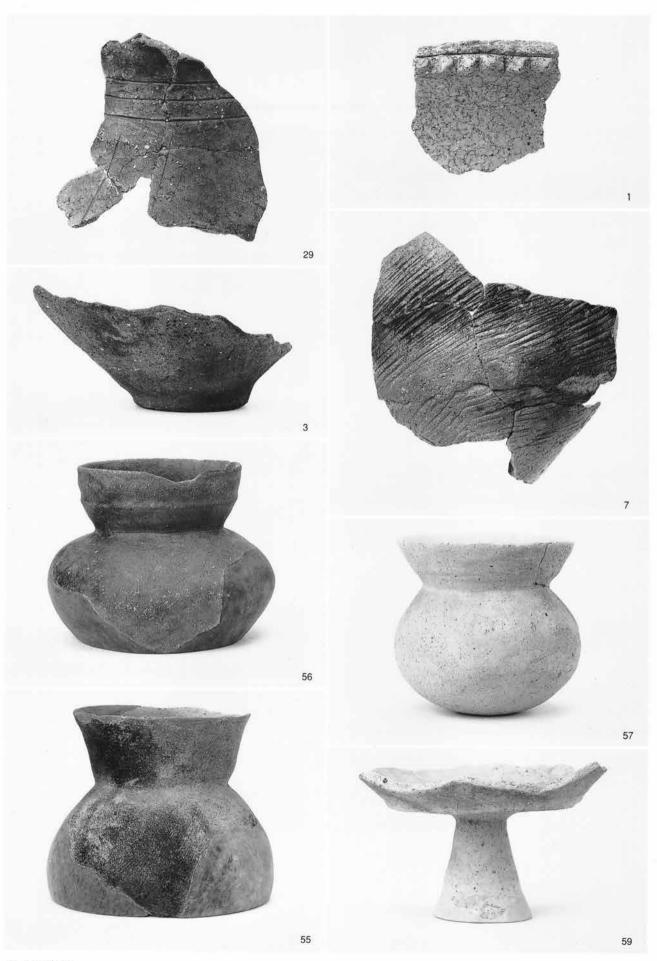




図版第41

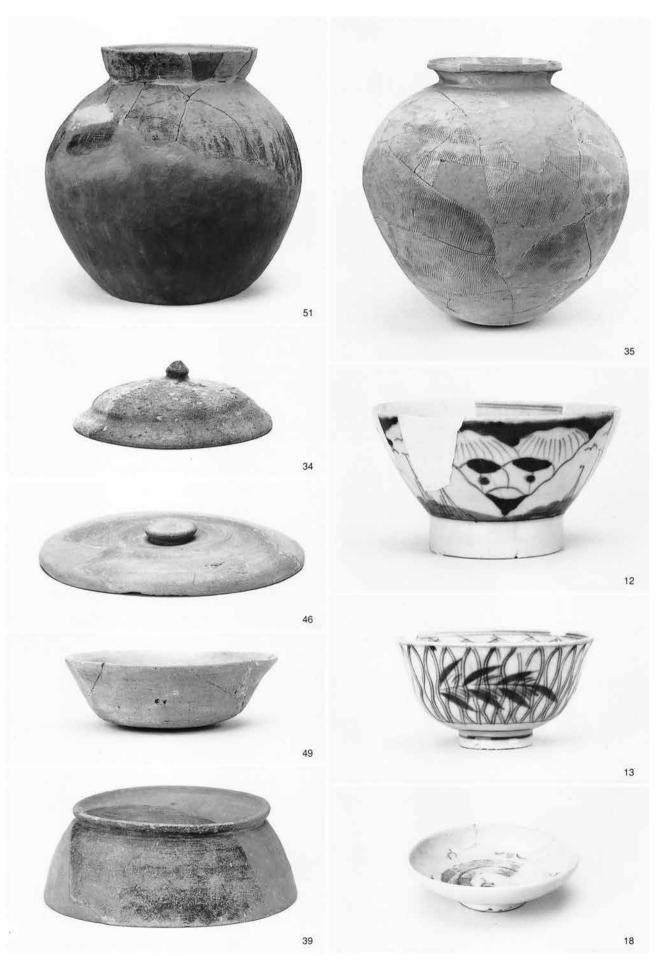


図版第42 三山木遺跡第 4 次



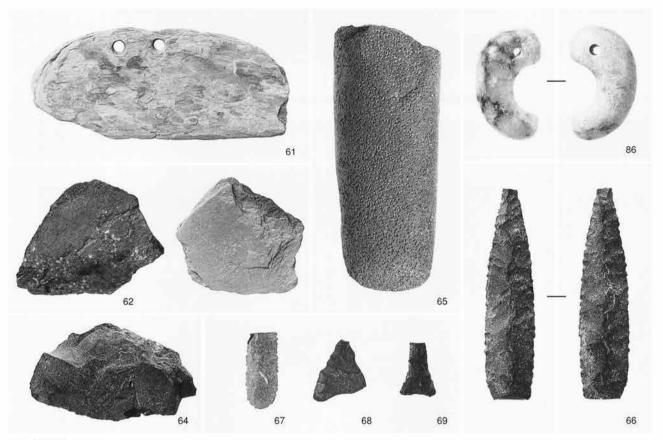
出土遺物(1)

図版第43 三山木遺跡第4次

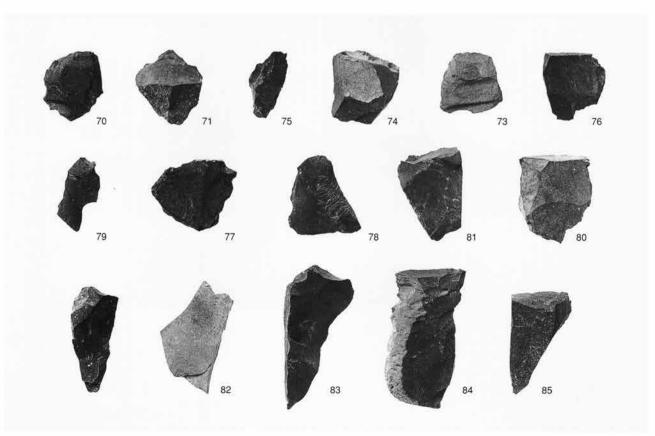


出土遺物(2)

図版第44 三山木遺跡第 4 次



(1)石製品



図版第45 保津車塚古墳(案察使 1 号墳)第 2 次



(1)調査地遠景(西から)



(2)遺構検出状況(東から)

図版第46 保津車塚古墳(案察使 1 号墳)第 2 次



(1)くびれ部葺石およびテラス検出状況(東から



(2)前方部周濠および葺石検出状況(北西から)

図版第47 保津車塚古墳(案察使 1 号墳)第 2 次

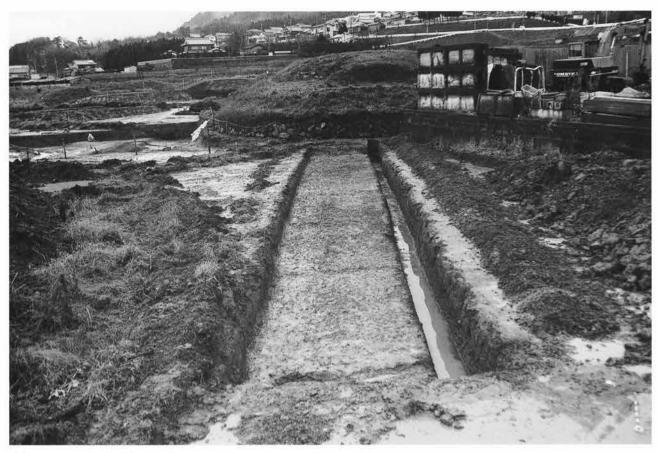


(1)内濠SD01北断面(G-G'地点)(南から)



(2)外濠SD02北断面(B-B'地点)(南から)

図版第48 保津車塚古墳(案察使 1 号墳)第 2 次



(1)前方部確認調査区(南から)



(2)前方部基底部検出状況(左が北)

図版第49 保津車塚古墳(案察使 1 号墳)第 2 次

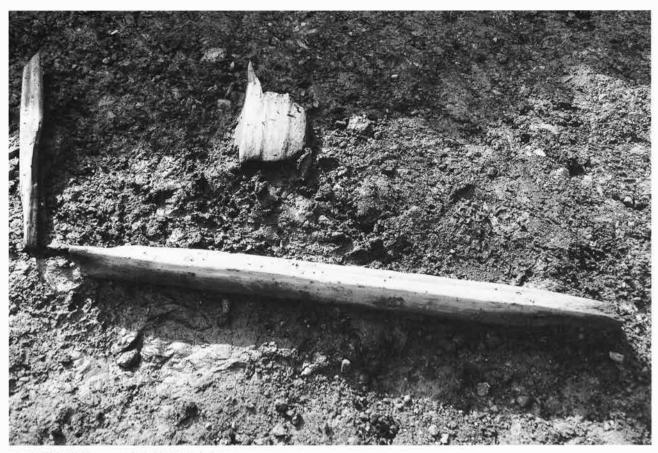


(1) 楯形木製品25出土状況(東から)



(2) 楯形木製品24出土状況(東から)

図版第50 保津車塚古墳(案察使 1 号墳)第 2 次

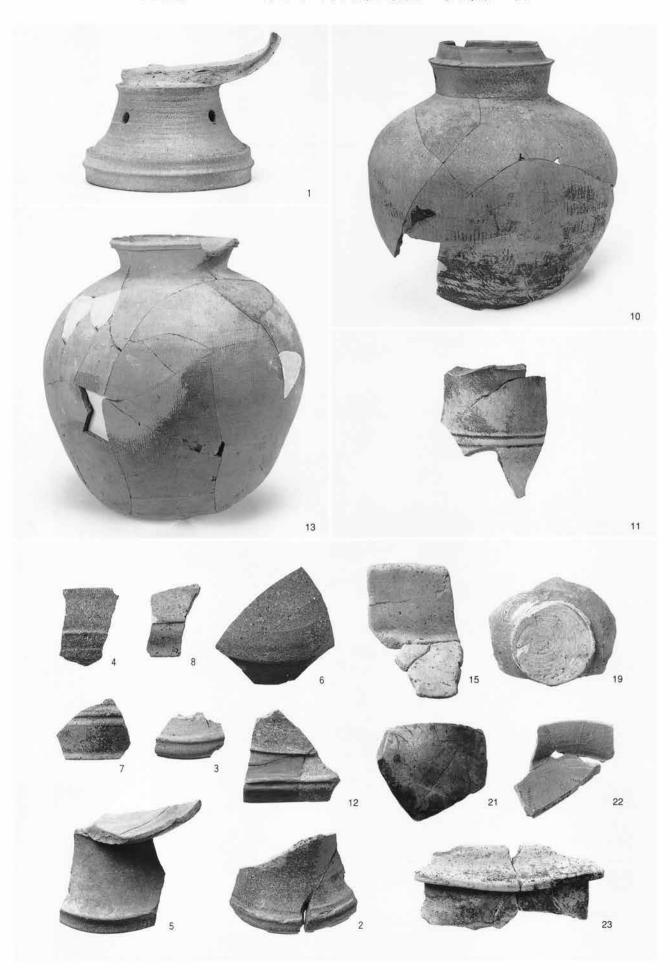


(1) 笠形木製品27・29出土状況(東から)



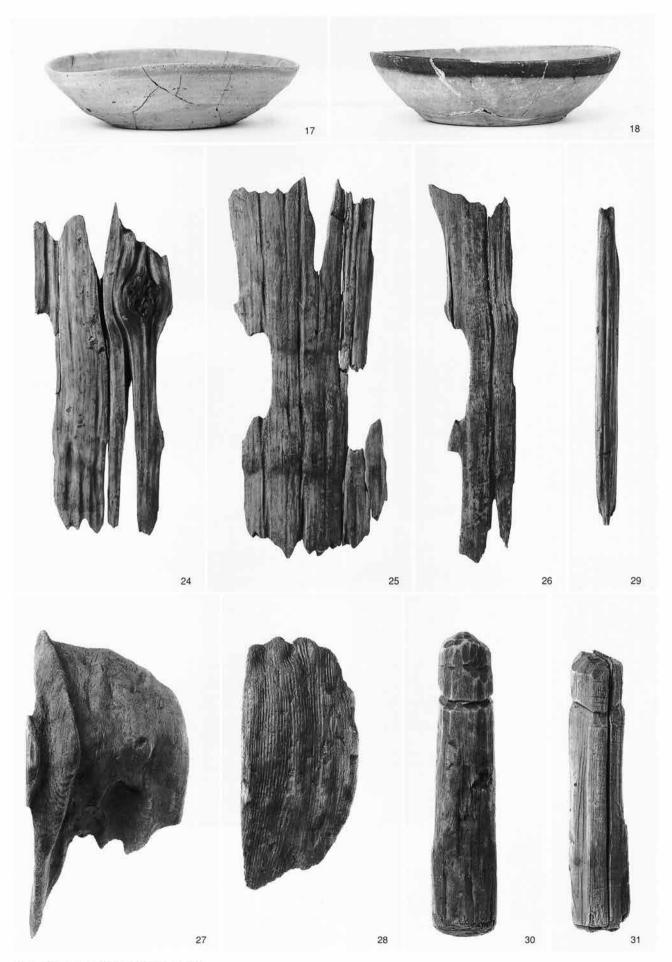
(2) 須恵器10・13出土状況(東から)

図版第51 保津車塚古墳(案察使 1 号墳)第 2 次



出土遺物(1)(番号は実測図に対応)

図版第52 保津車塚古墳(案察使 1 号墳)第 2 次



出土遺物(2)(番号は実測図に対応)

報告書抄録

S 10 VS 1			_										
ふりがな													
書 名													
副書名													
巻 次 シリーズ名	专知位惠 研制本	air £17											
	京都府遺跡調査概報												
シリーズ番号	第103冊												
編著者名	/H4 /	ケイレロナ 三田 オ	CERTS L. Y.	h									
編集機関 所在地	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3 Phone 075(933)3877												
発行年月日	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3 Phone 075(933)3877 西暦 2002 年 3 月 28 日												
2151132 1102 127	ふりがな コード			北緯			東経			38 大 #H BB	細木高往	細木匠匠	
ふりがな 所収遺跡名	がな 所在地	市町村	遺跡番号		北村			果粧		調査期間	調査面積 m	調查原因	
	ふないぐんやぎちょ	111 11 17	退助笛り								111		
きだいはちじ池上遺跡第		402		35*	4	52″	135°	32′	25″	20001102 	720	農地整備	
いけがみこさ といせきだい にじ 池上古里遺 跡第2次	ふないぐんやぎちょうこさと 船井郡八木町古里	402		35°	4'	52″	135°	32′	33″	20001102	1,250	農地整備	
すぎきたいせ きだいななじ 杉北遺跡第 7次	かめおかしあさひ ちょうすぎ・ひのく ち 亀岡市旭町杉・樋 ノ口	206		35°	4	37"	135°	33′	47″	20010704	600	ほ場整備	
さといせいだ いにじ 里遺跡第2 次	かめおかしあさひ ちょうみのだ 亀岡市旭町美濃田	206	172	35°	4'	16"	135°	34′	8″	20010823	600	ほ場整備	
ちょういせき だいじゅうろ く・じゅうな なじ	やわたしうちさとこ あざいまふく・ひゅ うがどう 八幡市内里小字今 福・日向堂	210	37	34°	51′	38″	135°	44'	17"		1,700	道路建設	
きだいよんじ	きょうたなべしみや まぎ 京田辺市三山木	342		34*	47′	41"	135°	47′	18"	20010521 20011026	1,300	土地区画整理	
ほづくるまづ かこふんだい にじ 保津車塚古 墳第2次	かめおかしほづちょ うしゃのした 亀岡市保津町社ノ 下	206	42	35°	ľ	33″	135°	35′	29"	20010904	860	ほ場整備	

所収遺跡名	種別 主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項
池上遺跡第8次	集落	弥生 古墳	竪穴式住居跡·溝·土坑 竪穴式住居跡·掘立柱建物跡	弥生土器・石器・玉 類 土師器・須恵器・玉 類・紡錘車・砥石	玉生産
池上古里遺 跡第2次	集落	古墳前期	竪穴式住居跡	土師器	
杉北遺跡第 7次	集落	古墳中世	竪穴式住居跡 掘立柱建物跡	土師器・須恵器 緑釉陶器・瓦器椀・ 土師器皿	
里遺跡第2 次	集落	弥生・古墳 奈良	なし 掘立柱建物跡・土坑	弥生土器・土師器 土師器・須恵器	
内里八丁遺跡第16·17次	集落	弥生·古墳 飛鳥·奈良·平安	竪穴式住居跡 溝・掘立柱建物跡・井戸・素 掘り溝	弥生土器・土師器 土師器・須恵器・灰 釉陶器・緑釉陶器・ 輸入陶磁器・瓦器・ 瓦	
三山木遺跡 第4次	集落	弥生 古墳前期 飛鳥 奈良 平安 江戸	溝・川 川 溝 溝・井戸・土坑 掘立柱建物跡 池・溝	弥生土器・石器 土師器・勾玉 須恵器 須恵器・円面硯・斎 串 陶磁器	
保津車塚古 墳第2次	前方後円墳	古墳	周濠・外堤	須恵器・土師器・盾 形木製品	

京都府遺跡調査概報 第103冊

平成14年3月28日

発行

(財)京都府埋蔵文化財調査研究 センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3 Phone (075)933-3877 (代)

印刷 (株) 大 光 社

〒604-0086 京都市中京区小川通丸太町 下ル中之町76

Phone (075)222-1333 (代)